

---

# 魔女の夜

ロリコン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔女の夜

### 【著者名】

Z2406Z

### 【作者名】 ロリコン

### 【あらすじ】

魔女を殺したことにより、次代の魔女を継承することになつた黒崎望と、その周囲の話。

首が切断される。

頭と身体を隔離する赤い線が首に円を描き、線の内側からはスプリンクラーのように細粒な血液が霧吹きに飛び出してくる。赤い線は幅を徐々に広げていく。首の下から駆け上る血液の圧力に負けた女の頭が、遂に空中へと跳ね上がつた。頭を失つた鋭利な切断面から、掘り出された噴泉の勢いに、血飛沫が吹き出した。

宙を飛ぶ魔女の頭は、闇から織り出したように黒く長い髪を振り散らしながら、夜空をぐるぐると飛んでいく。女の首はやがて、鈍い音を立てて着地し、地面をゴロゴロと転がつた。首の切断面がアスファルトと触れたときに、横転が止む。土中から生首が生えてきたような光景が出来上がる。

魔女は閉じていた目をパチリと開いた。両目のまなじりから、魔女は血の涙を垂れる。

「あーあ、アタシもヤキが回つたもんだ。夜の闘いに敗北しちまうなんてね。死んで当然だ」

唇に血を吐き飛ばしながら、魔女はつぶやいた。悲壮感も焦燥感もなく、それはただただ平坦で、本心をこまかすよつた棒読みの台詞だった。

魔女の首と触れる地面の間から、真っ赤な血がじわじわと染み出していく。地面に広がる血液の色が、周囲の闇夜を溶け込ませながら、光を反射しない漆黒に変わり始める。悪い魔女は首を刎ねられてなお、現世に及ぶ魔力を用いて夜の闇を吸収し、己の存在を継続させるつもりと見えた。黒崎望は魔女の行為を禁止した。

「魔女。あなたの肉体と魂はわたしの復讐心の前に敗れた。これを

認めなさい。いくらあがいてもお前の運命は変わらない。静寧なる心で死を受け入れなさい。そうすれば、天界の裁定者に計らわせ、お前に輪廻を約束しましょう」

「へえ。あんた案外やさしいのねえ」

魔女は血まみれの目をゆっくりと閉じた。そこには意がなく、静寂を含んでいた。再び聞くことはないだらうと、光景を目にしていた誰にも思わせた。魔女の首からアスファルト上に拡散していた血液が活動を止める。

「最後に会いたい男がいたんだ。元気にやっているのは夜闇の顫動で分かっていたけど、きっとといい男になつていてるんだろうね。まあいいや。それじゃあね、『きげんよう』

魔女は最後に、いかにもといった凄惨な笑みを口角の端に吊り上げ、それを置き土産にして果てた。黒崎望は魔女の首に歩み寄り、両手で拾い上げた。血液で衣服が汚れることにも気を留めず、しつかりと抱きかかえる。

頭部を失つてなお、地面に足を付け、仁王立ちに残つている魔女の身体。その身体の上に、黒崎希は魔女の頭をそっと乗せた。手を離し、生前と殆ど変わらなくそこに現れた魔女の姿に、黒崎望は右手を2度叩く。頭を下げてお辞儀する。

魔女の亡骸は、自らが支配をしていた夜の闇に呑まれると、消えた。

同じ時をして、黒崎望の精神から、悪い魔女を標的とした復讐の宣誓が闇に呑まれて、消えた。

しかし、7歳に宣誓をした黒崎望が今日までの12年間、忘れる事も風化させることもなく、心にずっと抱き続けて生命の駆動力

としてきた、魔女に対する復讐の悪意は、黒崎望の想像以上に彼女の精神深くへと侵食していた。黒崎望の心を苗床に発芽し、12年のうちに巨大な樹木にまで発育した悪意は、魔女を殺害した事実によって役目を終え、腐つて倒木した。が、張り巡った根までが完全になくなることはなかつた。まだ幼かつた黒崎望の精神がばらばらになるのを、森林の根が土や石をしつかりと掘むようにして、どどめ、守ってきたのは他でもなく、魔女への一途な憎悪の心である。もしそれが黒崎望から失われてしまつたら、支えを失つた黒崎望の精神はたちまちのうちに破碎されてしまう。そうなれば黒崎望は自我を喪失して死ぬ。黒崎望と彼女の憎悪は依存し合つのではなく、致命的な因縁を内包する共生の関係に変転していた。黒崎望は魔女を憎悪した修羅から完全に脱却することが出来なかつた。

黒崎望は黒い魔女の継承技能の全容を理解してはいなかつた。しかし今夜、黒い魔女と対峙し、魔女と自分の殺意が一瞬間交わつた時、黒崎望は結末を見た気がした。黒い魔女の名は、それを否定し抹殺したものの、魔女を忌み嫌い、憎み、恐れる感情自身に飛び火して、強制的に闇黒を継承させる方法で続いてきた。自分を殺した相手の心に生まれる、ほんの僅かな罪悪感の亀裂に、強引にねじ込んでくる魔女の凶々しい継承技能は、誇れる勇気と健全なる生活と潔白な精神を持つものならば、難なく抗うことができるだろう。が。黒崎望は勇気も、健全な生活も、潔白な精神も持ち合わせていなかつた。12年の歳月に渡り、彼女の内側に抱き温められ、役割を終えてなお払拭されずに残る惡意の根。それが魔女継承の闇黒と共に鳴をして、黒崎望の中に魔女の素質を迎え入れた。黒崎望はそれに抗えなかつた。黒崎望が生き続けるためには、魔女を受け入れるしかなかつた。

黒崎望は絶望や落胆ではなく、これは初めから決まつていたことなんじやないかな、運命なんじやないかな。そう考えて、諦めた。お父さんを殺したのが魔女だと知り得、幼いながらに魔女に対する

復讐心に心を燃やしたあの夜に、もう、わたしは魔女になっていたんじゃないかな。

「ノンちゃん……」

「心のどこかで……あいつを、魔女を殺せば全てがリセットされると思つてた。普通の、その辺にありふれてるような人生を送れるようになるつて思つてた。でも……違う。今はただ胸が、苦しい。復讐を終えたらもっと、心に新鮮な風が吹き込んで爽やかに感じて、人生の次のステップに進むための、復讐心に変わる希望の力が身体の奥底から湧き出でくるものだと思つて……。それって違ったんだね。全然違う。憎しみと長く交わり過ぎちゃったのかな。あいつを殺した今も感じる……自分の心が、拭いきれない闇黒に汚れていること。その闇黒が、あの魔女だけを憎しみの対象にしていたわたしの誓いが、あいつだけにぶつけるつもりで芽生えさせたこの殺意が、魔女を失つて行き場をなくしている。いつの間にか巨大になつて、魔女の命だけじゃ足りなくて、暴走を始めてる。わたしの意思とは無関係に、わたしには何の関係もない人たちを駆逐しようと手を伸ばし始めている。わたしはそれを收められない。自分の非力を痛いほど感じる。心がひどく後ろめたくて息苦しくて、申しわけがないと思う。でも、その懺悔の念と一緒に、強い安心感と充足感も沸き上がってきてる。これまであいつを憎しむことでしか自分を築き上げこれなかつたわたしの精神が、支柱を失つて壊れてしまわないように、新しく憎悪の対象を選択しているんだ。わたしの自我が失われないよう、守つてくれているんだ。わたしの心の闇は、宿主のわたしを救おうと努力している。はっきりと分かる。それは病気で寝込んだ家人看病しようつて思う子供みたいな純粋な気持ちだよ。悪意はないけれど、でも最後にはきっと悪を生み出すんだろうけれど。ああ。でも、これから魔女になるわたしにとつて、この闇

黒は都合がいいのかも。だつて無理して関係のない人を恨んだり憎んだりする必要なくて、呼吸をするみたいに自然とそうなつてくれるんだもん。ね？　えへ」

「望ツ、ふざけたこと言つてんじやねえよ！　お前、夜の魔女を殺したら、自分が次の魔女になつちまうこと知つてたのか？　初めから全部知つてたんだな！？　それなのにどうしてツ、なんで自分の一番憎むものに、自分自身が変わつちまう方法を……」

「ミーちゃんと深田君には、どれだけ感謝しても足りない。今まで私の我がままに付き合つてくれて本当にありがとう」

「なつ、なんで最後のお別れみたいなこと言つん？　あたしこれからもノンちゃんと一緒に居るつもりやよ。ノンちゃんが魔女になつたつて、そんなのあたしとノンちゃんの仲の、なんの障害にもならんよ。なんも変わらんよ、あたしたち。ノンちゃんが魔女の悪い気持ちに負けへんように、一緒に戦うよ。初めから諦めとつてどうすんねや。ノンちゃんらしくないよ、1人で抱えんといつてよ、あたしにも手伝わしてよ！　これまでとおんなじやんか、3人で乗り越えていつたらええやんか！」

「望、お前。クソツ、望！　縁起でもねーこと言つんじやねえよ！

「1人で背負い込もうとすんなよー。今までと同じよつて、俺達の側にいてくれよ。魔女になんてならないでくれ。魔女を殺せたんだから、魔女になる運命だつて、そんなもん覆せる力がお前にはあるんだろ？　お前だけの力じや足りないなら、俺とみどりが手伝つてやるからー。だからお願ひだ、ここに居てくれよ、どこにも行かないでくれ」

「…………ありがとう。本当に、ありがとう。それしか言葉が見つから

ない」

くく【デリンジャー】黒崎望の魂が形を変える。

くく黒崎望は黒魔女を継承し、【魔女】黒崎望に変化した。

「ありがとう、二人とも」

俯いた黒崎望の目元に、涙が浮かぶ。

街頭に照らされた黒崎望の足元に伸びる影から、黒いもやが立ち昇つてくる。

自分という存在を他人の記憶から抹消するのは、簡単である。魔女ならば、なおのことだ。他人の記憶にある自分の姿や言葉や行動を、自分以外の誰かのものと挿げ替えてしまえばよいのだ。人間の記憶は曖昧で、殆どが思い込みの領域を脱しない。魔女が人々の記憶を操作するときも、その思い込みを利用する。

ただし、魔女といえども、容易に改竄出来ない記憶がある。その人が何よりも慈しむ記憶。或いは何よりも憎しむ記憶。心に強く感じる記憶。それらは、魔女や姫のような強い力を持つ者であっても、操作するのは困難だ。

そのときは、操作しなければ良い。下手に手を加えたりせずに、相手の記憶そのものを破壊、抹消してしまえばいい。そして相手の持つ既存の記憶を寄り集めて、選別、加工し、代換の効く嘘をつくりだす。

魔女は相手の記憶を破壊した後、相手の欠落した記憶の部分に嘘で作ったパテを流しこみ、埋めてしまつ。

くく【魔女】黒崎望の影から時間と精神の管理者クロノが召還された。

くくクロノは前田みどりが持つ黒崎望に関する全ての記憶を対象に、破碎及び改竄の処理を行った。処理は間違いのない精密さで行われた。これ以降、前田みどりは黒崎望に関する既存の記憶を全て失い、記憶を呼び戻すことが出来なくなつた。

くくクロノは深田裕が持つ黒崎望に関する全ての記憶を対象に、破碎及び改竄の処理を行つた。処理は間違いのない精密さで行われた。これ以降、深田裕は黒崎望に関する既存の記憶を全て失い、記憶を呼び戻すことが出来なくなつた。

長い黒髪が夜風に揺れる。  
風に揺れる木々、擦れ合つ葉々が、甦つた魔女の恐怖に悲鳴を上げる。

猫は急いで逃げ出し、町中で戸惑う。  
犬は威嚇に遠吠える。

救急車の赤いサイレンが闇夜を突き刺す。

この街に新しい魔女が誕生した。

魔女の名前は黒崎望といつ。

「さよなら。ありがとう」

魔女に関わると碌なことが無い、と、かつて1人の姫が口にした。  
そしてそれは、きっと本当だ。

黒崎望はその言葉を信じていた。

だから、2人から自分の記憶を奪つた。

新しい魔女となつた黒崎望という女の記憶を、2人から抹消した。  
だけど、それは何よりも悲しかつた。

取り壊された大型『デパート』の更地に立ちぬくし、黒崎望は瞳から溢れる悲しみに抗い、上を向いた。

彼女の傍らに立っていた2人の人影はもう、ない。

夜風を身に浴びている。

1人で。

「1人だ」

1人は、怖い。

黒崎望はあの夜に、父親を失つて以来、1人になることを何よりも恐れた。

現実的なものではなく、精神的な面で。

いつも誰かに支えられていたい、また、その逆でありたい。常に願つていた。

前田みどりと深田裕はそれを叶えてくれた。

黒崎望の側にいつもいてくれた。

黒崎望は、2人のことを誰よりも好きだった。愛していた。

なによりも大切だつた。

その2人を、黒崎望は自ら切り捨てた。

「魔女と関わった人は不幸になる、から」

魔女と関わったものの末路はいつも哀れだ。

それは事実だ。

魔女の強すぎる魔力が、周囲のものの精神や運命を病ませるのだ。故に、古来から魔女は町外れの辺鄙な場所にたつた独りで暮らすことが多い。

他人をむやみに不幸へと貶めないための、魔女の良心だ。

賢明な魔女は、誰とも関係を持たない。

黒崎望が親友らの記憶から自分を抹消した本心も、そこにある。

そこにあるはずである。  
あるはずである。

はずである。

そのはずである。

が。

そうであるのか。

果たしてそうなのだろうか。

本当に、そうなのだろうか。

黒崎望の決断には、彼女の親友を思いやる意図が、本当にあったのか？

彼らの未来を慮る優しい心を、黒崎望が持っていたところのだろうか。

本当に？

本当だろうか？

本当は違うのではないか？

黒崎望は、魔女となつた自分が、2人に苦痛と悲痛を与える」とのないよつに、自ら2人を遠ざけたのか？

本当は違うのではないか？

自分の本意を「まかす為の、隠れ蓑ではないのか？

「え？」

魔女の粗悪な運命に巻き込まれないようにして、泣く泣く2人を突き放したつて？

2人の幸せを祈りながら？

2人が何も知らずに、平穏な生活を続けていくよつじつて？

「そう、だよ？」

本当に？

のぞみちゃん、本当に、そつ思つてんの？

それ、違うでしょ。

「どこが違つつていつの？」

おい。

おいおいおいおい。

やめてよね。

とぼけるんじやねえよ。

それとも、

本気で言つてるのかな？

「本気つて……わたしは嘘なんてついてない  
嘘はついてないって？」

「うう。嘘なんて言つてない」

分かつてないね。

嘘を言つてないっていう、それがもう嘘なんだよ。  
のぞみちゃんは、うそつき、だね。

「は？ わたしのどこが嘘つきなの？」

ふつふふふふふつふふ。

「何がおかしいの」

いやー、「じめん」「めん。

ふふふはは。のぞみちゃんは嘘つきの上に、自分が嘘をついてい  
るつていう自覚をまるで持つていらないんだ。

根っからの魔女氣質じやん。

「はつ？」

のぞみちゃんは、魔女の命を絶つた代償として魔女の名を継いだ  
んじゃなくつて、元々そうだったんじやない？

「バカじやないの？ そんなことあるわけ」

のぞみちゃんはきっと生まれながら魔女として生きていこうと  
決定付けられた娘なんだよ。

あはははは。

「違う。ありえない」

いやあ違わない。あたしの思つ通りの人間だよ、あんたは。  
うつは一面白ッ、天使が魔女の子を産んじやつたんだ。  
うひひひひひ。

「黙れ」

おつと。

怖い怖い。

その握りしめた拳はなあに？　わたしを駆逐しようとしてるのかな？　無駄だけどね。

「お前は誰だ」

わたしの正体が知りたい？

あーらう。そんな闇雲に知覚神経を周囲へ張り巡らせても無駄よ。そんなほうに居やしないんだから。

「……こころ？」

外れ。

あんたの中にいるわけじゃないよ。

でも、そこもわたしの一部だけね。

「お前は誰？　歴代魔女がわたしの心に塗り付けた闇黒？」

そんなこと、どうでもいいじやん。

それよりも、望ちゃんって本当に酷いよねえ。

ミーちゃんと深田君を自分の良いように操っちゃうんだもんね。

あの2人をオモチャみたいに扱っちゃうんだもんね。

でもまあ、他人を自分の好きなようにいじくるのは得意だもんね、魔女はさ。

「だから、それは違う。わたしは、2人のためを思つて」

ブブー、ハツズレー！　ざんねーん。

まだ嘘付くつもりなんだ、まったく、しょうがない子だねー。

自分で認めることが出来ないんだー望ちゃんは。

ふふ、じゃあわたしが教えてあげちゃおつかなー。

わたし、ちゃんと知ってるんだよねー。

望ちゃんは自分を守るために、2人を自分から突き放したんじよー？　最初からそのつもりだったんでしょー？　2人のことなんてこれっぽっちも考えていいなかったんでしょー？　実は、あの2人の記憶から自分を消したんじゃないんだよねー？　実は実は実は、その、逆！　自分の記憶から、2人を消したんだよねー？　だつて、もう傷つくのは嫌だもんねー？　お父さんが突然いなくなつた時と

同じ気持ちを味わうのは、もうゴメンだもんねー？　あの2人がー、魔女になつた望ちゃんの姿勢と感情に絶えられずに、望ちゃんと縁を切るのなんて時間の問題だつたしー？　記憶を消そうが残そがどつちにしろ2人が自分から離れていくのは、絶対に阻止できない必然のことだつたからねー？　それだつたらさー、あの2人に愛想尽かれて捨てられるくらいならさー、お父さんを殺されたときと同じ孤独を、も一度味わわなきやいけないくらいならさー、捨てられる前に自分から2人を捨てたほうがいいよねー。そんなの当たり前だよねー、こつちが捨てられるよりも何倍も楽だもんねー？　わたし1人で生きていけます宣言しちゃつたほうが、開き直れるもんねー？　苦痛なんて感じもしないもんねー？　望ちゃんはミーちゃんと深田君がこれまでと同じような接し方はしてくれないだらなーって考えたんだよねー？　だつて望ちゃん、悪い魔女になつちやつたんだもんねー？　魔女になつた望ちゃんから、2人の友情が簡単に離れていつちやうと思つたんだよねー？　9年間も一緒にいた友達の言葉を、信じてあげられなかつたんだよねー？　あの2人の記憶から自分をさつさと消しちやうなんて、うふふふつふふふふいんじやないいんじやないの、望ちゃん。あらららららららら、なにななんなんですか。やだ！　泣いちゃつたりしてんの望ちゃんつてばもー。悲観する必要なんて全然ちつともないじやーん？　だつてだつてだあーつ、てー、望ちゃんの自己防衛に打算的なところつて、とつても魔女ぽくてすごおくステキじやなーい？　それに他人を心から信頼できない、根っからの疑心暗鬼な気質とか、つい今まで唯一無二の大切な親友だつた奴等の記憶を、一瞬で闇に葬つちやえる冷徹さとか、そんじょそこらの魔女じやあ、とてもとても、足元に及ばないつて感じで、ちょーくーる！　わたし思うんだけどさあ、望ちゃんつて、すつごくすつごく悪い魔女になれると思うなー。つてかこれつて誓めてるんだからねー？　分かつてるよねえ、望ちゃんはアホでクソで救いようのないバカどもを地面に平伏させて、そいつらの顔面を踏んづけて踏んづけて、腹を蹴つて蹴つて蹴

「わたしは、」

「わたしは魔女だけれど、それを誇らない。約束します。黒い魔女であつても闇に触れません。お日様を尊び敬います。誠心誠意で万人に接し礼儀を重んじます。誓います。誰とも剣の先を交えません。誰にも憎しみや苦しみを植え付けません。守ります。人を好きになります。素敵な人と愛を育みます」

黒崎望の生活は変わらなかつた。

朝7時に起きて自覚ましテレビを見る。

自転車で駅まで行つて、満員電車に乗り、窮屈な目に遭う。

倦怠で退屈な講義をこなして家路につき、菓子類で小腹を満たしてから、スーパーのレジ打ちのアルバイトに出かける。

眞面目に働く。

仕事を終えて、コンビニに寄つて、帰り道沿いの民家に飼われている愛想の良い犬の頭を撫でる。

豆電球の点いたオレンジ色の1Kアパートに帰り、テレビを付けてままでベッドに寝転がつて、雑誌を読んでいるついでウトウトして、夜中の4時ごろにふと目を覚ます。

テレビと電気を消して、ちゃんと布団に潜つて眠りにつく。延々とリピートする。

ただ、前田みどりと深田裕の姿は、そこにはない。静寂に満ちている。孤独が耳に痛い。

「クロッちー、なに一人でブルーはいつちゃつてんのー？」

「あー、えーべつにそんなことないよー」

学食でノロノロと昼御飯を口に運んでいた黒崎望に、肩越しから声を掛けってきたのは瀧本瞳だつた。雑誌のモデルを忠実に再現したようなファッションセンスの比較的いけてる友人だつた。今日はレザージャケットとリーバイスで決めている。望はそれよりも、瀧本が履いているスニーカー調のハイヒールが珍しくて気になつた。そのヒールをカツカツ言わせながら、瀧本は望の向かいに座つた。

「そーいえば最近クロッちー人でご飯食べてることが多いね？」

「えー。 そうかなー」

「うん。 あれー？ でも、元々だつたつけ？ ま、いつか」

と、会話をしながら瀧本は、ときどき望が自分の肩越しから後ろ

をちらちら盗み見て、「」とに気が付き、そちらを振り返った。

後ろの席には、言い争いをしている男女が、もしかしたら恋人同士なのかもしれないが、周囲に喧騒を振り撒きつつ、学食に集う生徒たちの注目を一身に集めている。

「なにが違うんや、アホボケカスッ！ 白状せえッ！」

「だつだから、違うの！ お前が誤解してゐる時点で違うんだよー。あれは俺の、い、従姉妹だよ従姉妹！」

「へえ、今、ロボもつたやろ、聞いたぞ」「」

「いや、だから。あれは従姉妹です」

「まだ言つつもりか。分かつた。せやつたら、いつちこにも考えがある。  
死ね！」

「ギャザー、お、ち、つ、け、みどりー！」これは食堂だ、公共の場

「うっさい！ あつ貴様！ 待たんか、ブツ殺す！」

全力で学食を飛び出していつた男の後を、凶悪な身軽さの女が追いかけていった。それを目で追いかけていた望の様子を、瀧本は見ていた。

「せりせりせり」

「えつ」

薄気味の悪い笑い声を連呼させる瀧川。望はジジイで、箸をいじましそうになつた。

「そつかークロウ。あの仲良し夫婦が羨ましいわけねー。クロつちも彼氏が欲しいってわけだ！」

「えつ」

「なによー早く言つてくれればいいのにさ。水くさこなー。ちょうど今夜、合コンがあるんだけど、メンバーが足りてなかつたんだー、クロつち来るよね？ バイトとか休んじゃいなよ。今日の合コンつて、ケツコーキてる連中が来るみたいなんだよね」

「えつ」

「な。じゃあ7時に駅前に集合つてことでね」

「あ。えつ」

と、いうわけで合コンに参加することになつたんですけども、駅前に集まつた女性メンバーの中でも、黒崎望がブツチギリで田舎くさくてドンくせえ女子だつた。普段は女子間の姿をあれこれ言う会話に、あまり興味を持たなかつた望だつたが、この現実をしてさすがにガックリきた。

いやー、瞳ちゃんの友達だけあって、わたしなんてとても足元にも及ばないつていうか、自分と比較しようなんて考えただけでこつぱずかしい気持ちになつてしまつくらいに、みんなカワイイです。なかでも同性のわたしから見てもグッと来るのはもちろん瞳ちゃん

んで、あのあと家に帰つて着替えて来たのね、学食で見た格好と違うね。この5人の中じゃなくても、この街中でも群を抜いてカワイイなあ。っていうかわたしもan anとかcancanとか読んでるつもりなんんですけど、なんでこんなファッショングに出るかなあー。んー、そうか、センスか。センスが違うんですね。生まれついての能力差か、これは縮めようがないかな。あー、ガックシ。来なきやよかつたかな。は、は、は。アラなんでしうか、自然と口を突いて出てきた自嘲気味の笑いが止まりませんよ。あはははは。

は。

という落ち込み具合のまま、居酒屋に着きました。はい。

合コンをスマーズに円滑に進行させるための必須テクニックその1が、入店後に早くも瞳ちゃんの指先からほどばしりましたよ。入店後、わたし達はすぐ男の人たちが待つてているテーブルに行っちゃいけないんだって。速攻でテーブルに向かうような女子は、男なら誰だつていいと思っている、とっても卑しい男好きなんだ。それ以外の女の子たちは、テーブルに足を向ける前に、待つてている男の子を離れた所からじっくりと観察するらしいです。どんな男の人が参加しててるのかを、把握するんですつて。顔とかファッショングとか持ち物とか……。んで、男の子達の評価をみんなで充分に吟味した上で、足をテーブルに向けるか、それともカラオケに進路を変えるか、どちらにするか決めるらしいですよ。わたしは合コン参加したの、今日で2回目なので、知りませんでした。

今日はみんなのOKサインが出たので、テーブルに向かったよ。テーブルの5人の男の人はわたし達、つていうか正確に言うと、きっとわたしはそこから除外されてしまうけれど……、わたし達が到着するとYAHOOO！とか、Gooooooooo！とか、ヘンてこな声を上げて、諸手を挙げて歓迎してくれました。いやー、なんて言うんでしょうか、みんなホストみたいにカッコよかつたけど、1人だけわたしみたいな、って言つたらきっと怒られるだろうけど……。他の人とはちょっと違つて、頭も黒髪のままの

人が居たから、んッ？と思つてよく見たら、

「「はッ？！」

「え、望ちゃん、どしたの？ 知り合いでモいた？」

「あーううん。違つたー、似てる人」

つじゴマかしたけど、なんだこりや。なんじょう。

黒髪の男の人を見た瞬間、わたしの中の魔女が危うく表面に飛び出しきそうになつた。わたしはそれを、穴の開いた潜水艦の浸水に板を押し当てて、必死で止水している潜水夫の最中です。こういうときは深呼吸をするといいんです。

すーはーすーはー。

よし。落ち着いた心と瞳で男を見る。そして判る。

あの黒髪の男は、魔女の祝福を受けてる。理屈なしで、感じ取つた。まだ魔女に成り立てだし、魔女の祝福とかの意味も全然分からないけど、心の中に自然とその言葉が浮かんできた。この男は過去に、魔女と関わりを持つている！ それがどんなものなのかまでは読み取れないけど、確かだ。ひょっとしたら、もしかしたら、わたしがずっと憎んできたあいつとの、関係なのがもしけない。向かいに座る黒髪の男からは、なんとなく、わたしが殺した魔女と同じにおいがする。

つていうか、色々と、ノロノロ思考していた間に、わたしの座席が、その男に向かいに決められてしまつたいたわけです。だけどまあ、2人とも壁際の端っこで、いかにも頭数合わせつて雰囲気だし、おなじ魔女のにおいを持つもの同士だし、めでたい合コンの席ですし、ここはひとつ、ケンカなんかしないで、仲良しモードでやっていきましょうねッ？

うふふつ、あははつ

とか思つていたんだけれど、目を合わせたとき、向かいの男の人はすこく不機嫌そうな顔をしてた。合コンの頭数合わせの、捨て駒みたいなポジションが、そんなに気に入らないのかな……。それとも正面がわたしみたいなザコ女だから、滅入つてんのかしら。失礼な。いや、そのどちらでもないのか？ もしかして、向こうも、わたくしが魔女だつてことを見抜いているのかも？ ……分かんない。聞いてみるわけにもいかないから、確かめようもない。

でも、いつか、別に。もし魔女だつてバレてたつて、逃げるわけにもいかないしね。わたしはもちろん、彼だつて、こんなところで騒ぎを起こすつもりは、ないでしよう。彼の雰囲気に、わたしへの殺意や敵対心も感じないし。機嫌がちょっと悪いだけみたい。これはひとまず安心つて考えててもいいかな？ 目付きは悪いけど、とりあえず友好モードつてことにしておいていいのかな？ うん、そういうことに、しておこう。つてことで、乾杯のドリンクを注文します。あ、こっち、ドリンクメニューが、ないんですけど……。あ、はい、いいですいいです、おんなじで、ナマチューで、いいです……はい。

えーと自己紹介です。男の人たちからです。向こうからゴージさん、ユウさん、ジュンさん、スーさん、ときて、最後に黒髪の人。それまでのマリファナハイな男の人たちの自己紹介と一線を画して、

「あー、星野です」

と、ただ呟くように、それだけ。笑いを取ろうともしません。とつても事務的で調子が低くて耳触りで感じが悪くてやる気のない、場の雰囲気を全然考えない、冷めたラーメンのような自己紹介に、テーブル中が静まり返りました。けど、そこですかさず合コン百戦錬磨の瞳ちゃんの出番です。

「ハイツ！　じゃあ次はクロッち、お願ひしまーす！」

と突然振られた。心の準備もなにも出来てなかつたので、

「えつ！　あ、はつ。黒崎のツのぞみですっ」

と、どもりながらゆつたらなんでしょう。星野さんが繰り出した南極サイズの極寒の中でオーラを見上げていたような態度だつたのを「ロツ」と翻した全員が「どもつちやつて、カワイイ！」とかつて大爆笑した。どこが可愛かつたんでしょうか。それより大爆笑されてるこつちは全然面白くない。恥ずかしくなつて顔が熱くなつてきた。きっと赤面してると思ったので、前髪で積極的に顔を隠しました。でも場の雰囲気を再び盛り上げられた。ダツサイ田舎娘の分際で合図のスムーズな進行に貢献できたのでまあ、結果オーライつてやつです。これで出番終了という感も否めませんけど。「うん。

そしてその予想は本命的中、払い戻しです。

合図開始30分くらいで早くも席替え。わたしと星野さんの幽霊合コンメンバーは2人仲良くテーブルの隅っこに追いやられて片寄せあつて、寂しさで凍死寸前ブルブルと震えています。

つてのは嘘でー、わたしだけは今言つたみたいに1人寂しくしてたんだけど、星野さんは席替えの直後にトイレかなにかで席を立つたまま、一向に帰つてこないよ。だからわたしは1人で呑んでます。たまに隣のナミちゃんとコウさん組が楽しげーに交えているトークに耳を傾けて、あははーとか笑い声を合わせています。……死にたいほど虚しい。その向こうでは3対3の男女がいい感じの組み合わせで、かなりの声量ではしゃいでいます。

まあわたしも魔女ですから。……いえ、例え魔女じゃなくともこうなること……つまりダサいわたしだけ1人孤島に取り残される事態に発展するんだろうなアとは予測してたつもりですが、いざその

通りのシチュエーションに身を置いてみると、思いのほか手持ちふさたで腹立たしくもあり、なによりクソつまんないです。とてつもない疎外感です。わたしはイジメとかに遭った事はないんですねが、高校のとき、クラス中のみんなから無視されていた人……もちろんわたしもイジメの標的になりたくなかったので同じように無視していましたが……成田京子さんという人が居たんですけど、その子の気持ちってこういう感じだったのかなーと、思いまし、た。

取り留めのない思考の端でビールがよく進みます。ヘイヘイ、わたくしもう3杯目空けちゃいましたよー。誰か店員さん呼び止めて追加のビールをお願いします。

それで、4杯目きました。相変わらずうつめー。ゲフッ。ナニちやんが瞳ちゃんか誰かに声掛けられてですねー、コウさんとの会話が一時中断した時なんだけど、手持ちぶさたになつたコウさんが仕方なくつて感じで、つていうか本当にそんな気分だつたんだろうけど、わたしに話し掛けてきたわ。

「ウオッ、スゲー進んでるじゃん！　あんま飲まなそーな顔してケツ」「ーいくんだね」

「あーそうですねー」

「酒強いんだー」

「えーでもすぐ顔とか赤くなるしー」

「つてか全然赤くねーよ」

「あれーホントですか？」

「おーおー、酔わせてお持ち帰りしようつてたのになー、無理

「じゃんー。」

「Hー、ゴーサンそんなこと考えてたんですかー？ やだー」

とか。自分の低脳を加減にうんざりとしながら、それでも酔つてグデングデンに近づいているわたしの脳味噌は、精神で制御できる範疇からどんどんと遠ざかり、旅立つていってしまうあります。それよりも、今まで一人寂しく飲んでいたので、舌がツルツル良く動きますよ。人っていう生き物は寂しいと、もうなんでもいい、誰でもいいからお話をしたり触れ合つたりしたがるといつ、言葉を、誰かが言つていたのを思い出しましたよ。

ホッホー。とても酔つ払つています、わたし。

「アー、そーいえば星野さんになくなつちやつた『テスねー』

「ああ、星野？ あいつはいいんだよ。あいつ合コンとか初めから興味ない奴だし」

「えーそーなんだ」

「それに彼女もいるみたいだし、だいたいあいつ居ると場が盛り上がるねーの。自己紹介とか聞いたでしょ？」

「あー最低でしたね」

「でしょ？ でしょ？ あいつ、いつもあーいう感じなんだよね、合コンの時に限つてや。普段はフツーの奴なんだけどね」

「彼女居るのに合コン来るんですねー」

「ああ、今日は俺が無理言って来てもらつたの。どうしても1人足りなくて無理に。だつてそうしないと合コンできないじゃん？ 途中で飽きたら帰つていいって言つといたから、もう帰つたんだろ」

「へー。へー。わたし、トイレ！」

「おお、おひ。なんか注文しどうか？」

「あーいいでーす。帰つてきてからでー」

トイレの鏡に映つていた自分の酷い顔を見て、しばし正氣に戻る。ああ酔つてんなーコレ。まずいなー。ピッチが早かつたなー。今戻つたらきつとまた飲んじまうなー。一度店の外に出て、頭を冷やすとしよう。

ガラガラ音の出る引き戸を開けて外に出ると、夜風のひんやり感がとても懐かしいです。火照った顔と首に心地がいいです。外にはなんでしょうか、人待ちでしょうか、わたしよりもずっとダサい男の集団がタムロつてアニメみたいな話をしてました。まあいい。

そいつらの脇をすり抜けて、店の入口から少し離れたガードレールの前に辿り着く。と、そこに座つている男は。

あらららららら、星野さんじやないですか。

帰つたと思つたら帰つてなくて、ガードレールに座つて携帯をいじつてます。

ホホホホ、なんじょうなんじょか、彼女にお迎えでも頼んでいるんじょうか。

わたしは酔つているので、きっと酔つていなかつたらそんなことしないでじょうけど、酔つているので星野さんに声を掛けます。

「あのーあのー、何していんですかー？ 中に戻らないんですか

ー？」

つて聞いたの。そしたら、星野さん、最初に会った時のひじくキツイ印付きより、もっともつときつて、気の弱い「なならショック死してしまつくらいの、メテコーサの田で睨んできたよー。」ハハ、怖いよー星野さん。

「ああ？ 誰だテメー？」

ウハツ。覚えてないのかよ！ みんなを爆笑の渦に巻き込んだわたしの自己紹介、聞いてなかつたのかよー。

アウト・オブ・ガンチュウツでヤツか。

「えー、と……あの、黒崎です。黒崎望

「知らねえよ」

なつなんですか！ なんだチミは？！ わざわざ名前を教えてやつたわたしをシカトして、メールしますッ！ なんて慄懾な、態度のデカイ最低な男なんでしょうが！

星野、この際呼び捨てで構わないと思います。星野はわたしに一瞥もくれず、携帯をしまったポケットから続けて煙草を取り出した。ほーH.O.P.E.? 知らない銘柄ですねー。それになんだか短いですねー。あら、美味そうに吸い込みますねー。わたしは喫煙家ではないんですけど、酔つた勢いでなんだか一緒に吸いたくなつてきちゃつたよー。

「テメー、やつきからな見てんだ」

「えー。タバコ一本ほしーなーと思つてー。ぐださ、い？」

と言つたら、渋る素振りもせずにくれました。なんだ、意外と素直さんじやないですか。

それに火まで点けてくれるんですよー。やつさしー。  
でも、わたし吸いかた知らないから、指で挟んだ煙草の先端に火が点くの待つてたら、いきなり頭を叩かれた！ バチンって！ すごく強く叩かれた！ 会つて1時間も経つてない、初対面の相手をですよ、しかも会話も碌にしてない人を、しかも自分で言うのいやらしいけど、わたし女なのに、叩かれたよ！ ひでーよ、酷すぎッ！

「なつなんで叩くんですかー！」

「ふざけんなバカ！ 噛えて吸い込まなくちゃ全然火が点かねーじやねえか！ バカッ！ 知らねーで初心者が調子こいてんじやねーよー！ バカッ！」

「なつなんですかー！ そんな、バカバカ言わなくたって、いいじゃないですか！」

「さつさと點けるよモタつきやがつてー ムカツくんだよー！」

ななななな、なんてフテブテしいんでしょうか、この男は！  
さつきの優しさもきっと偽りだつ！

「ー！ あー！ ガーッ！」

ここでなんか言い返したいんだけど、きつと言い返したらまた星野が言い返してくるから、そしてわたしがそれに言い返したら星野がまた言い返して、っていう無限ループにはまってしまいそうなので、痛い痛い頭を擦りながら、わたしは諦めて、黙つて煙草を咥えました。んで吸い込んで火をつけました。

一瞬で口の中が苦くなつて、喉の中を針がグザグザ突き刺さつた痛み。

「ゲホー！」

なによこれ、人間が吸うもんぢやないよーー。煙た過ぎるよー。  
気持ち悪くて我慢できなくて吐き出しちやつたよ。あー星野の前  
で、平然と吸い込んでみせて、ヤツの顔に煙を吹きかけてやる予定  
がーぐずれてーくやじー。

「ゲホッ」「ホホホホッ」

「あーあ。バカじやねーの？」

「でょっど、いちいちバガバガいばないでよ」

「なに言つてんのか分かんねえよ。んぢや、俺、帰るから。誰かに  
言つといて」

「まづ？」

「くらさき望ーのーやろおおーおー氣があーつきやがつたなー  
あー明確にーーー知覚しーーているわけではないようだが、星野哲郎  
の精神規格の祖型は闇黒組織が成形していいる真実を魔女の深紅の眼  
の解析でなくただ人間としての俗的な六感の曖昧を延長させた確信  
で捕らえそれを結論しよつとしている」

「まづいですね」

「ホシノをジグンのドウルイだとシンジてアンシンするつもりだよ  
あのムスメは」

「つまり、どうこうことなの？」

「つまり、わざわざのぞみさんはじぶんとおなじやみにおこのあるモ

しのいつわうさんとなればふつうのともだちがあるのはこいびととしてのかんけいをたもちながらふんだおりのせいかつをおくつてゆけるだらうと、しんじはじめています

「事実、星野哲郎が黒崎望の闇黒に侵蝕された記録は全く『やません』

「同属同士ならば侵されないと、そういうことですか」

「つむづしたものかねえ」

「じどじどうしよう」

「黒崎望の急設された魔力の薄弱さでは闇黒の素質を生まれながらに持つ星野哲郎を現実的・精神的空想的に殺害することができませんよ」

「うふふふ」

「誰に対しても嫌悪と病害を与える黒い魔女の大前提を破るつもりが、あたしら歴代に汚泥を擦り付けるようなもんだよ。許せん！」

小娘ふぜいが

「どうだつていいだろ、ババアどもが僻んで愚痴つてんじやねえよ！ 耳触りだから黙つてろ」

「あ・あ・ああああのですね、あなたがた老人の時代は終わっているのですよ、魔女はみんな性悪・年寄り・醜女・腐敗臭・嘘つき・陰険・救いようのない邪悪・結局最後に負けて死ぬ、て落ちは終焉しているのです、今の時代は全然そんなことありませんのよ。無限の多様性に裏打ちされた時代です。あなた方は、いつまで古臭い形式に囚われ続けるつもりなのでしょうか。そんなことでは黒崎望の若さと美貌が生み出す心の中の希望の太陽に照り焦がされて朽ちて、化石になつて風化して砂になつて夕焼けの美しい丘から海に向かって撒き捨てられて、意思さえ残らず果てることなりますよ。いいですか先代魔女のババアども、心に寛容を持つべき時代がやってきているのです。黒崎望の好きなようにさせてあげましょ」

「だ・い・た・い・ま・じょなんて、世界のなーんの役にも立ちやしないんだから、干渉せずにあの子の好きなようにやらせてやった

らいいじゃん」

「そんなことが認められるものか、貴様らには分かるまい、誰にも愛されず望まれず、誰かを愛することも望むことも出来なかつた私の病んだ精神が闇に腐り、唯一自分を救う方法として黒い魔女の道を選択し、生物としての価値の底辺まで陥落するしかなかつた、わたしの絶望が」

「そんなもん知らねえよ、クズが！」

「わたしは許さない！ 黒い魔女に成つた女が、一瞬でも幸福を感じることをわたしは認めない」

「ううううぜええええんだけばいたあああ…」

「死んでしまえ」

「みーんな意外と心が狭いんだねえ。わたしは黒崎望に殺されたわけなんだけど、まあ別になんとも思わないしねえ。ただ、星野哲郎とは仲良くしたいワケだ。あの子は類稀な心の暗闇を隠し持つているし、なにしろ、あたしのかわいいヒトだからねえ。今から抱き込んでおけばきっと心強い味方に、なるさ」

「えー、なんなのコレ？ デウしたらしいワケ？」

「ハハハハハハハ、バアアアアアアアアアツカ！」

ああ、背を向けて。

ポケットに手を突っ込んで、明確な意思のない適当さで、ゆつたりと街路の暗がりに消えてゆく星野が、なんだかカツコヨーく見えてしまつて、いとおしく目に映つてしまつて、いよいよビールのアルコールが、わたしの脳に侵攻し始めたようです。

わたしは思わず彼を追いかけることを決意してしまつた。

ただ、その決意の直後。合コンの席へ鞄を忘れてきたことを、思い出してしまつた。人から見れば安物かもしれないけど、わたしから見ればとても高かつたんです。ルイヴィトンです。

それが、魔女の力を使おうと思つた動機。

なんていうのかな。だつて。さつきだつてテーブルにわたしの居場所なかつたんだもん。空氣みたいでさ。いやー、空氣のほうが、まだまし? トイレに行くつて言つて席を立つた半分は、その場から逃避。あからさまな疎外からの脱出。瞳ちゃんはわたしに彼氏斡旋とかそういう人助け根性じやなくてさ、きっと、わたしを踏み台にしているんだ。田舎の色彩のないわたしを隣に置いとけば、さらには貌が際立つて、目立つて、舍コンの中心的存在で、モテモテつて寸法ですよ。

わたしは、要は、瞳ちゃんを美味しくするためのダシとして呼ばれたわけです。

瞳ちゃん以外の人も同じでしょ。ま、始めっから顔合わせたことない初対面ばつかで、今後も積極的に仲良くしたいとも思えない、全然話の合いそうにないメスどもだつたから、どうでもいいんだけどね。というか奴等はわたしとなんて全然、男の人たちとしか話してないじゃん。男の人たちもわたしとは、全然話さないし。ね。

だからです。あのテーブルに戻るのが嫌なんです。でも、でも椅子に置き忘れたルイヴィトンは捨て難いのです。

どうしよ、どーしよ。

そういう気持ちが、動機。

『魔女なんだからー、力を使つちゃえればいいじゃーん』

動機に裏打ちされた行動に移ります。人目がなくて、影の濃い路地裏に場所を移して、えーと、どうすればいいんだろう。

『水くせえ、水くせえよ望ちゃん。『夜の手』を使いたいなら、すぐに、わたしを、呼び出してくれればいいのにー。ほつほつ、ほつほつ。酔つた勢いなんかしらー、あーんなに嫌つてたのに、すんなりとわたしたちの魔女を使うんだね。でもわたしうれしい。やつ

と望ちゃんの魔女が役に立つからうんだからー』

「念じる、ればいいのかな?」

『千里の道も一歩からー どんどん望ちゃんの好きなように魔女を現実に放り出してえ。そうすれば魔女は望ちゃんのことがもっと好きになるしい、望ちゃんだってわたしのことが、好きで好きで、大好きでしようがなくなつて、離れられなくなつちゃうよー』

「手の周りに闇を集束して、それが濃く濃くなるよー

『ちよつち時間が掛かるのは心配なくつてえ。何事も慣れですからね。何度もやればすんなり出来るようになるからねー。自分の欲求を堪えもせずにそのまま垂れ流そつとする自制心のなー、素敵だなあー』

「あんまりのいで、ルイヴィトンを掴む

『ほつほつほーー! うまいうまい、とーつてもおじょーず! 満点あげちやえる魔女つぱりだね! わつすが望ちゃんは、今までの売女どもとは違うなー、気品すら感じじるみたいなー。キャハツ、てゆーか嘘でーす。すっげー毒々しいよね。あれ、これって讃め言葉よ? ひひつ

「ルイヴィトンを……取つた! できた!

『ゲーッツー ルイヴィトンを、ゲットだぜー』

グラスの触れ合つ音、男女の喧騒に満ちた雑談。店員の忙しい足

## 章。居酒屋。

十数分前まで黒崎望が腰を据えていた椅子の裏側の影。そこから黒い腕がニヨツキと生えて、飛び出してきた。

影で造られた正体のない腕は、椅子の裏側から表側へと移り、文字通りの手探りで、椅子のクツショソの上を探る。

ふと指先にぶつかった、背もたれに立てかかっていたハンドバッグ。それを、5本の先細った指が驚撃む。

喰らいついたウツボが獲物を巣へと引きずり込むように、ズルズル、黒い腕はハンドバッグを椅子の裏側へ運んでゆく。ハンドバッグは黒い腕と共に影に吸い込まれ、居酒屋の店内から消えた。

店中の誰もそれに気が付くことがなかつた。皆、談笑と酒とアルバイトに夢中だつた。

路地裏というだけでは説明のつかない、夜中だとしてもありえない濃さの闇の塊が、黒崎望の手首から先を覆い隠していた。その、直径20センチほどの球状の闇から引き抜かれ、比較にならないほど明るい路地裏の影のなかに戻ってきた望の手には、外面にブランドロゴの印されたハンドバッグをしっかりと握りしめている。望の創り出した魔女の闇は、バッグを手に入れると、音もなく周囲の闇に溶け込み、消えていった。

『こんぐらつちゅれーしょん！　おめでとー、おめでとー、あけましておめでとー望ちゃん！　夜の魔女とゆー新年を迎えたあなたに、呪いあれー！』

マ、ラ、ソ、ンなんて、何年振りの運動だろつか。

長い髪が着地に合わせて背中を叩く。首と胸には心臓の早鐘が、速度を着実に増しながらリズムを打っている。両腕は無意識に高く、大きな振り子となつて揺れ、疾走の助力となる。スカートの

裾に触れる両足のアキレス腱が美しく伸縮し、身体を宙へとはぜらせる。前方から現れる電柱と、視界の端へ消えてゆく街灯の、滞らず、常に流れ変化してゆく視界。夜の新鮮な空気は、一呼吸ごとに肺の薄汚れた細胞を壊し、同時に清新しい細胞を生み出してくれるような。誰の声も町の雜踏も耳に届かない、風の歌だけが鼓膜に気持ちがいい。おしゃれなヒールの高い靴じやなくて、ナイキのスニーカーを履いてきてよかつた！

黒崎望は、星野哲郎の後を追つて駆けている。望が路地裏でルイヴィトンに夢中になつている間に、星野の姿は周囲からすっかりと消えてしまつていた。望は彼の背中が最後に立ち去つた方向へ、一直線に走っている。望の走る延長に、星野が居るかどうか、そんなことは知らない。もしかしたらどこかの角を曲がったのかもしれない。けれど望はまっすぐ走つた。まっすぐに走りたかった。進む方向に、星野が居るか居ないかは、分からぬ。でも、追いかければ、きっと彼に追いつくんだつて、漠然と考えていた。

そして実際に、望は一人の男の影を、視界の先に捉えた。星野の氣だるそうな背中だとは、遠目に判断できた。望はハツとした。星野の背中を見つけた瞬間、彼に追いついて、それからどうしようか、全然考えていなかつたことに、今さら気がついた。自分が何をしたいのか、言いたいのか、全然考えていなかつた。ただ、星野の背中にときめいて追いかけてきただけ。告白とか、準備も覚悟も全然。そんなつもりはハナからない。

（どうしよう！）

ああ、考えがまとまるまで、立ち止まるか？ けれど、それは正直なところ、勿体の無い気がした。望の疾走する速度は、彼女の精神を柔らかい恍惚へと持ち上げていた。立ち止まるなんて、そんなもつたひない事はできない。じゃあ、星野の横を突つ切つてこのまま走り続けるか？ それはあまりに間抜けだ。星野を追いかける為に走り出したのに、彼を無視して通り過ぎてしまつてどうする。それじゃあ、どうすればいいの？ この力強い速度を保つたまま、こ

れを後援にした現状を維持したまま、星野に、

『飛び蹴りをかましちゃいなよ、面白いよー。きっとあいつ、地面を「ゴロゴロ」転がっていいよ。ケケッ』

星野に、飛び蹴りを喰らわす。星野を追い掛けた自分の速度と気持ちを靴の裏に集約し、それを一気に放出。打撃という最もシンプルな部類の攻撃で、星野の背中へ自分の思いをぶつける。望の繰り出した蹴りの衝撃に、きっと星野は前のめりに倒れ、もしかしたらアスファルトを「ゴロゴロ」と、間抜けに転がるかもしれない。最悪、星野は転倒時に頭を強打するかもしれない。翻るスカートの可憐な望が着地する目の前で、反対に星野は無様に地面を這いずる。アスファルトに手を付き、震える上体を起こし、切れた額から流れ出る大量の血液で朱に染まる星野の顔面には、疑問と敵意の入り混じる表情。夜の闇に傍げに煌く潤む星野の瞳は、街灯を背にして影に隠れた望の顔を見上げる。

そして望は、とびっきりの笑顔で星野の激昂を歓迎する。白々しく、ゆっくりと優しく星野に手を差し伸べて、こう囁く。

「大丈夫ですか？」

(これだつ！)

星野との接触方法は、これしかない！

望はさらにに加速する。息が弾み、膝がきしきしと悲鳴を上げ、太ももとふくらはぎの筋肉が張つてくる。足首は炎を纏つたように熱い！疾走することの快感へ、徐々に苦痛の味が食い込んでくる。しかしそれすらも新鮮に思える。本当に長い間、長距離走なんてしていなかつた。身体中60兆の細胞が、躍動する悦びを思い出して、嬉々の絶叫を上げている。星野の背中が5メートル先に迫つた。いる！望は両足で地面を蹴ると、高く飛び上がつた。街灯に型抜

きされ、壁に映し出された望の影が、ライダー・キックのそれを模した美しさで、前方を行く星野の影に突き刺さる！

「ツモ！？ んぎゅツ！」

着地した望の靴がベロンと滑り、足首から下をもぎ取らんばかりのものすごい勢いで、彼女の意図しない方向に滑っていく。前のめりに姿勢を崩した望は、膝と両手を地面に付けた。速度は收まらない。止まれ！ という命令は受け入れられず、望の身体は前へと進んでいく。手と膝がアスファルトの上を滑走する。それでもなお收まらない速度が、望の胴体を軽々と持ち上げると、小学生の体育の前転みたいに、望の体をゴロゴロと転ばせる。後頭部が地面に打ち付けられるたびに、頭蓋骨の中で、石と砂利を緩く詰めた麻袋を叩きつけるような鈍重なリズムが耳に響く。望はアスファルトを3回転、4回転して、腹這いの姿勢でやっと止まつた。

「うはっ」

痛い。なによりもまず始めて、それを思った。

痛い。手を見る。身体を支えて犠牲になつた両掌は、黒く汚れて、所々が擦り剥けて、広範囲に粒状の出血をしていた。針を突き刺されたようなピリピリした外皮の痛みと、着地の際に打ち付けた肉と骨を潰された鈍い痛みが、コラボレートする。背中と後頭部には、重石がのしかかっている圧迫感。唇がジャリジャリする。膝頭は、見てはいけないが、きっと皮膚がすっかり削げてしまつているのではないか。

すごく痛い。全身が、熱い。

「いたい……」

地に伏した望の顔に、影が落ちた。首を起こし、見上げると、星野の姿があった。街灯を背にした逆光の星野は、望の想像していた自分の姿であった。黒塗りの彼の、両目だけがギョロギョロと、人外のものように光っている。それは一瞬で望に恐怖心を植え付け、開花させた。

「う

「お前

「う」「めんなさい」

望の口から速攻で謝罪が飛び出した。が、星野の目付きは変わらない。だが、星野の言葉と声調は穏やかだつた。

「お前。あんな足音立ててひや、分かるぜ。俺じゃなくつたつてな

星野は、望の蹴りが背中に接触する直前、身体をひねり、腰をかがめて望の射線から逃れたのだ。標的を失つた望の飛び蹴りは、覚悟の無いまま失速をして、墜落してしまった。

星野が一步、近づいてきた。望の身体がビクツと波打つ。こちらに近づいてくる星野の動作に、敵意を感じとつたわけではない。逆に、星野がアスファルトを転げた自分を心配している雰囲気を、望は何となく感じた。でも、星野が近づいてくることには躊躇した。敵意は感じないけれど、星野の目付きを見た望は、彼に殺されるんじやないかと思った。いや、違う。これは星野に飛び蹴りを喰らわそうとした望自身の、罪悪感の増長なのかもしれない。

「立てんの?」

星野から視線を外し、望は答えなかつた。相変わらず痛みを引きずる両手でアスファルトを押し、足に力を入れると、途端に激痛が走る。その出所は擦り剥いた膝頭ではなく、足首だつた。捻挫したと直感した。捻挫は、安静を過ぎ、動作に移るとたちまち凶暴さを増し、足首を激烈に痛めつけてくる。最悪だ、どうやら両足を捻挫してしまつてゐる！

望は四つ這いの姿勢から、立つことが出来ない。震える四肢と、突き出した尻。望の姿は生まれたての仔馬を模していた。人前で披露するには、充分な恥辱を含む格好であつた。望は星野の目の前でとんだ醜態を晒していることに恥じて、身体中の血液が顔面に集まつてくるのを、つまびらかに感じた。

恥ずかしい。最悪のレベルで恥ずかしい。

他にやるかたがないので、仔馬の姿勢のまま首を上げ、上目遣いに星野を見た。暗がりの中、はつきりと見えたわけではないが、星野が疑問と怪訝の表情を作つてゐるのが、雰囲氣で察せられた。仕方ない。星野じゃなくつたつて、自分だつて、きっとそういう顔をするだろ？！ 望は観念した。

「なんだ、お前？」

「ああの、足、捻つたみたいなんです」  
「捻つた？ どっち？」

「り、両方」

「はっ？ お前、バカなの？」

「そ、そんな」と言われても、実際そつですけど……

「立てねーのかよ

「はー」

そこまで確認すると、星野は、へーえと呟いた。例のHOPPEといつ煙草を取り出して、火を点け、悠長に吸い始めた。煙草の赤い火でやつと、目だけではなく、星野の顔全体が見えて、望は安心した。

それよりも、いつまでも生まれたての仔馬をしているわけにはいかない。ここはひとつ、恥を忍んで。

「あ、あの」

「あ?」

「あの、足捻つて、立てそうになーいんですね」

「ああ。それで?」

「え? あの、えつと。えーっと。立ち上がるのに、手を貸してもらないかなあと、思つて」

「お前、人にモノ頼んだことねーの?」

「えつ? ありますけど……」

「そーじゃねーだろ、言い方。なあ、まづ聞つことがあんただろが

「え。それは、どうこいつ……」

「『た』」

「た?」

「『たすけ』」

「え? あ。ああー。あー」

「『たすけ』」

「おねがいします、助けてください」

「よし。助けてやる」

(……せ、性格悪ッ!)

睨みつける望の視線に気付いているのかいなか、綽々と煙草を吸い終えた星野は、望の前にしゃがみこんだ。

星野におぶつもらつた。望は、少し恥ずかしい気もしたが、両足を捻挫してから、肩を貸してもらつたところで碌に歩くこともままならないだろうし、俗に言つところのお姫様抱つことか、死にたくなるほど最悪な方法でもないし、まあ妥当なやり方だな、仕方ないなと思った。幸い、自分たちの周囲には人目も無いことだし。いいかな、と思った。ただ、星野の背中に身体が密着することを除けば。星野はかなり性格が悪いから、おっぱいが小さいとか、なにかしらの皮肉を言われるかと思っていたが、そんなことはなかつた。代わりにこんなことを話した。

「なんか、お前どつかで見たことある奴がするんだけど、前に会つたことあつたっけ?」

「あ、あの。せつせつ、居酒屋で」

「それくらい憶えてるひつーの。むつと昔の事がするんだだけじゃー」

「えー。全然分かんない」

「俺も分かんねえ」

「なにそれ……。似た人じゃないの?」

「かもな。つーかなんでタメ口になつてんだよ、テメエ」

「別に、ほ、星野、お前だつてタメ口じやないか!」

「降りすゞコリハ」

「あつ、あつ、うわつ！ 危なツー！ めん、めんなさい！ タ  
メ口やめますツー！」

「分かりやいいんだ」

(性格悪ツー)

星野は最低の男だ。と、望は思つた。  
なぜこんな男に一瞬でも気をやつてしまつたんだろう。

星野は、最低なだけじゃない。また落とされそうになるかもしれ  
ないと思つて望が腕に力を込めただけで、

「苦しいんだよ、バカツ！」

と怒鳴つて望をブンブン振り回して本気で振り落とそうとした。仕方ないので腕の力を緩めていたら、歩いている最中にすり落ちたうになつた望に、

「バカ、しつかり掴まつてー！」

と矛盾に満ちた罵りを浴びせたりする、とんでもない皿の中だった。

一番頭に来たのは、動けない望を駐車場に放置したまま、ファミリーマートで小一時間近くも立ち読みしていたことだ。けれどそれは、食べたいと言つたアロエヨーグルトをおこつてくれたし、転んだ傷口をペットボトルの飲料水で洗い流し、消毒液でマキロンしてくれたので、水に流してやつた。

星野の背中は、彼が黙つてさえいれば、望にとつてますますの心地よさだった。

いや、まずはではない。正直に、とても心地がいい。おぶられた望の鼻先にある彼の後ろ髪から、シャンプーではない彼独特の匂いがして、ちょっとタバコの煙が混じった苦いそれが、すごく良かつた。気が付かれないうように細心の注意を払いながら、鼻をスンスンと鳴らして嗅いでみた。その行為の、なんだかとてつもなくHENTAI的な恥辱感と、自分の魔女を容認してしまつてゐるような背徳感と、星野に対する敗北感が、望の心臓をキュンキュンと突き刺してきて、頭がフットーしそうになつたので、すぐに止めた。

その変態行為を抜きにしても、星野の背中は、望の父親の記憶と類似した安心を感じさせた。決して認めたくはなかつたが。この気持ちは、きっと魔女という共通の気配を持っている者同士だからだろつと、望は理解した。そうだよ。これはわたしの中の魔女が、わたしの精神に影響を与えているからなんだ。この感情は、わたしが感じているものじやなくて、わたしの魔女が勝手に感じていること

なんだから、仕方ないんだ。絶対、魔女のせいだ。それでもなくちや、こんな男に気をやるわけないもん。絶対、ぜつつつたいに、わたくしが星野を気に入っているわけじや、ないんだよーっ！ と、強く自分に言い聞かせた。自己暗示を掛けようとした。

その試みは無駄だった。言い争いもあつたけれど、ちゃんと家まで送つてくれた星野に、望は携帯電話の番号を交換したいと伝えた。しかし星野は、望が彼に赤外線を送り終えた後、携帯電話の画面を見たまま踵を返して、アパートの階段を下り始めたのだ。

え。と、望は星野を呼び止めようとした。が、番号交換を希望した望の言葉を聞いた時の、興味のなさそうな星野の顔と態度が、望をどめた。そういうえば星野には、彼女がいるつて聞いたつけ。だけど、もしかしたら。それです、自分から赤外線を、送つた、ん、だけど……。な……。

望は去つていいく星野の足音をBGMに、溜息をしながら自宅の鍵を開けた。

電話は、不意にきた。

合コンから2週間を経過した望が、落胆に呻き、ベッドに倒れ伏して、枕に顔を突っ込んでいたところへ、着信した。

低く、相変わらず不機嫌を伴う彼の声が、望の耳にはなぜか、心地よかつた。

異変は犬からだつた。

黒崎望がアルバイトを終えた後の帰り道の民家に、大人しい日本犬がいる。望が民家の庭と街路を隔てる柵の前にやつてくると、望の気配を察知した日本犬はむつくりと立ち上がり、のたのたと望の柵のところまでやつてくる。そしてベロを出し、ニンマリ笑うような表情をしてくれる。望はそんな犬の頭や喉元を、モフモフと撫でる楽しみを、習慣にしていた。それが突然無くなつた。

ある日、望がいつもと同じように柵に近づくと、庭で寝そべる犬は、耳をひょいと望に向けるだけの薄情さで迎えた。前脚の上に乗せた顔も、閉じたままの目も、くるくるとぐるの尻尾も、微動だにさせない。おかしいなと思いながらも、「おーい」とか「わんこー」とか、何度も呼びかけてみた。手を叩いたり、指を鳴らしたり、犬の興味をなんとかこちらへ引こうと試みた。しかし、それが成功することはなかつた。

たまたま機嫌が悪いのかもしね。その時は深く考えず、諦めて家路についた。

ところが次も、そのまた次も、犬は望を無視し続けた。遂には望がやつてくるのを悟つた途端に、犬小屋の中へ身を隠してしまつようになってしまった。望の位置から見えるのは、犬の尻尾だけになってしまった。一体どうしたというのだろう？ 何か犬の気に触るようなことを、気が付かないうちにやつてしまつたのだろうか？ 望は自分の行為を思い返しながら自転車から身を乗り出し、柵に手を掛けた。

その途端、民家の庭先に面した窓に掛かっているレースカーテンが、引きちぎられんばかりの勢いで開け放たれた。カーテンがなくなつた窓越しに、中年女の顔が現れる。女の表情を目にした望は、ギクリとした。中年女の表情から、望に対するはつきりとした敵意

が伝わってきた。思わず人物の出現に驚き、望は緊張して体をこわばらせる。射殺すような視線を望に飛ばしながら、女は庭のガラス戸を乱暴に引き開けた。

「いつの犬に変なことをしないでください！」

女は金切り声のヒステリックを起こした。望は言葉に気圧されて、慌てて柵から手を離す。声に反応して、犬小屋からゴソゴソと音を立てながら、日本犬が久しぶりに望に姿を見せた。だが、犬はやはり望には一瞥もくれない。家人である中年女を見上げるだけだった。女は足元の犬に一瞬視線をやつたあと、再び望に向ける。女の目付きに、望の心がズキリと傷つきた。

「あなた、いつもうちの犬に変なこと、しているでしょ！ やめてください！」

「えっ。そんな、こと。ただ、撫でてただけで」

「やめてください！ 今度は警察を呼ぶからね！」

女は叫び終えると、再び乱暴にガラス戸をスライドさせる。窓と壁が勢いよく衝突し、窓ガラスの表面に映し出された庭の景色がぐらぐらと、割れそうなほどに揺れる。窓の向こうの女は、望との間をしつかりと隔てるように、レースカーテンを閉じた。しかしカーテンの向こうには、女の、あの表情がまだ残り、望を見張っている。犬は家人の退場を見送ると、軒先のサンダルに近寄り、首を垂らして、2度ほど鼻を小刻み震わせた後、くるりと望に背を向けると、犬小屋の中に消えてしまった。

街路を通りかかった男女の2人組が、終始のやりとりに怪訝な表情を浮かべていた。はつきり、望に向けられていた。望は気が付か

ないふりをして下を向くと、急いで地面を蹴った。前傾姿勢で、逃げるような速度でペダルを漕いだ。

レジ打ちのアルバイト中、望は店長に声を掛けられて事務所に来れるよう促された。休憩時間はとっくに過ぎている。なんだろうと、手にした食料品のバークーデをピロピロ読ませながら、心当たりを巡らせる。特に思い当たる節はないのだが。

ロッカーとカーテンで区切られた更衣室、アルバイトの休憩室、そして事務所と、3つを兼ねる部屋の中央には、会議やアルバイトの休憩に利用する長テーブルがある。望は机を挟み、店長と対座する。店長は自分の机から引っ張つてきたノートパソコンを脇に置き、視線を下げてわざとらしい溜息を付いた。望はノートパソコンの画面に帳簿のエクセルが開いていたのを、先ほど店長がパソコンを持ち上げるときに見つけた。店長は溜息のわざとらしさを表情に移し、望に目を向ける。

「言いづらいんだけど、この頃ずっとレジの金額の差異が出ていてねえ」

「はあ？」

店長の言葉の意図が汲めず、望は店長の顔をまじまじと見つめた。店長は望から視線を外してパソコンのディスプレイを、追求する厳しさで睨みつける。

「いや、今までだつて全然無かつたわけじゃなんだけどね。最近、目立つて、黒崎さんに担当してもらつたレジばかりで起きてるんだ

店長の言葉には、望に對する疑いが含まれて、はつきりと感じ取れた。望の背筋がぞわつと泡立つ。店長はレジの金額の差異が、釣り銭の受け渡しによるミスではなく、盜難だと、声に出しているわけではないが、はつきりと言っていた。その犯人として、望を疑っている。望の心の真ん中に大きな穴が開き、恐怖がどつと湧き出してきた。望は慌てて反論する。

「そんな、わたし、とつ、とつたりしません！ 交代するときだつて、歸るときも、ちゃんと点検します！」

「いやいやいや、やうこいつを言つているんじゃないんだけどね

爬虫類のように冷ややかな目付きで、望の反応を確認した店長は、あたかも想定してような、準備されていた謙遜な態度で、しかし、手のひらを望に向けて、望の主張を遮るポーズを取った。店長の仕草を目にした望は気が付いた。望へ盜難の嫌疑をかけている店長の内実は、全く別である。心臓が痛み走るほど大きく脈打つた。

店長は、望がレジの金を自分の懐へ盗取していると、疑つてゐるのではない。望を揺さぶり、反応を伺つてゐるのではない。彼は始めから確信をしていた。望が犯人で間違はない。事実なのだ、と決めつけてかかっている。『俺は知つてゐるんだぞ、全部知つてゐるんだ』店長の心の内が、耳に飛び込んでくる。なぜ？ どうして店長はそんなふうに確信しているのだろうか？ 証拠なんてあるわけがない。証拠もなにも、本当にやつていないのでから！ 状況証拠だけで判断しているとでもいうのだろうか？ いや、望の知る限り、店長はそれほど簡単な人間ではない。それなのに、どうして。望の胸の中で、覚えのない罪悪感を押し付けられる不快さと、潔白の自分を醜穢だと決め付ける店長への怒りが、どろどろと混ざり合つ。それが望の心を漆黒に塗り上げる。望の全身から汗が吹き出してきた。

「黒崎さんめずらしく、眞面目にやつてきてくれているし。そんなことは、少しも思っていないんだけど。でも最近になって、黒崎さんが使ったレジばかり立て続けに金額の差異が出てるから。お密さんからお金をもらつたり、釣り銭を返すとかと、もつとちやんと確認をしてもうれるかな。初心にかえるつていうかさ。悪いんだけど、遊びじゃないんだからね。仕事しているんだから、いい加減な気持ちでやつてもらつちや、他のバイトやパートさんにも悪い影響を与えるしね。なんだかレジしているときにも、まつりとしてるところがあるって、最近何人かのアルバイトから聞くこともあって。具合が悪いなら、無理して出なくともいいから。むやんと、ミスしないよ」といつてもらいたいんですよ」

望は、店長の話をほとんど聞いていなかつた。

それよりも、そんなことより、これはなんだか、この違和感。今までの自分の生活に降りてきた、違和感の塊。どういう事なんだか、おかしい。いくらなんでも、これはおかしい。

「でもこれで黒崎もいなくなるんじゃない?」

「あははっ。ヤツタ! って感じだったよねー」

「店長も軽く信じすぎだ」

「だよねー。あたしが疑われたら、こんなこのバイトなんてすぐ辞めるつて感じだし」

「呼び出されたあの、あいつの顔すゞかつたねー。」

「顔面蒼白だつたねー、マジウケたー！」

「実は、ほんとこちつてたんじやね?」

「ひやまつ、ひどいー！でもえうかもね！」

「わたし、店裏に黒崎と回じシフトに入れないでって、頼んじやつた」

「はあつ？ マジでー！？ ほほほ、ウケるーー！」

「だあつて、見るだけでムカついてくるんだもん」

「わたしも店裏に黒崎でみよしがなー」

「やうひしてもらこなよー」

「てか、早く辞めなにかなーあいつ」

「ホントホント。マジでさつさとこなくなつて欲しいよね

「アハハツ、そつだねー。まあこの調子でやつてきや、あいつも辞めるつしょ」

アルバイト仲間の会話は、望の耳に筒抜けだった。更衣室は、事務所の一角をロッカーとカーテンで隔てているだけなので、事務所での会話は極端に声量を押さええるかしないと、はつきりと聞こえて

くるのだ。

望は着けていたエプロンを静かに外してハンガーに掛け、少しの音も立たないように、そつとロッカーの扉を閉ざした。足音が立たぬよう細心の注意を払って、カーテンの隙間から身をすり抜けさせ、事務所の扉から外へ飛び出した。

「お前たちのせいか」

電球色のユニットバスで、黒崎望はつぶやいた。

シャワーを浴び終えた洗いざらしの髪が、彼女の体に張り付き、肩から乳房、脇腹に掛けて、漆黒のヴェールになり、包んでいる。湯気に曇った目の前の鏡を掌でぬぐい、水滴ごしの自分を映しだした。鏡の中の瞳が闇色に燃えて、光を全く反射していない光景を目にして、望の憎悪はますます肥大する。

魔女が力を強めている。

今まで臭いものに蓋、の言葉通り、自分の魔女が少しでも現実に出でこないように、渾身でもって抑制していた。他人を悪く思つたり、他人に不快を感じさせない言動に徹してきたつもりだった。自分の中の魔女から湧き出すもの以外、心の闇黒が浮かばないようとに細心の注意を払ってきた。

それでも、無理だつたのか。無駄な足搔きだつたのだろうか。一  
体、どうして。どこから魔女が出てきているのか？

他人に対する自分の行為を、一つ一つ丁寧に思い出しながら分析をしていく望に、ある記憶が蘇った。合コン。居酒屋。あれか。魔女の力を初めて利用して、黒い手で掴み取つたルイヴィトン。あの一度きりの、アル「ールのせいでタガの緩んだ抑制の隙間から、ぬるぬると漏れ出てきて、つい利用してしまつた魔女の力。あの時使つてしまつた魔女のせいなのか？ 厳重に目張りをして、これ以上

ないほどの重石を乗せて、更にその上から荒縄でぐるぐるに緊縛して、決して漏れ出ることがないように願つた魔女への封印の決意が、たつた一度だけの力の解放で、すべて崩れてしまったのだ！ 魔女を閉じ込めた封印が開いたのではなくて、頑丈に造つたはずの、魔女を囲つている壁のどこかしらに亀裂が入り、その隙間から魔女が、チロチロと漏れでてきているんだ。きっとそうに違いない。そして、壁の亀裂を造り出したのは他でもない、自分自身なのだ。

望は、唇を強く噛んだ。自責の念を代弁する赤い血が、唇と歯の隙間から滲み出てきた。挽回できない自分の失敗に、心がたちまち闇黒に落ちていく。望の悔恨の意を、魔女たちはすぐに認識する。

鏡に映つた望の耳と肩の隙間、髪に隠れて影になつた部分から、小さな赤い点がポツリポツリと現れる。光の加減や、望の目の錯覚ではなかつた。赤い点は魔女たちの目だ。赤い目は姿を表すと数回瞬きを繰り返す。そして鏡ごとに望と視線を合わせると、笑いながら消えていく。そしてまた、別の部分に別の目が出てくる。それが何度も何度も続いた。退屈なオカルト映画のワンシーンのような光景に、望の憎悪は終着した。魔女は望の感情を読み取つていて。

望の黒髪の中に、魔女の目が一斉に出現した。46個のまばらな大きさの、赤い水玉模様が望の紙を染め上げる。バラバラに瞬きをしながら、魔女たちは笑い出した。低い声で、高い声で、唸り声で、擦り切れた声で。望の全身がゾッと粟立つ。魔女が自分の心を覆い尽くしてしまい、そして最後には、自分も赤い目の仲間入りをしてしまうのではないか。その予感に恐怖が湧き出してきた。

望は楔を打ち込むように、魔女に対する恐怖心を、すぐさま激昂で上書きした。右手を強く握りこみ、鏡を強く殴つた。壁の潰れる音と、鏡の割れる音がけたたましく響いた。洗面台に破片がザクザクと落ちた。望と鏡の接点からは、赤い血がドロドロと、粘度の高い油のように流れ落ちてきた。

望は気がついていた。魔女を憎んではならない。けれど、それをしては、怖くて怖くて、震えが止まらない。だから恐怖を憎悪

でくるんで、心の奥に精一杯押し込んで、なかつたものにして無視をした。恐怖なんて少しも感じていないと嘘をついた。

魔女を憎んではいけない。魔女から脱却したいものが決して破つてはいけない約束なのだが、望はそれを守らなかつた。だがそうしなければならない。そつしなければ望の精神は闇黒に朽ち果てて、負けて、死んでしまう。

魔女たちは望の擬態を見抜いていた。望は自分たちを怖がつてゐる。怒りと憎しみで、それを誤魔化そうとしている。まったく、ダメな子だねえ。諦めて受け入れることが、あたしらと共に生きる入り口だつてのに。それを知つてゐるのに、知らないフリなんかをしちまつて。12年間、わたし達を憎んできた記憶が残つてゐるから、私たちを許すことができないのね。うひつ、うひひつ。なんてあたしたちにとつて都合のいい、弱々しくて、クソみみたいにきつたねえ心を持つてゐるんだろうね、この子は。これじゃあアタシたち、嬉しくつて嬉しくつて、よっぽどこいつから離れることができなくなるじやないか！　ああ、なんだつてこんなに気持ちのいいことばっかりしてくれるんだろうね、のぞみちゃんは？　なあーんか、お返しをしてあげないと、バチが当たつちゃうよね。うひつ。

この街には数人の『情報収集屋』さんと『データベース屋』さんがいます。

情報収集屋さんは、この街にどんな能力者がどれくらいいるのか、いつどこでどんなことがあつたのか、どんな戦闘があつて誰がやられて誰が勝つたのか、そんな情報を集めています。そしてそれをデータベース屋さんに、金銭や他の情報との交換を前提として提供しています。

データベース屋さんは2種類います。1つは、情報収集屋さんから手に入れて、溜め込んだ膨大な量の情報を自分で楽しむだけの口

レクショナー。もつ一つは、情報収集屋さんから手に入れた情報をさらに、金銭や物品を媒体として、情報を欲する人へ提供する商売人。

大丸剛史さんはデータベース屋さんの、後者のほうです。

大丸さんはネットや携帯で閲覧のできるウェブページを運営しています。会員制ですが、月額利用料金は100円（税込）と非常にリーズナブル。安いからといって、彼の扱う情報がガセネタばかりだと、使い回しの古いものだつたりとか、そういうことは滅多にありません。ウェブページの更新頻度は街の誰よりも多く、一日に最大120回の更新が掛けられたこともあります。情報の正確さも秀でていますし、新着情報へのレスポンスと、その後の動向調査も、他のデータベース屋さんより一枚も一枚も上手です。この街にはもはや、なくてはならない存在の大丸さん。彼のウェブページに現在登録中の有料サービス利用者は、なんと5万ユーザー。いやー、これって凄いですね。

我々取材スタッフの中にも、大丸さんのサイト利用者がいることを知り、大丸さんは食べかけのラーメンを口元から盛大にこぼしながら、照れ笑いの謙遜でこちらに振り返りました。

「ぶひつ、おだててもろても、なんも出ませんで。ぶひひつ。商人やさかいな、ボク」

いえいえ、そんな。でも、やっぱり凄いですよね。大丸さんの情報って、いつも正確だし、何より更新が、早い！ これって何か、情報収集のやり方に、他の方とは違う秘密があるんでしょうか？

「あ、あかん。シャツにシミがいつてもうた。まあええわ。オカンに頼んでシミ抜きしてもらお。ああ、ボクのオカン、クリーニング屋で働いとつてね。これが、腕えんですわー。見かけはただの、クルクルパームのオバちゃんなんやけど。こないだもねえ、戦いで

もって、シャツを血しまみれにしてもうた常連さんが来てね。『これ、このシミどうにかしてくれ』って頼みはんのよ。なんや、えらいお気にいのシャツやつたそうでね。せやからボク、その人にオカソウ紹介してあげてね。えらい感謝されましたわ。『ぶひつ、せやからボクもね』お前、オカンの腕がええんは認めるけど、たまにはなあ、いつつも特ダネ提供してやつてるボクにも、オカンの半分くらいは感謝せえよ!』ってドツいてやりましわ。『ぶひや。ええと、で、なんでしたつけ? ああ、情報収集の、秘密? ああ、せやね。つていうかあんた、そんなん言えるわけないでしょ。それがあんた、いわゆる企業秘密ちうやつやないです。まあ、仮にもしココでボクがソレを教えたとして、他の誰かが真似しよう思つても、ようでけへんでしょうけどね。なんや、あえて言うんならね、ボクが昔から今まで、長年培ってきた、人徳! 人徳いうヤツのおかげですわ。ぶひや、ぶひやひやー!』

人徳! さすがですねえ。さしづめ『人徳の大丸』といったところですね。それにしても、大丸さんもやつぱりこういった職業柄、誰かに狙われたりとか、危険な目に遭つたりとか、やつぱりあるんでしょうね?

「ああ、そりやありますよ。もちろん。全部がボクの情報のせいとは、よう言いませんけど。壊滅したチームとか、危ない目に遭うた人とか、まあ、死んだ人もおりますしね。せやから今の質問どおり、命狙われたことも何度かありますよ。両手では数えきれへんくらいね。足の指も入れたら、数えられるもんやけどね。『ぶひやつ。だけどボク、そのへんに転がってるような、ただの情報屋とは違うからね。これもなんや、企業秘密ちうもんやから、ぶひつ、細かくは言えませんけど? ボクにも色々能力あるしね。あと、人徳? ぶひや! ボクの情報で困らせられた人も、そりやようさんあるんやろうけど、ボクが死んだら困る人も、それ以上にたくさんあるからね。

そういう人らの、まあ、善意で？　ぶひやひや、善意でもつて、これまで生かしてもらつてゐるつちう話ですわあ！　ぶひやひや！ボクん所は他と違つて、氣のいいお密さんばかり恵まれとつてね、ほんまもうコレは、お金で回つてゐんぢやいまつせ。コーナーのみなさんとボクとの、助け合い！　ぶひやつ！　助け合いがあつてこそ、大丸ですか！　ぶひやひひやーッ！　あー、なんか、誰も突つ込んでくれんから自分で言つけど、うまこことまとめたわあ、コレ

「善意！　人徳の上に、善意とは、恐れ入りました。仏様みたいですね。

「せやから、おだても、何も出せへんて！　ぶひやー！」

またまた、ご謙遜を。

「いやあー、うん。せやね。まあ確かに命狙われて、ヒヤヒヤしたことはずむづ、一度や一度ぢやいますからね！　中でも凄かつたんが、ここ。このラーメン屋。ここに来るとね、まあせやつても、毎晩このラーメン屋、来てますけどね！　ぶひや！　思い出しますわ。ここにね、いつだつたかなあ、まあ細かいのは置いといて、ここに星野哲郎が来たことあるんですね。ボクを訪ねて」

えつ。星野哲郎つて、あの、星野哲郎ですか？

「うん。あの星野。以前に『Ecstasy of the Angel』が潰されたでしょ？　あの、なんだつたか、ほら、その、チームの人」

鰐淵武人ですか？

「ああ、それそれ。鰐淵。あれを星野がやつたのは知つどりでしょ？でもね、ほんまはアレ、半分はボクがやつたんですよ？半分ね。言つたら、星野とボクの共同作業ですわ。共同作業。ぶひゃ、結婚式ちやうで！」

それは、初耳です。それは、凄いですね。

「まあ、結婚式は置いといてね。星野が鰐淵を潰す言つてね、それにあたつて、ボクに協力を求めて來たワケですよ。このラーメン屋に。そんでその時ね、ボクは星野に言つたりましたわ。『話はええから、このラーメン食つてからにしといてんか？』ってね。カツコよくな。人差し指立ててね。ラーメン屋入つてきて、水だけとか、人として違つでしょ？そんで星野にラーメンおこなつたんですけどね。ウマイウマイ言つてましたわ。ねえ大将！このラーメン、いつもじつづつまいでの！ ありがとね！あ。せや。ごめんじめん、アンタちらも食べる？ 今日はなんや気分ええし、ラーメンおこなつたるよ？」

ああ、ではお言葉に甘えて、頂戴します。それで、星野が？

「大将、ラーメン3つとギョーザ3枚、追加で！ ギョーザもボクがおこりますがな！ 財布のぞかんでもええですつて！ あ、チヤーハンのほうがよかつたつて？ なーんて、ちやうか！ ぶひゃ、ぶひゃひゃひゃー！」

それは、ありがとうございます。それで、星野が？

「今日のこと、みんなには広めんといつてや？ ボクがおこなつたことね。いんなん知れたら、金のないビンボ一人や、最近のアホみたい

な若い連中がよつさん押しかけてきますからね。口口だけの話にしどってくださいよ？ 約束ですよ？ 「ぶひやつ」

「はい、それはもちろん。口口だけの話ですよ。もちろん。それで、星野が？」

「ああ、そうそう。星野。星野が来たとき、あの時だけはね、さすがにボクも殺されるかと思いましたわ。実はボクね、ああ、コレは絶対言わへんから、勝手に想像してもうてくださいね。星野をね、あるチームと協力して、潰したろうと言うてね、そいつらと手を組んだことあつたんです。まあ失敗したんやけどね。それを星野が知つて、ボクを殺しに来たんぢやつかと思いましてね。彼がここに来たときに。いやー、あの時の悪寒は、いつ思い出しても、ゾッとするわ。クーラー、いらへんようになるわ。あつ、大将、ほんまにクーラーきつたらあかんよ！ リモコン持つて！ なにすんねん！ 「ぶひやひやー！ ね？ 口口の大将も、おもういでしょ」

なるほど。これまで幾つもの修羅場をくぐり抜けてきた大丸さんでも、星野は、ヤバいと。

「フーッ。やうやね。ちょっと喋りすぎで、あつなってきたわ。大将、ちょっと温度下げてんか。2度くらいでええよ。そうやねん、ボク、今まで仕事でね、いろんな人と会つたり、命狙われたりしてきたけどね。星野。あれはマズイですわ。あれはね、規格外。人間とちやいますわ。たまーに、星野がらみの依頼を持つてくる輩があるんですけど、全部断つてますね。あれ以来。お前が死ぬんは勝手やけど、ボクまで巻き込むなや！ って言うたつて、追い返してますわ。まあ、星野は、でもね、みんなが思つてるんと、ちょっとちやいますよ。ホンマはええ奴やと思います。イメージだけ一人歩きしてもうてる感じでね。ボクもあいつと直接顔合せるんまでは、え

らニアカン奴や思つてましたけど。あいつは、あれで礼儀はちゃんとしどってね。若いのに、殊勝ですわ。鰐淵の件でも、ボクが仕事やりやすいよつて、手土産持つてくれたりね。まあ、凄い奴ですよ。色々ね。でも、関わるんはもう、「ゴメンやけどね」

「……」で、我々と大丸さんの間に割つて入るかのよつな、アニメの主題歌だと誰もが間違いなく理解できる着メロが、大丸さんの携帯電話からけたたましく鳴り響きました。大丸さんは着メロに抗議の睨視を向けると、携帯電話をひつたくります。どうやら着信通話ではなく、メール受信のよつでした。

しかしディスプレイをチラリと覗くや否や、それまでの眉を寄せた表情の大丸さんが、突然目をまん丸に剥き出して「ええっ！？」とことさらな大声を発したのです。

そして脇に控えていた我々を押しのけ、手荷物から小型のパソコンを取り出しました。それを、ラーメンの丼を押しのけたスペースで広げます。パソコンの壁紙は我々の期待を裏切り、ウインドウズのデフォルトのままでした。ほんの僅かなキーピッチしかないラップトップ上で、丸々と肥えたカブト虫の幼虫のような10本指があまりに器用な高速キータイピングで残像を発生させながら、文字を打ち込んでいました。見たところタイピングミスは一切ありませんでした。

大丸さん、一体、どうしたというのですか？ 何か。特ダネが？

「えー、あ？ ああ、ごめんやで。うん。特ダネが入つてね。せや、今からこいつをボクのサイトにアップすんねんけど、君等にはアップ前に、特別に教えたるわ。ぶひやつ、特別でつせ」

「魔女つて、魔女つてさあ、強いの？」

笠原雪子がスマートフォンのディスプレイを見つめながら言った。それを聞いて、西田恭平は口に含んでいた烏龍茶を吹き出しそうになつた。慌てて飲み込んだ烏龍茶が、僅かばかり気管に届き、むせる西田の胸が激しく上下する。雪子はそれを鼻で笑う。西田の咳に合わせて、彼の手の中でせわしなく氷の触れ合ひ音を立てるグラスを、熟練の手捌きをもつスリのような鮮やかさで、無音で奪い取つた。雪子がグラスをテーブルへ置くと、西田はグラスの横を目がけて、反対側の手に持つていた読みかけの文庫本を放り投げる。それから、呆れと叱責の混じつた視線を雪子に向ける。雪子は西田の視線に彼の本位を汲み取つて、瞳をくりつと上に向け、肩をすくめて、やれやれと彼に背中を向けた。

「やめてください」

「あはは。強いかどうか、聞いてるだけだよ？」

「強いですよ。もちろん。だから、やめてください。ちよつかいでも、手を出すなんて考えないでくださいね」

雪子が西田の言葉を、最後まで聞いていたのかどうかは、判らない。彼女は手にしたスマートフォンの裏側の、鏡面加工に映しだした自分のヘアスタイルをいじっていた。明るめのブロンドに染めたミディアムの髪は、肩に少し触れるくらいのところで内側にカールしている。その先端を指でつまみ、他人には判らないくらい繊細な

湾曲を整えるのに夢中になつていった。西田はため息を付いた。先程の烏龍茶が、まだ僅かに残つてゐるようだ。胸の中に湿りを感じて、大きめの咳払いをした。それを自分に対する何かの合図だと思ったらしい。雪子は髪から指を離すと、西田に向き返つた。

西田は雪子の考へているものを白紙に戻すために、雪子の瞳を真つ直ぐに見つめて、強い決意を乗せて言つた。

「やめてください。大怪我します、死ぬかもしれない」

言葉に対しても雪子は、屈託のない純真な子供の持つ笑顔で、えくぼを作つた。

西田の思いは届かなかつた。同時に西田は、先ほどとは全く別の決意した。雪子の、この笑顔が続くようにしなければならないと。

笠原雪子は完璧だつた。幼い頃から。学業は言つまでもない。机上の成績はもちろん。なんの種目も卒なくこなす運動能力。一度読んだ本はすぐに諳んじるし、歌唱も流行りから演歌までプロ並だ。誰かに疎まれたことがないのは、彼女に告白をして、それを断られた凡百の男女や、彼らの取り巻きたちが、その後たつた一言も彼女の悪態をついたことのない事実が証明する。政治家の御曹司から、道端で衣食住を済ます浮浪者まで、交友も幅広い。彼らから誘いのあるショッピングやレジャー や炊き出しに、雪子が一切の拒絶もせずに参加するのは勿論のこと。最近も合コンやクラブのライブイベントに誘われて、交友の幅をより一層広めてきたところだ。

笠原雪子の容姿は清潔で、肢体には一欠片のシミもホクロもございません。神々しいといつも單語は、彼女のために造られたと言つても過言でないほどでござります。それを裏付ける1つのエピソードとして、学生時代のことですが、更衣室で雪子の着替える最中の素肌を直視した女学生の数十名と、更衣室を覗き見していた男子生徒の数百名が、あまりの美しさに気をやられて気絶してしまった事故が、

数えきれないほど起こつたものでございました。雪子の万物に訴えかける美しさは言葉通りでありまして、彼女の美しさが及ぼす範囲は心のあるものだけには留まりません。雪子の前では無機物ですら自信を喪失してしまつよつとして、彼女が通り過ぎた後のウインドウショッピングは、腰の部分から折れ曲がり、まるでうなだれを表現するようなマネキンで埋め尽くされる光景が常でございます。彼女の体躯の中でも際立つて素晴らしいのは、白くしなやかな肌が百合の花弁を連想させる、長く伸びた四肢でござります。喜びの感情を心の中に包み隠すようなことはせず、表情や言葉だけではなく行動でもつて表すこともはばからない雪子から、突然に抱き付かれ、柔らかな腕を絡ませられた老若男女は、あまりの光栄に我を忘れて、たちまちのうちに昇天致します。また、ちょっととしたおふざけが大好きな雪子が繰り出すロー・キックをお見舞いされた方々は、雪子の御身足が盛大にヒットした瞬間、歡喜と慈愛を心のなかに深く刻まれ、それはもう治療することができる彼生涯に背負つのでござります。それを唯一救済することができる彼女の笑いえくぼを一目でも拝観しようと、日頃から雪子の元には彼女の信者の集団が集うのでありました。雪子はこの世に生まれ落ちた、まさに天使様といった様相をしながら、毎日を過ごしております。

しかし、雪子自身はずつと以前から、子供の頃から自分を取り巻く環境と、生まれ持つた才能とに、一度と熱を帯びないほどにまで冷たく、興味を抱かなくなつていた。とはいへ彼女には、そんな氷塊な人生を捨てようという気持ちは微塵もない。彼女の内に宿つた倦怠は、彼女自身と、親しい一部の人間を除き、誰にも気取られることなく、どんどん広がつていた。そんな折にふと、彼女は気が付いた。自分の中にある求め。これまで考えたことのない気持ち。誰かを気持ちよくさせたり、嬉しがらせたりするものとは真逆の存在。他人に心の底から憎まれてみたい。

雪子は今までに何度も戦闘をしたことがある。彼女の所属するチ

ームに敵対する他人とのものだ。そのどれもに勝利したのは言わずもがな。場合によつては雪子の姿を目にしただけで、敗北を受け入れるチームもあつた。雪子の前に平伏した彼らが、そのあと雪子にさらなる敵対心を募らせたこともなければ、復讐を企てたことも全くない。みんな雪子に優しい瞳を向けてくる。心底、退屈だ。

あるとき、一人の男と戦闘をした。もちろん勝利したのは言わずもがな。彼はそれまでの相手と少し違つた。雪子に對してほんの僅かだが、敵意を向けてくれた。雪子は彼の目に宿る闇黒に気が付いた時、今までに感じたことのない心臓のリズムを自分の内に聞いた。でもあれは、なんていう人だつたつけ。犬みたいな名前と顔とにおいだつた。彼との戦闘で、雪子は期待を抱きながら、ほんのちょっとだけ本気と本心とを含ませて、彼と交えてみた。でもそうしたら、犬みたいな人の目からは、煙が風に吹かれて消えてしまふように、たちまち戦意と敵意が失われてしまつた。それが分かつた途端、雪子の期待もしぶんできしまつた。戦いに敗れて地面に額を擦りつけ、雪子に謝罪を見せた彼。彼の丸まつた背中に、雪子のしぶんだ期待はちょっと諦めが付かなかつた。彼の胸ぐらを掴みあげると、自分でもビックリするくらいの音が鳴る強さでもつて、往復、ビンタを氣の済むまでしてみた。けれど、彼の顔が赤く腫れ上がつて、所々雪子のネイルアートで引っ掻かれた皮膚に血が滲んできて、あ、結局右目は大丈夫だったんだつけ？ あの人、失明せずに済んだのかな。彼が不意に首を動かしたせいで、彼の右目に爪の先が入つて、凄く変な色の涙が出てきて、ちょっと背筋がサワツとしたのは心地が良かつたのだれど、それでビンタを止めた。それでも彼は、ほんとに忠犬みたいな表情で、腫れ上がつた顔を雪子の足元に擦りつけて、雪子に対しての終生の従属を願つてきた。あれれ、やつぱりダメなんだ、つて思つた。そのとき周りには雪子の仲間が何人もいたんだけど、誰もやりすぎだと咎めたり、雪子を制止する行動を起こしたりなんてことは、全然しなかつた。みんな、雪子の行動を『許す』とか、『諦めた』とか、ネガティブなベクトルではなくて、全て承

諾して受容した瞳で見つめていた。子供の頃から何万回も田にしてきた、いつものやつだ。

そんなことがあってから雪子は諦めて、しばらく戦闘を止めることにした。

雪子の精神祖型は天性からの天使で出来ている。彼女がどんな言動をしても、どんな思想を持つても、どんなに汚れた酷い欲求をしても、彼女の心を否定することは、凡百の民にはできない。

西田恭平は雪子の本心を知っている。彼女は誰かに憎んでもらいたいと思っている。殺意して欲しいと羨望している。馬鹿な。他人に恨まれる状況を、「冗談でもなく、眞面目に、眞摯に欲して、求めているだなんて！」そんなものがない人生のほうが、よっぽど素晴らしい、何よりも代えがたいものなのに。雪子は知らないのだ。本当の恐怖を知らない。闇を見たことがない。だから、求めるんだろう。

だから、雪子は魔女を求めたのだろう。魔女は人々の憎悪の対象だ。恐怖の具現だ。西田はかつて、雪子に魔女の話をしたことはなかった。万が一にも雪子が魔女に興味を抱いてしまっては、それこそ挽回の出来ない失態に繋がってしまうのを、痛切に理解していたからだ。しかし、交友の広い雪子のことだ。いつどこで誰から魔女について吹き込まれるか分からぬ。数年前に雪子が携帯電話を手に入れた時、彼はどんな事柄よりもまず、雪子が魔女についての情報、いつかそこから知つてしまふのではないかと焦燥した。昔と違い、この街の情報はどこの誰に対しても、自動販売機でジュースを買うような手軽さで手に入るようになつていて。そして危惧した通り、雪子は魔女の情報を手に入れ、気をやられてしまった。魔女と対峙してみたいと希望してしまつていて。魔女ならば、自分を憎んでくれるのだろうと期待している。欲望している。

西田は、魔女と対峙したいと願う雪子の心を、一寸たりと残さず

に払拭しなければならなかつた。彼女に合ひのは光り輝く道だけであつて、暗がりに続くような汚れた道は、靴の裏にだつて踏ませてはならない。西田は雪子の守護騎士である。雪子の姉であり、西田の姫である明海に、命令されている。雪子を守ってくださいと。西田は決意していた。明海の命令よりも、ずっと以前から。彼は命を賭して雪子を守るため、彼女の傍らに控えている。

けれど、西田も雪子の力には逆らえない。雪子の欲することものを、彼女の口から直接命じられたのならば、自分にはそれに抗う力の無いことを、西田は理解している。彼女が魔女を欲しているのであれば、雪子に魔女を差し出す道筋を立てなければならない。西田は自分の方針に悔恨した。雪子には魔女を隠すのではなく、魔女の残酷な恐ろしさを諭し、理解させ、雪子自身の意思でもつて魔女を遠ざけさせるべきではなかつたのだろうか。しかしその懺悔はもう届かない。罪を償つために、西田は全靈でもつて雪子を守護しなければならない。西田は準備を急かねばならなかつた。雪子から魔女を遠ざけることが叶わなくなつた今、次のシーンに移らなければならぬ。魔女の討伐だ。

「黒崎望つて、わたし知つてるんだ。お友達じゃないけどね。こないだの、合コンのときにヒトミちゃんが連れてきたの。途中で居なくなつちゃつたけど。彼女が魔女だつたなんてね。あの時はそんな雰囲気、全然なかつたのになあ。でも、狭いねえ。世間つてさ」

「合コンですか。いいですね、花の女子大生。若さを無くしたおじさんは羨ましくて、涙で、前も見えませんよ」

「それは、困つたわ！」

雪子は西田の座る椅子の背もたれに手をついて、嬉しそうにピヨンピヨン飛び跳ねた。それから背もたれごと、西田の首を抱きかか

えた。西田は苦笑して、手で田元を覆い隠すよつてして、口めかみを揉んだ。

手元に隠れた視線は、雪子のなかの魔女を。小指の先にも満たないほんの小さな黒い刺となり、大切な雪子の心に深く突き刺さった魔女に向けて、鋭い光を放っていた。

黒崎望がベッドの上であぐらをかいてぼんやりとしていると、久しぶりに携帯電話が着信を知らせた。ディスプレイに表示されているのは『星野くん』だ。うつひやあ！ 望は飛び上がり、ベッドの上に正座した。見られるわけでもないのに、髪を手ぐしでサッサカ整えて、上着の襟元を正すと、あーあーあーと喉の調律を行い、大きく深呼吸をして、心の準備を整え、そして通話ボタンを押下した。受話口の星野哲郎はやっぱりというか、いつも通りというか、不機嫌そうな声調から始めた。それでも望はドキドキしていた。

「デートなの？ それはデートのお誘いなの？」

大事なことなので、一度聞きました。受話口から、なんか、唸るような、変なノイズが聞こえてきて、あー、困ってる。困つてると思つて、わたしはニヤニヤしつぱなしだつた。唸り声の延長から星野は、やつと言葉を返してきた。

「いいから、どうなんだよ。來るのか、來ないのか？ 他に予定があるならいい」

答えなんて、最初から決まっているのに！ わざわざ確認なんて

必要ないのにつ！ イエス！ イエス！ イエスだよ！ 行く！ 行きます！ 行きますともつ！ 例えどんなに大事な予定があつたつて、全部ほっぽり出しちゃうよつ！ ないけどね、予定なんで初めてから、なんにもないけどね！ ないけど、ないけどーつ！

「あー、うん。確認するから、ちょっと待つて！」

つて答えて、わたしはソーリーとルイヴィトンから手帳を取り出して、予定を確認するフリをするのです。開いた手帳は、真っ白！ 買つたまま！ 一文字だつて書いてない！ やびしい！ でもいい、いいんだよそんなの！ 今から書くんだから！ デートって太字で書くから！

「うん。その日は空いてるよー。一日大丈夫だよ」

「分かった。じゃあ、駅前に来い。時間は、あー、何時でもいいやかしーでしょ」

「何時でもつて！ 待ち合わせするのにて、時間決めなくっちゃ、おなんて言つたけど、何時でもいい！ 何時だつていーよッ！ あなたが言つなら、何時間だつて、何日だつて、ずっと待つちやうー！ 来てくれるまで待つてちやうもんねー！」

「あー、じゃあ2時だ！ 2時に来い。いいな」

「うん、2時にね。14時だね！ 分かった、いいよー！」

メモだ、早速メモしなくちゃー！ ヒヤツハー！

「……なんかお前のケータイ、おかしくねーか？　さつきから、たまに雑音が入るぞ？」

「えっ？ そつそつかなー？」おかしーな、故障かなあ？」

やだ、荒くなつた鼻息が掛かつたのかな。  
慌てて人差し指を横にして、鼻の穴を塞いだ。

「じゃあそういう」とで、頼んだぞ」

一  
うん

「じゃあな」

「あり！ ほり、星野くん！ ちよりと繋りてっ！」

一  
あ  
あ  
?  
」

「お、おやすく！ おやすみなれー！」

— ああ

電話が、切れた。

でもいい、でもいいの！

わたしはそのとき、ベッドの上にかしごひつて正座していたんですけど、膝だけの跳躍でクローゼットの前まで飛んでいきました。こまけえことは、いいんだよー。そういう気分だつたんだよッ！

クローゼットの中の服を全部取り出して、片つ端からベッドの上に並べました。さあ、どうする？ どういう組み合わせにしようか？ ハンガーに掛けたままの服を、姿見の前で何回も何十回も、何百回も体に合わせてみた。

「ダメだ！ なんかちがう！ 全部なんかちがう！ イメージとちがうしつ！」

『う、るつせええええええええ…』

『このクソブタ売女がッ！ 口を開じろおおおー…』

『死ね。死ね死ね死ね死ね、死ね！』

「うひつ…？」

突然、頭の中で幾つもの怒鳴り声がした。驚きのあまり、思わず手に持つてたワンピースを落としてしまった。外音じゃなくて、内面からの声だつていうのは、すぐに察知した。魔女だ！ 魔女がわたしの中で、叫んだ！ これは、こんなにはつきりとした魔女の声が聞こえるなんてことは、魔女を継承した、あの夜以来のことだった。やっぱり、わたしの中の魔女が、活動を密にしているんだ。

最近の、変な違和感。ワンドコに嫌われたり、店長に疑われたり、バイト先の友達に嫌われたり、鏡に映った変な目も、やっぱり、そうなんだ……。これで確定した。事実を突きつけられた。あれは、やっぱり、わたしの中の魔女のせいなんだ。

「でも、いーの一ー今はそんなの、どうだつていいんだッ！」

わたしは振り上げた右腕を袈裟斬りに払つて、その一撃で魔女を払拭した。わたしの切り結んだ決意の前に、魔女の声は閉め出され、ピタリと止まった。

わたしの、今のわたしの心を覆い尽くしている、この幸福感、充足感といったら。今この瞬間のためになら、今後の人生が魔女のせいでどんなひどい目に遭つても、全部許せる。どんなことだつて受容できるくらいに、幸せだ。しあわせでいっぱいなのだ！

星野が、わたしを、デートに、誘ってくれた！

この事実だけで、わたしの心は未だかつてないほどの幸福に満たされたのだ！ 心に光が差し込んでいるのだ！ しあわせで、窒息死しそうなくらいに、胸がいっぱいなのだ！ これはいくら魔女の力でも、覆せない、変えられないんだよッ！

わたしはボクサーみたいに構えて、2・3回シュッシュッシュと、ジヤブを切つてみせた。

「今のわたしは、今世紀最強だ！ かかつてこい、魔女どもめ！ どうした！ わたしからこの幸せを、奪つてみせろ！ 閻黒で上書きしてみろッ！ できないのか！ できないんだろッ！ ひつひー！ なんでもやつてみろッ！ わたしを落ち込ませて、絶望させてみせろ！ 残念だなッ！ お前たちには、どうしようもできないんだ！ ざまあみろッ！ わたしの勝ちだッ！ ふつひーッ！」

腹の底から、わたしは勝利の雄叫びを上げた！

と、その時だ。突然、壁の向こうから、『ドスン！』と、部屋中が震える、けたたましい衝突音が響いた！ わたしの体はまたビクつとした。

大きな音には、はつきりと苛立ちの感情が込められていた。  
うへつ。これは……。魔女のしわざじゃないな。隣の部屋の人だ。こわばつた身体を、音のした壁のほうに向けたわたしは、隣に住んでいる人へ、心の底から謝つた。こんな時間に、一人で騒いだりして、すいません……。

「ふつ、ひー……」

落ち着け。ちょっと落ち着こい。

すーはーすーはー。

よし。落ち着いた心と瞳で、部屋を見渡す。散らかした衣服が、床を覆い尽くして足場もない。いけないいけない。行き過ぎだ、この散らかり具合は。片付けよう。

散乱した衣服をいそいそと集め始めたその時、わたしの視界にクローゼットの一番下の引き出しが入った。わたしは、ハツとして、気がついてしまった。まだ回収途中だった衣服をベッドに放り投げて、クローゼットの前まで歩み寄ると、膝まづいて、そつと引き出しを開いた。中には、折り畳まれた小さい布切れが並んでいる。わたしは布切れを一つ一つ手に取つて、熱心に確かめた。ベージュ、白、ベージュ、白、ベージュ。クッ……！。

わあああーっ！　だめだーっ！　全部、ボツだーー！　なんでこんな、無地の機能重視ばかり！　カラーもデザインも全然カワイくないし！　これは、困った！！　いやややや、違います！　違うんです！　全然、期待しているとか、そんなんじゃないんですよ！　これは、そんな、魔女みたいな淫乱な気持ちじやないんですよ！　決して！　絶対に！　初めてのデートなのに、わたしがそんな淫らなことを、コレっぽっちだって、考えるわけないじやないですか！　誓つて、神様に誓つて違います！　でもでもでも、やっぱり、身だしなみ！　そう、身だしなみですよ！　見えないとこにも、ちゃんとするのが相手に対する礼儀つていうものなんです！　大切な事じゃないですか！　それに、いえ、わたしは全然、頭の中にだつて浮かんでませんけど！　かつ考えてもいないことですけど、ひょっとすると、ひょっとすることだって、あるじゃないですか！　二人きりでいるうちに、なんかこう、雰囲気が、あれ？　これつてもしかすると、もしかしちゃうかも？　っていう、いい感じの流れに

乗ることだって、想定しておかなくちゃ、ダメじゃないですか！可能性に対する準備は、万全不可欠でなくちゃいけないじゃないですか！ だってだって、星野も、お、男子だしつ！ わたしにはそんなつもり、これっぽっちも、1オングストロームほどもなくたつて、ほつ、星野が、星野のほうがつ！ なにかの弾みで、弾みで、がぶり寄つて来ることだって、あるかもしれないじゃないですか！

そうですとも！ 十分考えられるハプニングじゃないですか！ご飯の時に、お酒とか飲んだりしたら、自制心が効かなくなっちゃつたりして、男子は怖いんですから！ いきなり、不意打ちに、星野がわたしを、抱き寄せでもしてきたら！ そそそ、そんなことをされたら！ さすがに、身持ちの堅さに定評のある望ちゃんだって、どうなるか分からんですからね！ キヤーッ！ 初デートでも、そういうことだって、充分にありえるじゃないですか！ こは、おお、お、押さえとかなきや絶対ダメな、大事なポイントでしょッ！

うひーっ、顔が、なんか熱い。

「買いに行こっつー！ 明日、あと、服も……」

ついでに、なんか、化粧品も買つておこうかな。なんだろう、なにを買つたらいいのか、あんまり頭に浮かんでこないけど……。

つていうか！ 違うっ！ 落ち着け！ 落ち着け、のぞみ！

もつと大切なことがあるじゃないか！ もつともつと重要なこと。大切なのは、そう、

誠意だ。

星野に、好かれてもうつ。これだ。これが最重要だ。もちろん、身だしなみとか、下着が、どうのこうのとか、それも、もちろん大切だけど。一番は、心構え。相手の気持を、察して、できるだけ合

わせて、彼を楽しませなくっちゃ。これだ。これが一番だ！　彼がどんなことが好きで、どんなことに興味があるのかを知つて、それに対して限りなく正解に近いレスポンスをするのが、ミッションだ。彼を安心させて、充足させることが、なにを置いても最優先だ。私と一緒にいることが、心地いいって彼に思わせるように。わたしがこれからもずっと、彼の側に居ても、いいんだよって許してもらえるようだ。一緒にいてもウザくないし、邪魔にもならないって思われるようだ。むしろ、ずっと側にいてくれって、星野に思われるくらいに！　それだよ！　そこじやないか、重要なのは！　デートの日に向かつて、自分の中の魔女を払拭する位の、綺麗な心を作らなくっちゃ！　一度きりのデートで終わりじゃないんだ、どんどん繋げていかなくっちゃ！　帰り際に、星野の口から、次の約束を引き出させるくらじー！　ガツツリと星野の心を捕まえなくちゃ、好感度あげなくちゃ、いけないよねっ！　やるよ、わたしやるよ！　がんばるよ！　絶対、星野の、本命になるよつ！　なつてみせるよッ！　お父さん、お父さん！　わたしを見守つて、応援していくねっ！

『あーあ……なんなのこの子？　気持ち悪くて吐きそう』

『うひつ、うひひつ』

『恋する女はなんとやらつて、昔から言ひつけじゃないの。けけつ。アンタたちは知らないのか。ブツサイクなシリ並べやがつて、黙り込んでじまつてまあ』

『セツクスの時だけ代わつて欲しいな』

『死ね。死んでしまえ』

『ああああああああああああー』

『ブン殴りたい。ブツ殺すんじやなくてブン殴りたい』

黒崎望はその夜、ほとんど徹夜をしていた。星野哲郎との初デートに想いを馳せるのもあった。自分の中の魔女がはつきりとした輪郭をじわじわと帶び、存在を強めてきたという自覚に不安を抱かざ

るを得ない心もあつた。しかしそんなことより、なによりも、彼女が夢中になつていたものというのは。ずっと以前に買って、ちょっと中を覗いて見たんだけれど、なんだか怖くなつて本棚の奥にしまつたまま、つい先ほどまで忘れていた一冊の雑誌。

ベッドに寝転がり、枕を顎の下に敷いた姿勢で、望が熱心に目を走らせるのは、ファッショング雑誌の数ページに記載されたセックス特集だつた。べつ別にこれを鵜呑みにして、いやその時が来たら実践するつもりなんてコレっぽつとも、脳細胞のシナプス一欠片分ほどだつて考えていらないんだからねつ！ という言い訳に握りしめた拳を、ベッド脇のかわいそうなクマのぬいぐるみの腹部目がけて、縫い目から綿がはみ出さんばかりの激烈さでもつてバスンバスンと殴りつけながら。しかし強烈な知識欲に焦がされ、炎さえ上がりそなほど熱を帯びた瞳で、『彼をその気にさせる誘い方』がうんぬんとか、『一緒にお風呂に入った時』のなんたらだとか、『ベッドでの彼への愛撫』がどうだとか、丁寧に図解の入つた記事のひとつひとつを、熱心に読みふけつていた。えつ、こつこんなことまでー！ とか、そつそんなテクニックがー！ とかを心の中で絶叫しながら、決して記事から目を離さなかつた。時たま「ひつひー」と、耳にしたもののが精神を確実に病ませる声色の悲鳴を小さく上げながら。その時の望の姿といったら、例え彼女が生まれてから今までを品行方正な振る舞いに徹し、天上を臨むほどにうず高く積んだ徳を持つていたとしても、それを一瞬で帳消しにされてしまふような、酷い痴態だつた。というか変態だつた。

望は、雑誌の情報を着実に脳内メモリーへと記録していく。あくまで知識としてだけ。そういうことも、もちろん知つていい、でも実践はきっと、たぶんしない、小悪魔的なわたし。と、少しでもこすれたらかすれて読めなくなつてしまいそうな、引っ搔いただけの鉛筆書きの注釈を添えて。

その間、彼女の背中に流れる長い髪の隙間から、時たま魔女たちの目がキヨロキヨロと飛び出してきていることに、望はこれっぽつ

ちも気がついていなかつた。しかし、今夜の魔女の赤い目は皆、いつまで続くか知れない望の独り乱痴気騒ぎにあてられて、疲労困憊の色に悶ぜられていた。

西田恭平は眼を閉じて、記憶を遡つた。

まばたきにも満たない僅かな時間で、全員が拘束されてしまった。底の見えない闇のように黒く、あやふやな輪郭の魔女の手は大きかつた。掌に大人一人を飲み込んで、まだ余裕がある。西田恭平と彼の仲間は、魔女の黒い手に捕らえられ、決して振りほどいて逃げる事の出来ない絶望的な握力の強さで、全身を締め上げられていた。黒い手は、1人の魔女の背中から伸びている。魔女から飛び出した十数本の腕のうち4本が、西田たちを捕らえている。余った残りの手は、ゆるゆると宙を徘徊している。あるものは、5本の指をゆっくりと開閉しながら握力を確かめているように見える。あるものは、優劣を付ける意図ではなく、ただの暇つぶしに何度もジャンケンをし合っている。あるものは、雲を掘もうとするかのように、高く高く腕を伸ばして上空に消え、戻つてきそうになり。あるものは、西田の目前の魔女にゆっくりと絡みついで、大きな指先が愛おしそうに魔女の頬を撫でている。腕のそれぞれが魔女とは独立した意思を持つた生き物のようである。魔女にしがみついた黒い手の指先が、じやれる犬のベロのように魔女の顔をくすぐついている。魔女は嬉しさに甲高い悲鳴を上げながら、両腕で抱えるようにして、黒い手を優しく撫でている。

魔女は笑顔のまま、西田の隣の男に視線をやつた。黒沢もまた、西田と同じように、魔女が夜の闇を寄り集めて造り出した黒い手に捕らえられている。西田が見た黒沢の最期は、ひどい顔をしていた。まぶたはこれ以上ないほどめぐれ上がっている。眼内は毛細血管が破裂して赤く染まり、瞳の黒とのコントラストを作っている。眉間にには幾筋もの深いしわが入り、真っ黒い鼻の穴からドロドロした血が垂れている。食いしばった頸が筋張っている。

「じりつじりつと固いものをすり潰す鈍い音が、黒沢の周囲に響き渡る。途端、黒沢を掴み込んでいた黒い拳が縮まり、指の間から赤黒い血液がぶわっと噴き出た。周囲に四散した血飛沫が、西田の頬にも降りかかる。黒沢の身体は黒い手の、万力のような握力で潰された。黒沢の頭が、彼を握り込んでいる親指と人差し指の間で、ぐらぐらと揺れている。黒沢の表情は、西田が見たときのまま凍り付いていた。

魔女が耳障りな、バイオリンの引っかき音の笑い声を上げる。

「あつせつ」

黒い手は黒沢の亡骸を地面へ叩き捨てた。濡れた雑巾を床へ叩きつけるような、耳障りな衝突音がそこら中を跳ねた。血溜まりに捨てられた黒沢は、もう、どうやっても助からないだろう。呆然と思い、西田は自分の感情が麻痺しているのを感じた。ピンク色の肉塊と象牙色の骨の山に埋もれた黒沢の顔が、西田に向いている。地面へ叩きつけられたときに欠損したらしい、黒沢の顔は、右半分しか形を残していなかつた。自分の数十秒後が、あれなのだろうと、西田の心は他人事のような冷淡さに包まれて、落ちくぼんだ。

佐々木が怒号とも取れる悲鳴を上げた。佐々木を捕まえている黒い手の上から、長い刃が突き刺さっている。対角線の長い側が3メートル、短い側が30センチほどの、菱形をした黒い刃が、佐々木を捕らえている黒い手ごと、佐々木の太腿あたりを貫いていた。どすんと、頭の中にこもる音を立てながら、2本目の菱形が佐々木の腹の当たりを貫いた。佐々木が再び絶叫する。西田が刃の飛んできた先に目を向けると、自分の影を地面から剥がしている魔女の光景があつた。夜の公園の外灯は、背中から魔女を照らしている。魔女は自分の足元に伸びる影を、まるで拾い物をする動作で、アスファルトからペリペリと剥がしている。すっかり剥ぎ取られた影は、黒い厚紙を魔女の輪郭に合せて切り出した形である。ただ、外灯の角

度のせいで、剥がされた影のほうが、本当の魔女よりずっと背が高かつた。

魔女は、剥がし終えた影を肩に担ぎ上げる。と、魔女の靴と地面の間から新しい影がぬるりと流れしてきた。影はたちまち、先ほどと寸分違わぬ魔女を型どつた。

魔女は両手にとつた影を、捨てるような乱雑さで放り投げた。影は空中を一直線に進みながら、たちまち菱形の刃へと変わつていった。変化を終えたとほぼ同時に、影は佐々木の眉間に突き刺さつた。佐々木は「あっ」と大きく声を上げ、がくりと首を垂れると、それから一言も発しなくなつた。同じように魔女も「あっ」と声を上げた。

魔女は自分の頬を右手で軽く叩くと、ニヤニヤした。

「手がすべつちつた。まあいいや。しさつー」

次は自分の番だらうか。

西田は魔女を見遣つた。くしゃつとした笑顔だけを見れば、年端のいかない可愛らしい少女であつた。だが、少女は魔女で、くしゃつとした笑顔の数秒を得るために、ためらいなく人を殺すのだ。西田には信じられなかつた。

西田は、佐々木を殺したことにより悦楽した笑みを浮かべる魔女と、ほとんど同年代の姫を信仰している。姫の名前は笠原明海という。明海はちょっとした冗談や気遣いだけで、本当に心の底から笑顔を見せ、純粋な心の持ち主だ。彼女の喜ぶ顔を見ると、西田の心も嬉しくなつた。

その明海の笑顔と、魔女の笑顔が、そつくりなのだ。顔つきが似ているということではない。雰囲気がまるきり同じなのだ。魔女は、相手を殺し、或いは殺した後の死体を弄びながら、笑う。本当に純粋に、心の底から。明海と、目の前の魔女は、根底にあるものが天と地ほど掛け離れているのに、同じ笑顔をほころばせる。西田は信

じたくなかつた。

「助けてください。助けてください」

小さく、震える声で、木下が魔女に懇願している。彼女も黒い手に捕まっている。と、声を聞き入れたのだろうか。黒い手の指がぱたぱたと開き、木下をそっと開放した。木下を捕まえていた黒い手は、木下の元からするすると離れていき、彼女の目前で、ひとりと動作を止める。木下は恐怖のあまり、拘束から解かれた事実に気が付いていないようだつた。目をぎゅっとつむつたまま、繰り返し、魔女に向けて助けを乞うている。胸の前で両手を組み、神様に祈るよひにしている。

「うひっ」

木下の小さな祈り声に、魔女の嬌声が重なつた。

声を合図にして、黒い手が姿を変えはじめる。5本の指が全てくつついて1つに。先細った紐状になる。変化を終えた途端、黒い紐は木下の僅かに開いた口元へと殺到した。口元に違和感を感じたのか、わつと目を見開いた木下が、ぐうつと喉を呻かせる。木下の体が大きく脈打つ。黒い紐がどんどんと木下の口内に入り込み、喉を通過して、腹の中に流れ込んでいる。着衣の上からも分かるほどに、木下の体が急激に膨らんでいった。毬のように丸々した胴体がさらには、ぶうと風船に膨らむと、次の瞬間破裂した。風船を針先で割つたような破裂音と共に、木下の血液と、着衣の布切れと、肉片などが入り交じりながら、周囲に飛び散つた。木下が祈るようにして組んでいた両手は、その形を残したまま、彼女自身の血溜まりの中に落ちた。

「ばつくわつー」

魔女は上機嫌だった。

西田が木下の肉片から視線を反らすと、その先には魔女の顔があつた。黒目と白目が逆転した、気狂いの目つき。耳たぶまで大きく裂けた唇は、例の笑みで覆いつくされている。魔女の顔を目についた途端に、西田の心の麻痺が解け、膨大な恐怖がこみ上がってきた。西田の奥歯は噛み合わず、ガチガチと音を立てた。絶望が心中を覆い尽くした。

殺される。死ぬ。

と、西田と魔女の間に、前触れなく、白い閃光がザツと走った。その途端、西田を捕らえていた黒い手の表面に、白く光る無数のひびが入つた。ひびはたちまち黒い手の全体に回っていく。徐々に幅と深さを増していくひびは、ついに黒い手をバラバラに碎いた。ガラス片が折り重なるような乾いた音を立てながら、黒い手は地面に崩れ落ちると、幻のようにふうっと消えた。

拘束から解かれた西田は、地面に手と膝を付いて倒れこみ、喘いだ。カラカラの喉を鳴らして空気を飲み込み、ぐつと首を上げる。西田の目の前には、1人の男の背中があった。彼は、全身が白い光に包まれていた。魔女の闇をずっと向こうへ遠ざけるほど、力強く輝いている。男は魔女の闇から西田を護る、盾の役割をしていた。

魔女には、もう一つの光が迫っていた。光は左腕に握りしめた剣を、隼のように素早く振りかぶると、魔女の頭に目がけて斬り下ろした。魔女は抵抗もせず、一声も上げず、光の斬撃をまともに受けた。魔女の右側頭部から入り、左頸部に抜けた閃光がパツと光る。一瞬、闇に包まれていた公園がすみすみまで照らし上げられた。光の断面から魔女の顔半分がずり落ち、ベシャリと音を立てて地面に落ちた。

「さつさと立ち上がり。逃げるんだ」

穏やかだが強い口調で、西田の目の前の男が命令した。今の一撃で魔女を討てたわけではないということを、西田は悟った。男の声に恐怖を解かれ、西田は立ち上がることができた。

西田の予感どおり、魔女は顔を半分失いながらも、両手を腰に当てたまま直立している。地面に落ちた魔女の頭が、上下左右にぐりぐりと、不規則に目玉を動かしていた。魔女は自分を襲撃した光の正体を確かめると、喉の奥がのぞく切断面から、不気味な笑い声を放つた。

「白騎士のおでましが！ 魔女に不意打ちなんて、男前もいいところじゃないの、あんたたち！ だけど、だけど、たつた2人きりなの？ ほかにはいないの？ あとはだれも来ないの？ なんのつもり？ なんのつもりなのよ？ こおんな程度の低さで、あたしを殺すつもりなの？ そうなの？ そうなんだあ！ うひつ、ひ！ ばーか！ うひつひひひ。やれるもんなら、やってみやがれえええ！」

「早く逃げる！」

魔女の顔半分を切り落としたもう一人が、西田に向かつて叫んだ。西田は白騎士と魔女に背を向けて、一目散に走り出した。背後から金属同士がぶつかり合い、ひしゃげるような音が耳に飛び込んできた。

全力で走りながら、西田は後ろを振り返った。

西田の目に飛び込んだのは、頭部の断面から子供の胴体ほどの太さの、鞭のようにくねる闇黒を際限なく伸ばし始めた魔女の光景だった。巨大な黒い鞭は、嵐のよつた荒々しさで空気の切り裂き音を響かせている。

黒い鞭がひゅっと光を耀いだ。一片の慈悲も含まないしなりは、先程西田を黒い手の拘束から解き放った白騎士の首を、白騎士が手

にしていた剣の刀身」と横一文字に斬り落つた。折れた剣先は、くるくると回転しながら、地面に突き刺さった。光に包まれた白騎士の首は勢いよく宙へ跳ね上げられ、真っ黒な公園を背景に、まばゆさを失つてゆく。白騎士の頭部はすっかり光を失うと、地面へ墜落した。

西田は前を向いた。喘ぎながら必死で走つた。一度と振り返らなかつた。

「西田さん、気分が悪いんですか？」

茶器を乗せた木製のトレーを運んできた四谷紀乃が心配げに声を掛けた。声にハツとした西田恭平は、椅子に腰掛けた居住まいを正す。丸縁のサングラスを指でくいっと眉間に押し込み、いいえ、と四谷に向けて微笑んだ。四谷は西田のほころんだ表情に安心して、えへ、と笑い返した。四谷はテーブルに茶器を並べる。赤色のぼてつとしたつばきが描かれた湯飲みに、急須の注ぎ口からとぼとぼと煎茶が注がれる。湯飲みを茶卓に乗せると、四谷はそれを西田に差し出した。湯飲みを手にとつて一口すると、ふくよかな甘みが西田の喉を通り過ぎ、香りがしつとりと広がつた。あとには輪郭の丸い、ほのかな苦味が残る。

「お上手ですね。とてもおいしい」

西田の言葉に、四谷は照れ笑いを浮かべてもじもじとした。

「いえいえ。ほんの粗茶で、どうぞます」

「とにかく、なぜメイド服を着ているのですか？」

「あ。はい……」

西田の問いかけに、四谷は笑顔を無くしてみるとしほんでいた。

四谷は足元まで廳れる長いスカート丈の、黒いメイド服を着ている。その上にフリル付きの白いHプロンを着け、頭にはメイドカチューシャまで乗せてくる。屋内だとこうのに黒い靴を履き、歩くたびにフローリングをコシコシと鳴らす。床に傷が付いても構わないのだろうか、と西田は変な心配をした。

四谷はカチューシャを外すと、短い髪をくしゃくしゃと搔いた。

「これは、清美さんの趣味といつか、なんといつか、その。命令で！ 仕方なく。もう一週間くらい経つんですけど、なんか、なかなか飽きてくれませんので」

「靴まで」

「はい……。蒸れるので、素足になりたいです」

「似合ひますよ」

お茶を淹められたときと違い、西田の言葉に四谷は表情を曇らせた。四谷は苦笑をして、ひとつじりむる重量で呞いた。

「こつもの、アティダスのジャージのまつが気楽でいいです

そういえば以前に見た四谷は、学生の体操着のよつな白いTシャツと、側面にラインの入ったジャージパンツの姿だった。西田は田の前の四谷と記憶の中の四谷とを並べながら、湯飲みをすすつた。

意氣消沈した様子の四谷がなんだか可哀想に思えてきたので、メイド服についてこれ以上聞くのは止めにした。

「すいません。清美さんは、まだ、ちょっと、その、お仕事つてい  
うか、やることがあるみたいで」

四谷は言いながら、廊下へ繋がる扉にチラリと目をやつた。西田  
は北野清美の自宅を訪問している。

北野清美はこの街のデータベース屋さんだ。しかし、他のデータ  
ベース屋さんとは一線を画した能力を持つ。北野はそれを活かして、  
データベース屋さんでありながら、どの情報収集屋さんとのコネク  
ションも持たない。北野は他者に頼る必要のない、独自の情報収集  
能力を有している。北野は自分の能力に【空読み】と名前を付けて  
いる。単語自体の持つ暗記の能力ではない。北野は空を眺めて、こ  
の街で起こった事柄の観測を行うのだ。西田は以前、北野から説明  
された。空は、この世界で起こり得た事柄全ての観察者であり、目  
撃したことを余さず記憶している。空の記録庫には古今東西の膨  
大な情報が保管され管理されている。空の記録庫に接触し、自分の  
欲しい情報を参照できる能力が【空読み】なのだ。北野が【空読み】  
を用いて過去の事象を参照したとき、それは常に的中している。な  
にしろ空の記録庫には、本当にあつた出来事しか記録されていない  
のだ。

過去の事柄を空から引き出すものとは別に、北野清美の【空読み】  
にはもう一つの力がある。西田が今回北野を訪問した目的は、そち  
らの能力の提供を依頼するためである。それは、北野清美の予言能  
力だ。ただし北野の予言は、ほんの些細な出来事までしか分からな  
いし、的中率も7割に満たない。【空読み】を用い、既に過ぎた事  
柄を参照することよりも、未来に起こりうる事柄を予測するほうが、  
ずっと困難で、骨が折れる作業なのだと、北野は言っていた。ちな  
みに、今まで北野が予言を的中させた例で、西田が知るものとして

は以下が挙げられる。

北野の従者である四谷が翌日に、晩ご飯に何をどれだけ食べるのかを的中させた。

北野の従者である四谷が翌日に、いつどこへどのような経路で買い物に行き、何をどれだけ購入して、いくら支払うのかを的中させた。

北野の従者である四谷が翌日に、当時付き合っていた彼氏から『占いで合わない』という結果が出たから』という理不尽な理由で別れ話を切り出されるバッドなイベントに遭遇することを的中させた。

北野の従者である四谷が翌日に、当時付き合っていた彼氏から『化粧をした母親の顔に似ているから』という理不尽な理由で別れ話を切り出されるバッドなイベントに遭遇することを的中させた。

北野の従者である四谷が翌日に、自転車で移動中、路地から突然飛び出してきた野良猫を避けきれずにアスファルトへ転倒し、自転車から投げ出されてゴロゴロと地面を無様に転げまわり、たまたま横を猛スピードで通りすぎようとしていた軽トラックにタイミング良くはねられて宙を舞い、アニメ的な放物線を空中に描いた終点で民家の壁に顔面から激突し、噴水のように鼻血を撒き散らしながら路肩のドブに落ち、四谷が気にしているちょっととした安産型の腰が溝にすっぽり挟まり、通りがかつた大人5人の助けを借りても抜けなくなってしまったのでレスキュー隊が出動し、騒ぎを聞きつけた近所の住人が見守る生あたたかい雰囲気の中、3時間掛けて破壊された側溝のコンクリート片とヘドロの中から救出され、野次馬連中からお情けほどの拍手を浴びせられながら救急車に乗せられて、搬送先の病院で偶然入院している友人の見舞いに来ていた当時付き合っていた彼氏と鉢合せて痴態を日撃され、事情を把握した彼氏に指をさされて大爆笑されたことに力ヶとなり、周囲の医療関係者や救急スタッフの静止を振り払つて彼氏に右ストレートをぶち込んで全治2週間の頸椎捻挫を負わせ、怒り狂つた彼氏にその場で別れを切り出され、ショックのあまり気が動転し、病院で治療を受けること

も拒んでワンワンと泣きながらその場を逃げ出し、病院近くの路上に停車していたバイクを盗んで走りだし、北野家に帰つてくることを的中させた。

北野の予言は、その程度の些細な能力である。もちろん四谷以外の事柄を予言し、的中させた事実もあると、北野は言ひ。しかし、西田はそれを知らない。自分から予言的中のヒンサーードを語るにあたり、なぜだか分からぬが、北野は四谷に由来するものしか語らないのだ。北野が大げさな身振り手振りを踏まえて四谷に対する予言的中例を語るとき、北野は本当に楽しそうに次々と言葉を並べていぐ。そしてその時、北野の傍らには必ず四谷があり、北野の口から四谷の恥ずかしい話が飛び出すたびに、四谷は両手で顔を覆い隠して湿つぽいうめき声を立てる。北野はそんな四谷を笑い飛ばしながら、四谷の後頭部に思い切り平手打ちを叩きつける人物である。

「北野さんは相変わらずお忙しいのですね」

四谷は自分の発言を受けた西田の返答に、なぜかきまつの悪い顔をした。手にしたトレーの縁をしきりに爪で引っ搔きながら、『(こ)よ(こ)によとつぶやく。

「ええと、その、寒は、すみません!」

「えつ?」

突然、深々と頭を下げて謝罪を見せた四谷に、西田はぽかんとした。顔を上げた四谷は定まらない視線で、また『(こ)によ(こ)』とする。

「実はその、清美さんは、今……ネットオークションに夢中なんですよ!」

「ネット・オークション?」

「はい。インターネットでお買い物をしているんですね」

「落札じゃないんですか?」

「あ、そうです。そっちのほうです! なんでも、ずっと前から欲しかったブランドのバッグが、何がが、今、ちょうど落札終了時間なんです」

「はあ」

西田は特に驚かなかつた。ネット・オークションならば今時分、特に珍しいものでもない。つい最近も、笠原雪子がスマートフォンをいじりながら「かわいいワンピースを競り落としたよ!」と歓喜して、西田の田の前でウサギのようにピヨコピヨコ跳ねていた。

それに、北野の性格のことである。それを知る西田にとって、北野が自分との約束をほっぽり出し、ネット・オークションに注力するシチュエーションなど、想定範囲内である。

四谷は、すみません、すみません。と、何度も頭を下げて謝罪をする。逆に西田が恐縮をしてしまうくらいに、切羽詰つた雰囲気を全身から吹き出していた。西田は居たたまれなくなつて、ほとんど空にしていた湯飲みに口を付けた。それに気が付いた四谷は、急須に手を掛けた。

「すいません! 新しいお茶をいれてきますね

「いえ、大丈夫ですよ。お構いなく。ああ、こいつこそ気が付かないで。四谷さんも立つたまでは、疲れるでしょう。そんな固そつな靴では。どうぞお座りください」

「いえいえいえ！　お持てなしは、わたしの仕事ですから！」

「いえいえ。持てなしを受けるほどの身分でもありません。どうぞ、お楽しみしてください」

「いえいえいえいえ！　そんな、お氣を使わず！　西田さんこそ、お茶をもう一杯、どうぞどうぞ」

いえいえ。どうぞどうぞ。とダチョウ俱乐部のやりとりを意図的に繰り返す一人の鼓膜に、突然女の怒り狂う声が飛び込んできた。二人ともビックリして、俱乐部は解散になつた。怒号は続き、そこへ更に、なにかをメチャクチャに叩き潰すような騒音が続いた。どすんばたんと、西田の湯飲みが茶卓の上でカタカタと揺れるほどの振動を伴つた不協和音は、数十秒間に渡つて鳴り響いていたが、急にぴたりと止んだ。音の聞こえる扉のほうを見やつていた西田と四谷は、顔を見合せた。

「北野さんに何かあつたのでしょうか。想像は付きますが

「そうですね。きっと、オーフショング……」

じすじすじすと、扉の向こうから苛立つた足音が、西田たちの居るリビングに近づいてくる。足音は扉の前で止まる。ぎいい、と蝶番の軋む音と共に扉がゆっくりと開き、そこから現れたのは、北野清美だつた。北野の顔は全身の血液を集約したように紅潮している。腰のあたりまで伸びたワンレンジスの茶髪がしだれ柳に、顔のほぼ半分を覆い隠している。髪の下には、金剛力士は阿形像を掘り込んだ、怒りに満ちた表情が覗いている。荒い呼吸で胸が激しく上下して、全身がわなないている。北野の様子を見つめる西田と四谷は、

黙っている。北野は一人に視線をやることもなく、肩をいからせながら大股に歩くと、広い中庭を一望できるガラス戸の前まで進んだ。ガラス戸と向かい合い、腰に手を当てて立つ立ちはなる。

「ちくしょうがッ！」

いきなり叫んで腰をひねり、右手をぐつと腰だめにすると、北野は正拳突きを放った。北野の拳は一撃でガラス戸を突き破る。ひい、と四谷が小さく悲鳴を上げて、体をびくつかせた。ガラスの破片が庭先と室内に、音を立てながら飛び散る。パラパラパラと、細かなガラスが断末魔を終えると喧騒は止み、打つて変わって部屋中が静寂に包まれた。北野は突き出した右手をゆっくりと戻して、腰に当てる。ふうーっと肺の空気を全て吐き出すような長い息をつく。冬でもないのに、北野の呼気は僅かに白みがかっていた。

中庭に向かつていた北野がくるりと振り返ると、今までの一連の出来事が嘘であつたかのような表情である。紅潮もなくなり、真顔に戻っていた。北野が四谷に視線を向けると、四谷の体は電気が走つたような震えを起こした。北野は自分が割ったガラス戸に指を差す。

「キノさん。ガラスの修繕を依頼しておいて」

「は、はい。分かりました」

「それから、わたしの部屋のパソコンを新調しておいて。あと紅茶」

「はい。ただいま」

四谷はテケテケテケ……と、足首から下だけを動かす不思議な足運びで、逃げるよつた速度でリビングから出て行つた。

北野は溜息をしながら手ぐしで髪を上げ、リビング中央のテーブルへ歩み寄つて椅子を引き、西田の向かいにどかりと座り込んだ。そして背もたれにだらりと体をまかせる。天井を見上げるような顔の角度から、北野は西田に視線を向けた。およそ来客に接する態度ではない、見下しにしか取れない姿勢である。北野の服装はラフで、黒いタンクトップに灰色のショートパンツと、まじうことのない部屋着だ。タンクトップの胸元には、毛筆で書かれた『きたのきよみ』という白抜きの大きな文字が入っている。西田はなんと言つてよいのか、ちょっと分からなくなってしまった。西田は北野と目を合わせた。

「お久しぶりです」

「そうねえ。いつ振りかしさ。ワーチャンの一件以来？」

西田は頷いた。ワーチャンというのは鰐淵武人のことだ。

北野は背もたれから身を離すと、今度はテーブルに両手を投げ出し、上半身を乗り上げる姿勢に変わる。タンクトップの襟首をぐいと指で引き開け、豊満といつていい胸の谷間に挟んだセブンスターとジッポを取り出す。一本咥えると火を点け、ソフトケースとジッポをテーブルに放り投げた。勢い余ったジッポがクルクルと回転しながら西田のところまで滑つてくる。西田はジッポを掴み、そのままセブンスターもまとめて掴むと、北野の脇に整えた。ぶしゅうーと、北野の口から白い煙が勢い良く吐き出される。割れたガラス戸から吹き込んでくる風が、タバコの煙を無秩序に散らした。

北野は指を弾いてタバコの灰を落とす。しかしテーブルには灰皿がない。灰はテーブルの上に落ちて、煙と同じように風にさらわれていく。

西田は、北野の態度と先ほどの癪には言及しないことにした。

「お元気やつですね」

「やつでもな」のよ。つこわつか、ムカついたことがあって」

「そうですか。それは災難でしたね」

西田は心の内で、うつと唸った。

北野はテーブルに左頬を付けて倒れこみ、一定のリズムでタバコをふかしながら遠い目をした。職場の残業から開放され、一人暮らしのアパートへ帰宅した30前の独身のしが、ベッドにバッグを投げ出し、部屋着のジャージに着替え、とりあえず点钟たテレビを眺めて、化粧落としのコットンで顔面をぐりぐりとこすりつつ、コンビニ弁当をつまみに缶ビールをすするような、疲れ切った雰囲気だった。

しかしすぐさま表情を一変させると、北野は西田にも音が届くほど強烈な歯ぎしりを始めた。苛立ちが、ぶり返してきたりしい。歯ぎしりと併せて、ブツブツと呪詛のよつな咳きも発しあじめた。北野の陰気な一人多重奏のハーモニーが、西田の鼓膜を疊らせる。西田はサングラスを少しづらしてこめかみを揉んだ。

「ケータイに切り換えるべきだつたんだわ。なんですが思い付かなかつたのかしら。パソコンを再起動させてる場合じゃなかつたのよ。クソッ。それにしても最近の液晶は本当にヤフね。パンチが軽々突き抜けちゃつたわ。ブラウン管だつたら3発は入れられたのに。

あ！ そうだ！ ねえキヨーさん！ アケミちゃんは元気？」

いきなり上体を起こした北野は、西田に詰め寄つた。口ボツトみたいな予備動作のない動きに、西田は北野の行動に予測を立てられない。西田が目にした北野の瞳は、なにかの期待にキラキラとしたときめきを放つてゐる。西田は心のなかで、まるで百面相だな、と

感想した。

北野の言つアケミちゃんとは、笠原明海のことだ。北野は西田の姫である明海と交流がある。交流がどれほどの深度のもののかは、西田は把握していない。いつだつたか、まだ鰐淵武人が活動していたとき、鰐淵の所持していたクラブで、北野と明海が一緒にいる光景を見たことがあった。その時に西田は、明海が対人において、いつものぱっと花が咲いたような爽やかな笑顔ではなく、どんよりとした暗澹な苦笑いを浮かべていたのを、初めて目にした。俯きがちの明海の心情をこれっぽっちもおもんばかりことなく、キヤツキヤと大音量の嬌声ではしゃぎなら、明海にベタベタくつっていたのが北野だった。北野は明海の頭を撫でたり、抱きついたり、キスしたりしていた。明海は観念した様子でそれを受け入れていた。同性愛者なのだろうかと西田が勘ぐるほど、北野の行動は明海に執着していた。だが、西田の勘ぐりは的外れだつた。北野は子犬や子猫を愛でるような気持ちで、悪意もなく明海にじやっていたのだ。西田は未だかつて、姫である明海をオモチヤ扱いする人間を見たことがなかつた。それに、北野に弄ばれて困惑する明海の表情が、とても珍しかつた。西田は、明海から北野を引き剥がし、明海を北野の毒牙から護る行動を取らなかつた。普段見慣れない明海の表情を觀察し続けることに、より強いリアリティを感じた西田は、遠巻きに2人を見守つていた。

「元気ですよ。何も変わりません」

「アケミちゃんに言つておいて！ 貰い物で使わないからつて、わたくしにくれるつて約束したバッグを、いつ取りに行つたらいいのかを、ね！ そうね、バーキンの件つて言えば判つてくれるわ。バーキンの件。忘れないで、絶対聞いておいてよね？ バーキンの件、分かつた？ バーキン。バーキンの件だからね」

「分かりました。バーキンの件ですね。明日会う約束になつてるので、確認しておきます」

西田は携帯のスケジュール帳を起動させ、律儀にも北野の言葉を登録した。

「あつ、清美さん！ 灰皿、使ってくださいー。もう！ いつも言つてるじゃないですか」

戻ってきた四谷が灰まみれのテーブルを見つけて顔をしかめた。テーブルに置いたトレーから灰皿を取り上げて、北野のすぐ横に置く。四谷はエプロンのポケットから布フキンを取り出して、テーブルに散った灰を丁寧に拭き取つた。北野は、四谷が運んできたティーポットと北野専用のプラスチックマグカップを見つめた。北野が途端に怪訝な顔付きに変わる。

「キノさん。ブランデーは？」

「えつ。まだ、昼間じゃないですか！」

「ブランデー」

もうー、と四谷はエプロンを平手で叩いて悪態をついた。四谷はリビングの壁面キャビネットの前までテケテケと歩み寄る。数十本の洋酒が並ぶ棚から、半分ほど残量のあるガラス瓶を手に取つた。四谷は北野の横に戻つてくると、瓶をテーブルの上にドスンと置いた。北野はニヤリとして、瓶を掴みとるなり蓋を外しにかかる。

西田はブランデーを手にした北野の右手の甲に、赤い筋が走つていることに気が付いた。赤い筋は光に照らされて、テラテラと濡れた輝きを放つている。きっとガラスを殴つた時か、それとも液晶ディ

イスプレイを突き破つた時に、怪我をしたのだ。西田は指をして、北野に教えた。

「北野さん。右手の甲が切れてますよ」

「ああ。こんなのは、舐めりや治るわ」

「ああーっ！ なつ！ 半分以上ブランデーじゃないですか！」

四谷がマグカップに紅茶を注ぐ脇から、北野がドボドボとブランデーを投入した。カップから液体が溢れそうになる。四谷が慌ててティーポットを離したが、北野は意に介さずブランデーを注ぎ続ける。カップの縁に表面張力が盛り上がった。

北野はヘラヘラしながら瓶を置き、そのまま右手を口元に持つていぐ。西田から指摘のあつた甲の傷を赤い舌先でチロリと舐めた。

「ん？」

北野は表情を曇らせる。首を四谷のほうに傾げると、四谷の靴のすぐ近くにペツと唾を吐き出した。ぎやあ！ と叫んで、四谷が後ろに飛び退く。着地の瞬間にスカートの裾を踏んでしまったようで、四谷はドテンと後ろに倒れ込んだ。尻、背中、後頭部と、規則正しく床に打ち付ける、見本のように美しい転びかただつた。四谷はその時ティーポットを抱えていたのだが、無意識のなせるものか、生来からの運動神経の良さからか、上手く両手で操っていた。ポットを床に落として割つてしまつたり、ポットから熱い紅茶が飛び出して四谷に降り注いだりすることはなかつた。西田は感心した。北野は大きな笑い声を立てた。四谷は真つ赤な顔で、スカートに気を取りながら立ち上がる。北野の笑い声に、四谷は憤然として叫んだ。

「さき、清美つ！ なんていう、お行儀の悪いことを！ めーなの  
つ！ めつ！」

「さやあつ！ ごめんなさいつ！ うひひつ！」

四谷が右手を振り上げて、北野を殴るポーズを取る。北野は両脚を椅子の上に縮こませ、両手を頭のうえにかざして守るポーズを取つた。

やりとりに気を取られたが、北野の甲の傷が、既になくなつてゐる事實を西田は見逃さなかつた。驚きに、西田は心の中で唸つた。傷口を舐めるだけで治癒ができるのか。いや、気が付かないほどの短時間に他の力を使って治したのか。それにしたつて、いくらかすり傷とはいえ、完治に至る早さが尋常ではない。強い能力だ。西田は北野が治癒能力を持つていることは知らなかつた。北野自身から教えられたこともないし、西田の周囲で知つている人間もない。そして、今まで西田には語ることのなかつた能力を、気兼ねなく西田の目の前で披露してみせた。西田は、北野の治癒能力が彼女にとつて取るに足らない些細なものだと理解した。北野は他にも、まだ色々な能力を隠しているのだろうと、西田は考えた。

北野は四谷に向かつて、赤い舌先をペロッと突き出した。

「だつて傷口にガラスが残つていたんだもん。口の中に入ったからビックリしてつい

「すみません。人様の前でこんな、お恥ずかしい

床の唾を拭きとつた四谷は立ち上がり、西田に向かつて頭を下げた。北野はなみなみとなつたカップを手で引き寄せようとすらせずにーブルに乗り上げる。長い髪を背中に回しながら、カップに直接唇を付けて中身をすすつた。四谷は北野を睨みつけたが、疲れたの

が、もう何も言わなかつた。四谷は溜息を付いた。

「いえ。お一人があんまり楽しそうでしたから、つい見とれていました」

「紳士な回答ねえ。さすがナイト」

ようやく「ほれな」ほど中身の減つたカシップを手にして、北野が二口呑みした。四谷は空になつた西田の湯飲みにおかわりを注いでいる。

北野は四谷を促して、白ヒップの造花で「ムード」されたシューを受け取つた。長い髪を後ろで束ねる。居住まいを正して、きちんと西田に向き直つた。

「さあて、犬のよつなおしゃべりは」のくらじにしておくか。それで、今日はどんな用向きですか、西田さん」

西田も再び姿勢を整え、北野に向き直る。

「黒崎望が黒い魔女になつたのは」存知でしょう。彼女の今後一週間の、予言を頂きたい。レートは通常の3割増です」

「……」

北野は価格交渉することもなく、あっさりと話を終わらせた。

【空読み】を用いた未来の観測の売買では、北野は金額を提示しない。購入希望者の現状と、予言する対象とを勘定しつつも、北野は決して販売金額を口にしない。必ず予言の購入希望者から金額を明示させる。購入希望者の言い値が北野の意にそぐわなければ、販売額は上昇し続ける。北野の予言を強く欲する者ほど、北野の予言

を手に入れるための値段は釣り上がっていく。前述のとおり、北野の【空読み】の予言は必ずしも的中するわけではない。しかし、北野の予言を得ようとする者たちは、北野が首を縦に振る提示額を支払い、予言を手に入れる。

西田が北野から予言を買取る場合は少し違う。北野と笠原家関係者との取引は、両者間に締結された契約の下になされる。北野が笠原家関係者に予言を提供するとき、特別な事象の予言でない限り、一定のレートで売買することが決められている。ただし今回の黒崎望を対象とした魔女に対する予言は、特別な事象の予言に相当する。予言は間接的とはいえ、魔女と関係を持つことになる。間接であつても、魔女と関わりを持つことは危険である。魔女は対峙したことのない、自分と面識の無い相手に対しても、高い殺傷能力を持ち合わせる。力の強い魔女ならば、名前を知つただけの相手にも、呪いを掛けることができる。魔女に関係したり、干渉したりする行動は慎むべきであるというのが、魔女を知る者たちの前提である。

また、北野の【空読み】は、北野が唯一誇ることのない、精度の甘い能力である。一般事象の的中率ですら7割に満たない未完成の能力である。予言の対象が魔女であれば、的中率はさらに下がる。心変わりしやすい魔女に対しては、四谷に関するもののように軽々しくはできない。それは北野も承知している。

しかし西田には、北野が黒崎望の予言の依頼を引き受けるだろうという算段があつた。一つはレート金額の上乗せ。魔女の予言に自信のない北野であつても、通常レートに特別報酬を上乗せすれば別である。北野はお金が大好きだ。魔女の予言の的中率の低さを知りながら、増額してまで予言を欲する態度をして見せることにこそ意味があるのだ。西田がどうしても欲するので、北野は仕方なく予言を提供した、という図式が出来上がる。北野の予言が外れたとしても、北野が恥を搔く道理はなくなる。

もう一つ。北野は過去に一度、魔女の予言を行っている。人づてに聞いただけであるが、10年前に依頼された魔女の予言を、北野

が一つ返事で引き受けたことを、西田は知っていた。西田はいつも考  
えている。北野は、魔女に対する恐怖心が薄弱である。やもすれば、  
北野はまじょに対しても恐怖心を抱いていないのではないか、と。

北野の承諾を得たことに安堵しつつ、西田は表情を変えずに湯飲  
みをすすった。北野は西田を見つめる。

「それにしても、ずいぶん自信があるじゃない？ 成り立てとはい  
え魔女をやるだなんて、そのつもりなんでしょう」

「自信だなんて、そんなことはありますよ」

西田は湯飲みを置くと、人差し指でサングラスをぐつと引き上げ  
た。

「内々の問題として。ある人から魔女討伐の声が上がっているので  
す」

「はあん。お守りね。分かるわあ、大変よねえ。聞き分けのないの  
がこことわ」

北野が視線を西田から四谷に移した。四谷はギョッとして目を剥  
き、左右の腕をブンブン振り回して抗議の声を上げた。キキキ、と  
北野が歯を剥き出しながら笑い声を上げる。

「んじやあ、明日にでもメールで送つとくわ

「助かります。承諾いただいて、ありがとうございます」

西田が椅子から立ち上がり、深く頭を下げた。四谷がそれに合

わせて、いえいえ、とお辞儀をし返す。

北野は椅子に座つたまま、『ぐぐ』くと喉を鳴らしてカップの中身を飲み干した。

黒い魔女ねえ。あんなのとやり合いたいだなんて、何を考えているのかしら。ユキコちゃんのブツ飛んだ性格は知つてたけど。西田も西田だわね。あれの恐ろしさを一番良く分かつてゐるくせにね。ちゃんと勝算あるのかなあ。うつん、確かにユキコちゃんは、強いか。まあ、沢原圭ほどじゃないにしても。黒崎は沢原を倒したけど、そのおかげで黒崎の武力の殆どは消滅しちやつたし。まあ、例え今も使えたとして、元々ほとんどが魔女狩りのためだけに集めた能力だから、魔女以外にはゴミほどの性能も発揮できないか。今の黒崎が相手なら、ユキコちゃんの勝ちは確実かなあ。黒崎はどうするんだる。殺されるくらいなら、トラウマの魔女の力を使つちゃうのかな？

沢原圭。沢原圭かあ。懐かしいな。あのババア、結局半世紀も生きたのか。黒い魔女にしては長かつたわね。若い頃、あいつにちょっかい出したのは、人生最大の汚点だな。あの頃のわたしつたら、白馬に乗つた王子様の存在を信じていたり、恋人と一人で裸足になつて夕焼けの海岸線を散歩するデートを夢見たりしてたつ。ズボンが擦れる音で、男のチンポのサイズを把握できる聴覚術を駆使することすらためらつような、母親の羊水のにおいも抜けきらない処女だったからなあ。笑つちゃうわね。いきがつたウンコちゃん風情で、黒い魔女に挑んだんだから、あの失態は仕方がない。社会勉強だつたつてことね。

沢原圭の力は、今思い出してもブルッと来るわね。わたしの繰り出した全ての【祈り】や【加護】や【防護】や【障壁】を、障子にペニスをズブリと突つ込む気軽さでブチ抜いてきやがつた。プライ

ドをあんなに傷つけられたのも、相手に恐怖を感じたのも、あの時が初めてだった。全ての能力を駆逐されて、悔しくて怖くて、泣きじやくりながら必死で逃げたつて。小便もらしながら全力で逃げるかよわい処女のわたしを、沢原は笑いながらゆつたり追いかけてきた。「同じ魔女なんだから、仲良くしようや」なんて抜かしやがって。同じじやねえよ、全然。クソッ。今のわたしなら、なんとでもしてやれるんだけどなあ。ああ、こんな量のアルコールで酔っぱらってきたのかしら。未練だなんて。いやだわ。

北野清美はガラス戸の向こうの夕暮れを見上げながら回想していた。結局、北野が割ったガラスの修繕は当田に間に合わなかつた。割れた戸には、四谷紀乃が新聞紙とガムテープで目張りをした。北野は右手にマグカップを持つていて。先ほどとは違い、純粹にブランデーだけが入つた3杯目だ。北野は左手の人差し指をしゃぶり、唾液で充分に濡らすと、目張りの新聞紙にプスプスと穴を開け始めた。小さな穴からひゅうづ、と風の音が漏れる。

魔女には種類がある。簡単に言つと『シンデレラの魔女』と『白雪姫の魔女』だ。黒崎望は後者にあたる。人々に疎まれ、憎まれ、張り付けにされて、殺される道理だ。北野清美は前者だが、清美には人の役に立とうだなんて高尚な決意は微塵もない。ただ自分の気持ちのまま、欲のままに生きている。清美にとつて魔女の称号は、自分の暮らしを充実させるための、便利な道具に過ぎない。

清美は『東方不敗の魔女』である。『東方不敗の魔女』の継続条件は名の通り『負けない』ことだ。相手の目の前から『逃げる』ことは、『負けたこと』には当てはまらない。例えその場の戦闘から逃亡しても、後からリベンジして相手を殺せば構わない。また相手の死は、清美の手に因らなくても構わない。事故や病気や寿命で死んでしまえば良いし、或いは沢原圭の例のように、清美自身ではない誰かが相手を殺してくれれば、なお良い。なにしろ相手がこの世

からいなくなれば、清美の勝ちになる。清美が死ななければ『東方不敗の魔女』は継続される。『東方不敗の魔女』にとつての『負けない』というのは『死なない』と同義である。

ただし、相手の目前から『逃げる』ことで『東方不敗の魔女』の能力には大きな制限が掛かる。幾つかの能力が使用できなくなり、使用できるものの効果も半減する。相手が生きている限り、その制限は継続する。清美は沢原が生きていた今までを、限られた能力に色々と工夫しながら、やりくりして過ごしてきた。節制は清美の最も得意とする分野だ。能力の工面に、北野は胃に穴が開くほど苦惱してきた。沢原圭が死んだことで、能力の施行に心を碎く必要がなくなった。無尽蔵の魔女の力を取り戻せたのだ。本来の力を取り戻したことで清美は、もつともつと遊びの幅を広げられる。悩みの種を一つ解消することができた。清美は『東方不敗の魔女』を取り戻してくれた黒崎望に、ほんのちょっとだけ感謝している。

『東方不敗の魔女』は世襲制をとる。先代の魔女である清美の母親が、清美を出産したと同時に、清美に魔女が継承された。清美は北野家の24代目にあたる。北野家の女は代々から魔女であることを探り、隠してきた。初代から清美の母親まで、北野家の女は自分の内の魔女を1日でも早く排斥したくて仕方がなかつた。『シンデレラの魔女』どうしても、そんな事柄は何の訳にも立ちやしない。魔女は魔女だ。何よりの恥じだ。それゆえに北野家の代々の女は早婚だった。或いは結婚もせずに子どもだけを孕み、自分の娘へ魔女を押し付け、魔女を捨てた。清美の母親も十代の始めに出産し、生まれた清美を友人に託してさつさと田舎へ籠つてしまつた。清美は父親を知らない。母親の愛情も知らない。けれどそれらが清美の心に闇黒を生む原因になることはなかつた。清美は今までの北野家の女とは違う思想を持っていた。清美にとつて『東方不敗の魔女』は、自分を形作る要素の一つでしかない。別段、魔女を嫌う必要もないし、生活の邪魔になる道理もまるで感じない。魔女である前に、自

分は自分だ。『北野清美』さまだ。スヌーピーも配られたカードで勝負するしかないと聞いてるしね。でも、わたしに配られたカードはどれも強烈なのよ。笠原姉妹に劣るにしたって容姿はいいし、能力だって、金だってあるし。その中でも魔女は特別。ジョーカーなんて目も当てられないほど。だけど、切り札ってのは隠しておるものだから、自分が魔女だってことは秘密にしておくの。

先代たちとは異なる理由で、清美は自分が魔女であることを隠している。知っているのは四谷紀乃だけだ。

「西田さんってカッコいいですよね」

北野清美の後ろでは、四谷紀乃がフローリングにクイックルワイヤーを掛けている。四谷の格好は西田が訪問していたときと変わって、白い半袖のシャツにジャージパンツ姿だった。北野から着替えの許しをもらつて、四谷は嬉々としていた。

北野は四谷の言葉に振り返らず、うつとりとした雰囲気の四谷の言葉を耳にしている。

「ちょいワルってやつですね。だけどしつかりしますし、なによりいい人ですよね。いくつくらいなんでしょうか?」

「確かわたしの6つ上だつて、聞いたわ」

「そつか。35歳があ。円熟期の大人ですねえ。かつこいいなあ」

北野は四谷との会話で、自分の歳を思い出してしまったことに後悔して、舌打ちをした。北野はくるりと振り返つて、四谷にニヤリと笑いかけた。四谷はまた、北野に酷いことをされるのではないかと心配がもたげて、表情と体をこわばらせた。

「そんなに気に入ったのなら、『食べ』たりやえぱいいやない。お膳立てしてあげなくもないのよ」

北野の言葉に、四谷は「ンンン」と首を横に振った。

「えつ。いいですよ、それは」

「なあによ。西田さんは色々持っているはずなんだから。能力だけじゃなくってテクニックだつて、そりやあす」いんだから。【空読み】だけど

「いいんです！ 西田さんには、そういうことしないんです！ それに……」

「あ？」

四谷は、てへへ、と照れ笑いをして頭を搔いた。北野の眉間にピクリとして、鼻の穴が大きく広がった。四谷のあの笑いかたは、北野に精神攻撃を与える前兆だ。

「新しい彼氏、できたし……。今はその、彼がいちばん大切なんです。えへっ」

ふうん。北野は再び庭のほうを向いた。ガラスに反射した四谷の姿が、えへへ、えへへっ。と、クイックルワイヤーの柄を抱きしめて、体をくねくねさせている。

ギ、ギ、ギ、と北野の奥歯が魔女の咀嚼力を放つ。

「キノさん。わたしの彼氏いない歴、ここ存知だつたかしら？」

「え。し知りません」

四谷は知ってるけれど、嘘を吐いた。北野も四谷が嘘を吐いたのを知っている。

いない歴の最中でも、アバンチュールは何百回もあつたけれどね。と、北野は頭の中では必死に前書きをしながら、怒りを押し殺した咳きを発した。

「14年。14年よ。赤ん坊が中学生になつてないじゃないの。なんということでしょう！ ところで、今回のキノさんのはい歴は、一体いかばかりだったのかしら？」

「あ。は、はい。恥ずかしながら…… 3日です」

「ああ、そう」

北野は左脚を上げて、ぎゅっと腰をねじる。まだ中身の残つている右手のマグカップに左手を添えると、それを腰だめにする。振り返り気味の首から、肩越しに四谷の位置を捉えた。四谷がクイックルワイパーを放り投げて、回避運動に入り切る前に狙いをつけた。トルネード投法を忠実に再現した北野の、視認できない速度の腕の振りから投擲された超高速のマグカップが、空気を切り裂きながら四谷に襲いかかる。中身のブランデーごと、カップは四谷の額に的中した。およそプラスチック製だとは思えない鈍い音を立てて、カップの半分ほどが四谷の頭蓋にめり込んだ。四谷の体は後方へぐらりと崩れ、そのまま床の上に大の字を作った。白目を剥いた四谷の首が横向きにカクリと傾くと、額のカップが音を立てて床の上を転がった。リビング中をむせかえるほどの洋酒の匂いが包み込む。

「ここのクソブタが！ 地獄に落ちるッ！」

北野は体を戻して、ガラス戸に自分の肢体を映し眺める。左脚に重心を置き、左手を腰に当て、右手で髪をまとめるシニシユを外して放り投げた。はらりと顔に掛かった前髪を搔き上げるしぐさを、ピタリと静止させた。

……傾国の美女！

なんであんなドン臭い女がモテて、このわたしにはおこぼれすらないわけ？ ううん、そういう世間の流れなんかしら。萌えブーム？ 確かにわたしに足りないのはそれよね。美貌にプラスアルファの隠し味。なるほどね。だけどまあ、それにしたって、世の中の男どもは何を見てんのかしら。まったく。魔女の力でどうにかしちゃおうかな。

北野はあれこれポーズをとりながら、ぶつぶつと呟いた。

北野は四谷の気絶をそのまま放置して、自室に戻った。四谷が意識を取り戻したのは翌日の明け方のことだった。

北野清美専用の食器が残らずプラスチック製で揃えられているのは、このためである。

俺、熊木譲一！ 童貞！ でも毎日一生懸命生きてるよー。  
俺は路地裏でバーニガールに話を聞いてもらつた。

かおりとの出会いは雨の降る夜だった。俺はバイトを終えて帰ろうとしてた。バイト先の裏口から出たところで、雨が降っていることに気がついた。屋内でのバイトだつたし、気象予報に注意を払うクセもなかつたから、その夜未明にかけて雨が降ることなんて知らなかつた。店長の計らいで、俺はコンビニで売つてゐるような粗末なビニール傘を手に入れた。粗末だなんて、贅沢言つちや叱られるな！ 俺は店長に感謝しながら、3箇所も骨が折れ、所々に穴が開いた傘を広げて、土砂降りの中を帰路に着いた。

アスファルトには水たまりが出来ていて、俺はいちいち飛び越えながら帰つてた。大きな水たまりを飛び越えそこねて、お気に入りのシューーズを濡らしてしまつたことに舌打ちした。その時、俺のいた街路から外れた路地に黒い人影が見えたんだ。目を凝らしてみると、傘もささずに、女が座り込んでいた。それがかおりだった。かおりは泥だらけのジーンズに顔をうずめて泣いていた。

別にやましい心があつたわけじゃないんだ！ ただ、なんていうか、例えばお前は、バイトの帰り道に、まあバイトでも仕事帰りでも、学校の帰りでも何でもいいんだけどさ、ふと目を横にやつたら、段ボール箱に捨てられた子犬か子猫が、雨を凌ぐことも出来ずに、全身をビショビショにして、か弱い泣き声を立てていたら、見なかつたことにして素通りできんのか？ 俺には出来ねえ！ かおりを見つけた時、最初に思つたのは、そういう心情だつた。それにちょっと、ドラマチックじゃないの！ もし自分が逆に、か弱い女の子の立場で、同じように雨の降る路地裏に座り込んで泣いていたときに、ふと気が付くと自分に雨が当たらなくなつてるんだ。顔を上げ

てみると、そこには田もりむような男前の紳士が立っていて、彼は恩義せがましいこととか、どうしたの？ とか何にも言わずに、傘だけ置いて、自分は雨の中を濡れながら走り去つていいくワケ。カツコいいじゃん？ 惣れるでしょ？ 胸キュンでしょ？ ドラマでしょ！ 僕は人生にドラマを求めているんだ！

という心の台本を読みながら、僕はうずくまつていたかおりに傘を差し出して、雨を遮った。かおりは自分に冷たい雨が降つてこなくなつたことにすぐ気が付いて、泣き顔を僕に向けた！ カわいい！ って思ったね僕は。でも、僕の台本はここで彼女と親睦を深めるストーリーじゃなかつたからさ。後日また偶然会つて、そこからスタートする話の筋だつたし。僕はかおりにニッコリと、出来る限り男前になる笑顔をして、傘の柄を差し出した。かおりが傘の柄を掴んだら、僕は全力で走り去る予定だつた。

でも実際には違つたんだ。かおりは立ち上がり、親の敵みたいに俺を睨んできたわけ。アレッ？ それは僕の台本にないんだけど。つていうんで、リテイクを申し込もうとした僕の頬に、かおりの濡れた右手がバチンと叩きつけられた。痛い、って思うよりも先に、いや実際は火が出るくらいに痛かつたんだけどさ！ そななんだけどさ。えつ、なんで？ って思った。僕の台本には書いてなかつたからや。

「放つておいてよー」

かおりは俺を怒鳴りつけて、また泣き出した。ポロポロと、涙を流した。でも本当に涙が流れていたのかは、かおりの顔中が雨で濡れていたから分からなかつたんだけどね。僕の心情的に、そうしておいた話だ。

それにしても、放つておいて！ って言ひへさせ、僕にビンタするのはおかしくね？ 本当に心から放つて欲しいと思うんならさ、俺が差し出した傘を受け取ろうともせずに、また顔を膝にうずめて、

しきしく泣くのが、台本通りでしょ！　なんでビンタして、放つておけない話の筋に持つて行っちゃうのよ。俺の台本に、ないよ？　そんなの全然書いてないんだけど。

俺は姉貴を思い出した。俺には姉貴が一人いるんだが、面倒くせえ女だ。社会人なんだけど、職場で嫌なことがあると、帰ってきてから俺に絡んでくるわけ。でも自分からは職場であつた嫌なことは話そうとしないんだ。姉貴は俺の口から出てくる「なんかあつたの？」っていう言葉を待つていて、それが出てきた途端に、懲罰を晴らす勢いで、当日にあつた不愉快な出来事をまくしたててくれる。マシンガンみてえな勢いでな！　俺が不愉快になるつづーの！　俺はうんざりしながら、いつも生返事で聞き流す。それを悟ると姉貴はしかめつ面して「ちょっとあんた、本当に聞いてるの？」って言いながら、握りこんだ拳の人差し指と中指の第一関節を突き出した打撃で、俺の脇腹を殴つてくるんだ。これがマジで痛えからシャレにならねえ！　しかも俺がちゃんと話を聞いてやるまで、殴るのをやめないんだぜ！　ウゼエ！　本当に放つておいて欲しいときは、姉貴は自室に閉じこもつて出てこないからね。かおりの雰囲気に、俺の姉貴と同じのを感じで、俺は面倒くせえ台本を引いちまつたなあとちよつと後悔してしまつたよ。

イケメンの連れなら、ここでかおりの肩でも抱いて「もちろん放つておけるわけないよ。それじゃあ雨の当たらない、どこか暖かい所で休もうか」なんつって、自室かラブホに連れ込むんだろうけど。童貞の俺にそんな思考は全然、思いも付かなかつたんだ。とりあえず雨だけでも凌ごうと、「こねながらも素直に付いてくるかおりの手を引いて、近くにあつた24時間営業の牛丼屋に入った。なんで牛丼屋だったかつて言つと、俺が単純に牛丼屋しか知らなかつたからだ！

テーブル席に座つて、腹が減つているわけでもなかつたけど、なんにも頼まないのはさすがに店に悪いし、人としておかしいじゃない？　喫茶店だってそんなことしないでしょ。客も俺達だけだつた

しね。俺は牛丼を頼んで、かおりは何も言わないので、彼女には牛丼を頼んでやつた。

牛丼が出てくるまでの短い時間で、俺は畳んだビニール傘の雨粒を数えていた。なにしゃべつていいか分からなかつたし。向かいに座つたかおりも、なんにもしゃべらない。なんだよこれ……。どうなつてんの？ 俺の台本はどこを間違えていたんだろうかと、必死に考えてみたけど、分からなかつた。そもそも俺の台本と、かおりの台本は、バージョンが致命的に掛け離れているみたいだつた。そのうち牛丼と牛丼が出てきた。腹は減つていなければ、とりあえず目の前の牛丼に七味唐辛子と紅しおうがを山盛りにして、一口呑んだ。すると、かおりが口を開けた。牛丼を食べるためじゃない。俺が何を聞いたわけでもないのに、自分の事を話し始めた。

彼女はこの街のあるチームに所属していた。聞いたことのないチームだった。そこで彼女は回復役をやつていた。回復役ってのは、例えばチームのメンバーが戦闘をして、怪我をしたときこそ、それを直してやる役割だ。

かおりの回復能力は、【ヘル】だ。ヘルってのは地獄のことだ。なんでそういう名前なのか俺は知らない。きっと初めてヘルになつた奴が、自分をヘルって呼んで！ とでも宣言したんだろう。ヘルつてのは、自分の血液を消費して相手の傷を癒す能力者のことをいうんだよ。

かおりには付き合つていた彼がいて、彼女はそいつに誘われてチームに入った。何で拒まなかつたのか聞いたら、なんか簡単なサークルみたいに考えてたんだつてさ！ ヘえー、そつかあ！ つて言っておいた。なんて答えていいか分かんなかつたしな。そんでもかおりは、チームでヘルとしての役割を担わされた。かおりにはそれが、苦痛だつたようだ。

「手のひらを切り裂いて、それを腸のはみ出た所に、突っ込まれたのよ。ひどい。あんなこと、普通にできると思うの？ あんたや

つたことがある…？ あんな、あんなのって、ひどい

と、かおりはまた泣き出した。言われてから気がついたんだが、かおりの左手が包帯でぐるぐる巻きになつてた。雨でびしょびしおつたけど。

俺はその時には既にテツローさんのチームに所属していて、彼女がショックを受けるような凄惨な場面にも何度も出くわしたことがあつた。俺は、残念なことに、それにすっかり慣れちまつていたから、かおりが泣くほど参つている心情を、半分も理解してやれなかつた。ただそれでかおりを突き放すのは、可哀想だったから、俺は初めて戦闘をしたときに、俺のチームメンバーがマネキンみたいにバラバラにした相手の姿を記憶から引き出して、

「まあ、確かにそりゃ気持ち悪いよね……」

と、出来る限りめいいっぱいかおりに同期させた心情で、言った。話の途中で牛丼と牛皿は完食したけどね！ 飯を残すなつて、俺んちの家訓だしね

会話らしい会話はそれだけで、あとはグズグズ泣いてばかりのかおりと、空になつた牛丼と牛皿の容器と、店員のあぐびだけが、店内にある光景だつた。腕時計を見ると、もう3時を回つていた。俺の家は歩いてでも帰れる。ちょっと時間は掛かるけどね。かおりに、帰れるの？ 大丈夫なの？ って聞いた。ここでもイケメンの連れなら「もう終電もないし、仕方ないなあ」とでも言つて、かおりを自宅からラブホに連れ出すんだろうけど。俺は童貞だったから気が回らなかつた。かおりは大丈夫、家は近いって言つて鼻をすすりながら立ち上がつた。女の子一人じゃ危ないし、送つていくね！ と、俺は勘定をして、なんか普通に待つてくれたかおりと連れ立つて牛丼屋を後にした。

雨は土砂降りからちょっと弱くなつてたけど、相変わらず降つて

いた。俺は女の子と初めて相合傘をしたつていうの、ひつともときめかなかつた！ もつと心がワクワクするよつなイベントだと思っていたんだけどなあ。心中で落胆しながら、もつ充分に全身を濡らしていたかおりに、それでも雨が掛からなこみつに、小さなビニール傘を彼女のほうへ寄せた。

かおりは小さなアパートの一階の角部屋に住んでいた。角部屋つて、いいよね！ つて、いつもなら言つんだけじ、さすがに雰囲気的に言えるもんじやなかつた。彼女は自室の扉の前で俺に向き直ると「ありがとう」と鼻声で言つた。なんのありがとうなのかなあ。童貞の俺には分からなかつた。

「俺、熊木譲二。あみは？」

台本みたいな台詞だつたけど、もちろん俺の台本にはそれしか書いていないので、その通りに言つしかなかつた。かおりは答えてくれた。

「曾根かおり」

「うだ！ あぶねえ、ここでメアドとケータイ番号を交換しちゃなくっちゃ、この先の話が進んでいかないぜ！」俺はジーパンのポケットから携帯を取り出そうとした。

だけど雨で濡れたジーパンのポケットは固く締まつていて、俺の指を頑なに拒むんだ！ 俺が両手を使って必死になつていた最中に、かおりは自室の扉を開けると、何も言わずに扉を締めて、鍵まで掛けた！

「あ、ああ……があ……あ……」

俺はドラゴンボールみたいな呻き声を発して、その場に立ってぬけ

した！

俺が星野哲郎である、愛すべきテツローさんと出会ったのは今から2年も前のことだ。実は俺の方が1つ年上なんだぜ！でもテツローさんの雰囲気とカリスマ性に、俺は哲郎さんをテツローさんと呼んで慕っているんだ。テツローさんはそんな俺を、たまに睨みつけたりしていくけども！内心は快く側に置いてくれているんじゃないかつて、勝手に俺は思っている！なにしろチーム内で、俺ほどテツローさんの心情を理解出来ている人間は、そうだな、サナさんを置いてほかに、いないんじゃないかつて思うぜ！

サナさんっていうのは、古賀早苗って本名で、テツローさんのハトコで恋人だ。テツローさんは、照れ隠しなのか何なのか、童貞の俺には分からんんだが、サナさんとの仲を指摘されると、不機嫌そうにして、必ず「早苗は恋人じゃない」と言つんだ。でも、間違いねえ！ だって恋人以外にチューしないでしょ！ 俺のイケメンの連れみたいに女の友達が何百人もいる奴だったら、話は違うと思うけどね。

けどまあ、【夜の帝王】の異名を持つテツローさんには、浮いた話が山のようにあるけどな！ 例えばサナさんの双子の妹に、カナさんつてのがいるんだけども、彼女と一緒にお風呂に入つて、手づからオッパイを洗つてあげたりなんかしてたんだけど。きっと童貞の俺には分からぬ、そりやなにか深い深い深ああい事情があつてのことなんだろうさ！ あと色んな女が泣きながらテツローさんに抱きついたりしている光景を見たこともあつたが、そりやなにか俺の田にゴミでも飛び込んできた上での錯覚だったんだろうさ！ なんで俺がそんな事まで知つてゐるのかつて、それは後で説明するよ！まあ色恋沙汰には事欠かないみたいなテツローさんだけど、でも本当は違うんだ！ テツローさんは、恋人のサナさんを裏切つて他の女にうつつの抜かすよつた、そんな不誠実な男、じやねえんだ！

俺には判る！ 何となく、そう思つ！ たぶん！ とにかく！ 俺はテツローさんの恋人であるサナさんの次点で、テツローさんのことを深く理解している人間なんだ！ テツローさんが愛煙しているH.O.P.Eの本数を間違いなく数えて、新しいキャラメルボックスを差し出すタイミングだって、火を点けるタイミングだって、バッヂりだしな！

テツローさんが戦闘をする時は、俺はどんなことがあっても付いていく。バイトだって構やしねえ、仮病で休んでも付いて行くぜ。テツローさんが戦闘をする時は、主に夜だ。まあ昼も十分強いんだけどさ。これも【夜の帝王】の異名を取る、深い事情があるんだろうけど、俺には細かいことは分からぬ。それっぽそうな1つの理由は知ってる。テツローさんは夜の闇を操るんだ。闇をいろんな形に変えたり、目に見えなくしたり、感じさせなくしたり、とにかくテツローさんは、闇の力で相手を翻弄する。

俺がまだテツローさんと話もしたことのない、初めて会ったときのことだ。テツローさんと対峙してたのは、白騎士だった。白騎士ってのは体中がピカピカに光つて、夜だってのにそいつの周りだけは昼間みたいな明るさんだ。闇を寄せ付けない能力を相手にして、テツローさんはただ口元のH.O.P.Eを吸い込んで、赤い光を灯すだけだった。俺は、テツローさんが諦めたんだとばかり思っていた。でも違つた。テツローさんから何の呪文もしぐさもなく、突然白騎士は口から黒い液体をドボウツと吐き出して、光を失つちました！

スゲエ！ 見ていた俺は思わず声を上げた！ 次の日に俺はテツローさんのチーム入りを許されるなり、早速テツローさんに聞いた。昨日のあれはなんなんスか！ どうやつたんですか！ つて聞いたら、テツローさんはいつもみたいに、普通の表情で「別に。白騎士の能力を反故にさせただけだ」つて煙草を吸うだけだった。カツコいい！ 俺がもし女だったら、迷わずにテツローさんへヴァージンを捧げているところだつただろうよ！ テツローさんの横顔は、そ

りや端正で眩しかった！

そんな端正なテツローさんの横顔が、一度だけ崩れたことがある。表情じゃなくて、物理的に、そりやもうテツローさんの男前が目も離せないほど、グズグズにされた事があった。

ある時、チームメンバーのケータイに『果たし状』っていう題のメールが届いた。果たし状って！ 江戸時代！ 時空を超えたメールが届いた！ つてんで、チームのみんなで爆笑した。メールの本文を読むと、日時と場所の指定があつて、果たし状の相手には、ケータイの持ち主ではなくテツローさんを指定していたんだ。それを見て、みんな黙り込んだ。

テツローさんは果たし状の受信と内容を知るなり、

「俺に突きつけられた勝負なんだから、俺が一人で行くのが筋だ」

って言った。みんなは止めたけど、テツローさんは一度言ったことを撤回しない頑固者なんだ。みんなの反対を押し切つて、一人で指定の場所へ向かつてしまつた。俺は不安を感じて、『こそそと後を付けた。

チームのみんなは「テツローさんなら大丈夫」って安心しきつていた。だが、俺は不安だった。なぜかって、チーム同士の戦闘はゲリラ戦が普通だからね。戦争状態に入ったチーム員同士が、街中でもどこでも何でも、とにかく会つたら戦闘が始まる。その場が『決戦のバトルフィールド』になるって寸法だ。ゲリラ戦以外には、相手のホームに直接乗り込んでの襲撃か、そのくらいしかないんだ。日時と場所まで指定して、相手を呼び出して戦闘するだなんて、考えられなかつたよ。だって呼び出す側が断然有利じやんか。罷も仕掛けたい放題だしね。だからそんなの誰も考えなかつたし、普通は相手にしないもんなんだ。仕掛けたほうもさ、そんなので勝ちが

付いても、他から良い評判は付かないんだし、そのへんの体面を気にするでしょ、普通は。なのにテツローさんは行つちまつた。しかもテツローさんが闇の力を充分に発揮できない、昼間の戦闘だよ。そりやあんた、心配になつて見に行くしかないでしょ。テツローさんの腹心としてはさ。

テツローさんが向かつたのは市営公園の芝の上だつた。テツローさんの周りにはなんにもない。テツローさんは突つ立つたまま、普段みたいに体のどこにも力を入れない、だらりとした構えだつた。時間も気にせず相手の到着を待つっていた。

俺はテツローさんから30メートルくらい離れた背の低い木に体を小っさくして隠れてた。アベリアって書かれた木の看板が刺さつてた。アベリア！ かわいい名前だな！ ツレか誰かが側にいたら、間違いなくそう言つてたんだが、誰もいないんで心のなかで言つておいた。果たし状の時間まで、まだ少し余裕があつたんで、俺は公園をざつと見回してみた。芝の上にはテツローさんの他に人影はない。芝の向こうには背の高い緑色のフェンスが建つていて、その先は野球場の茶色いダイヤモンドになつてた。数人の小学生がサッカーボールを蹴つていた。俺の後ろは公園だ。ベンチと小さいプランコと滑り台くらいしかない。滑り台でお母さんと女の子が遊んでいた。ベンチには仕事をサボつているみたいなリーサラの20代後半くらいの背広がスポーツ紙を読んでいた。

この中に敵がいるかもしねーな……。俺は緊張した。能力なんて、誰が持つてもおかしくないからね。俺が今までで一番びっくりした能力者は、70過ぎくらいの、年金受給者だろうと見ただけで判るようなばあさんだつた。俺のばあちゃんくらいの歳をしたそいつは、テツローさんと同じような闇使いだつた。ばあさんは自分の足元の影から、50センチくらいの三日月型のカッターを出現させて、すげえ早さでじゃんじゃん飛ばしてくる能力者だつたよ。切れ味はとんでもなかつた！ 近くの家の壁のコンクリとか、道路標

識の金属なんかを、トーフみたいにスッパスッパ斬つてたからね。ばあさんの攻撃のとばつちりを受けて、俺のお気に入りのウールジヤケットの裾も斬られちゃったぜ！ ジャケットの斬られかたがなんだかカッコいいんで、まだ愛用してるけどね！

でも、切れ味鋭いばあさんの闇カッターも、テツローさんに掛かりやなんでもなかつた。闇カッターはテツローさんの体に触れるなり、テツローさんの体にスイスイと吸い込まれてつた。テツローさんは、ばあさんが連射するカッターを吸い取りながら、スタスターとばあさんの目の前まで歩いていった。遠目でもキヨドつて見えたばあさんの顔を両手で掴むと、テツローさんは、ばあさんの口を大きく押し広げた。テツローさんは、ばあさんの口に自分の口を近づけて、「チューするの！？」って俺が思わず叫んだと同時に、ばあさんの口から数センチ離れた所から、ふおおおおーって息を吸い込んだ。そしたらばあさんの口から真っ黒い煙がどんどん出てきたんだが、テツローさんはそれを全部吸い込んでしまつた。吸い込み続けるテツローさんの背中が3倍くらいに膨らんで、俺は破裂するかと思つてヒヤヒヤしてた。テツローさんは煙を吸い切ると、一度大きな咳をしてから、ベッと親指の先くらいの黒い塊を吐き出した。同時にテツローさんの背中がぎゅっと縮んで元に戻つた。ばあさんの顔から手を離したテツローさんが、指をバチンと弾いたら、黒い塊が内側からポンと破裂して消えた。テツローさんはばあさんの肩をポンポンと叩いて、ばあさんになにか二言三言呟いた。ばあさんはその場にへたり込んでしまつた。それでテツローさんとばあさんの戦鬪は終わつた。

俺は後でテツローさんに、「一体アレはなんなんスか！ ばあさんになに言つたんスか！ 念仏ですか！」って聞いたら「孫の敵討ちだよ。だけど人違いだ。俺が代わりにやつてやるから、静かに余生を暮らせつて伝えた」って、いつもみたいに真顔で煙草をふかしてた。すげえ、さすが夜の帝王！ 俺が叫んだら、テツローさんは不機嫌そうに睨んできたから、俺は黙り込んだ。テツローさんが言葉

通りにはあさんの敵討ちしたのかどうか、俺は知らないけど、きっともうやつたんじゃないかな。テツローさんはたまに、誰にも連絡を取れなくして、どこかにいなくなることがあるからね。

話がテツローさんとばあさんの思い出に逸れちまたが、そんなわけで、敵がどんなナリをしてるのかなんて全然分かんねえんだ。もしかしたら野球場でサッカーしてるガキ共が敵かもしけない。約束の時間が過ぎたら、ガキ共が突然ものすごいチームワークでテツローさんに襲いかかってくるかも分からねーし。滑り台で団らんしている親子が、突然まばゆい光を帯びながら合体して、身長3メートルを超える大男に変化しながらテツローさんに突っ込んでいくかも分からねーし。顔を隠してスポーツ紙を読んでるリーサラが、突然口からビームを吐いてくるかも分からないんだ！ 俺は腕時計を見た。メールにあつた指定時間の30秒前になつてた。俺はテツローさんに目を向け直した。

戦闘は10秒くらいで終わつたと思つよ。俺はまばたきをしなかつた。約束の時間になると、市営公園の時計がベルを鳴らした。瞬間、俺の視界のテツローさんがゅうりと揺れた。でもテツローさんの体じやなくて、テツローさんの周りの空気が、夏のアスファルトの熱を受けたみたいに揺らいだんだ。上半身がぐにゅっと歪んでぐに、テツローさんのほんの鼻先の距離で、火花が散つた。ドスン！ つて、鼓膜が破れるかと思ったほど、でかい花火に似た爆音が響いて、テツローさんの顔面で光が飛び跳ねた。光と一緒に、幾つかの破片がテツローさんから飛び散つた。テツローさんの肩からは、爆発後の白い煙で包まれて、俺の位置からは見えなくなつた。テツローさんの体は爆発の衝撃で後ろに仰け反つた。けど、テツローさんは左脚を一步だけ下げる、その足を突つかえにして、転倒するのを拒んだ。

そしたら急にテツローさんの体から、シャボン玉つていうか、かろうじて目に見える透明の膜が出てきてテツローさんを包んだ。でもシャボン玉と違うのは、光に照られた表面が虹色じゃなくて、

灰色つていうかそんなんだつた。シャボン玉はバビュンつて勢いで膨らんで、ドーム状に大きく大きく広がつた。灰色の膜がたちまち俺の目前まで迫つて、かと思つたら俺を通り抜けてつた。

シャボン玉が俺を抜けていつたのとほぼ同時に、テツローさんの足元から30センチくらいの幅の、黒い帯がザザーッと俺の5メートルほど横を通りすぎて、1秒もしないうちにまたザザーッと縮んで、テツローさんの足元まで戻つていつた。なんていうか、ちょっと高級な着物屋さんが常連の田の前で、着物の生地の巻物をペロペろーつて床に転がす所とか、テレビで見たことない？ あんな感じ。あれの超高速版みたいな。そしたら俺の後ろで男の悲鳴が聞こえた。振り返つてみるとベンチで新聞を読んでいたリーサラの男が、ベンチから崩れ落ちていた。リーサラが相手だつたのか！ リーサラはきつとテツローさんの黒い着物にやられたんだろうけど、なにをどうやられたのかよく分かんなかつた。そんなことよりも、俺はテツローさんのことが心配だつた！ アベリアを飛び越えて、テツローさんに駆け寄つた！

駆け寄りながらもテツローさんから視線を離さなかつた。風に流れはじめた煙から出てきたテツローさんの姿に、俺は背筋がぞつとなつたよ。前に回りこんで確かめたテツローさんの顔面は、ドクロ！ つて思わず叫びそうな姿になつてた！ 顔と胸あたりの皮膚と筋肉が、爆発の衝撃で飛んで無くなつてた！ 右目も無くなつた！

「てつ、てつてつてつ

テツローさんの名前を呼ぼうとしたんだが、動搖した俺の口は震えて動かなかつた。テツローさんは残つた左目で俺を見た。俺を見ながらテツローさんは、ポケットからジップポとH.O.P.Eを出してきた。こんなときにも喫煙ですか！ 危機感ないんつスか！ だけど、テツローさんの唇は吹つ飛んで前歯しかなかつたから、煙草を吹か

す」ことが出来なかつた。俺は震える手でテツローさんの前歯からH-O-P-Eを取り上げ、ジッポの火をもひつて煙を吹かしてやつた。火の点つた煙草を再びテツローさんの前歯にかじらせた。でも吹かせないんだから吸うことも出来ないつて、遅まきに気が付いたけどな！  
テツローさんは喋らなかつた。喋れなかつたんだ、喉まわりの皮膚が裂けて、テツローさんが呼吸をするたびに赤黒いドロドロが出てきてた。

もしかしたら俺のほうがフラフラしていたのかもしれねーが、俺は日付の変わつた場末の赤提灯から出でてきたオッサンみたいにフラフラしてテツローさんの肩を担いで、公園を沿う幹線道路に向かつて歩いた。テツローさんを引きずつていいく最中に、俺は宇野さんに電話をかけた。宇野さんは昔からテツローさんのチームに所属していて、テツローさんの次に頼りになる兄貴分だ。テツローさんと違つて歳も俺より上。ちょっとした戦闘狂の変態だけどな。

『どうしたジョージ。いきなりいなくなつて、ビックリする？』

「てつテツローさんが、ドクロみたいになつちまつた！ 顔の皮が全部、剥げちまつた！ それに、右目が、ないんだ」

『落ち着け。敵はどうした。哲郎はまだ生きてるんだよな？』

「生きてるよ！ 敵はテツローさんがブツ飛ばした！」

『やつこなくつちや！ 顔がブツ飛んだくらいで死ぬようなリーダージャ、田も当てられねえよな！ それで今、どこだ？』

「果たし状のお、メールにあつた公園だよつー！」

『分かつた。すぐにに行く。シテのある回復屋を連れて行く。それま

で持たせろ』

俺達のチームには回復役がない。ちょっと前まではいたんだが、下手なことをやって公安に捕まっちゃった。

俺は宇野さんの『回復役』という言葉を聞いて、心当たりを思い出した。かおりのことだ。

「おっ俺、アテがあるよ、回復屋の！ そこに、行ってみる

かおりが自宅に居るかどうかも分かんないし、彼女がテツローさんを治してくれるか分かんないけど。俺はかおりにすがることしか思いつかなかつた。

『分かつた。俺もそこに行く。住所は？』

「じゅつ、住所は分からねえ。場所は知ってる！』

『使えねえな、バカ。大まかな場所だけでいい、近所に着いたら連絡する。あと時間差で追撃つてこともなくはないからな、周りに気をつけろよ。頼んだぞ。哲郎を死なすなよ』

携帯を切つて幹線道路へ出ると、見計らつたタイミングでタクシーが来た。止まつたタクシーの扉が開いてから俺は、もしかしたらコレもテツローさんを狙つてる奴らの罠かもしけねーな……と思つたが、構いやしねえ！ 狹い車内で戦闘になつたって、どんな敵が攻撃を仕掛けてきたつて、テツローさんをこの身一つで守りぬいてやるんだ！ と、心に決めて乗り込んだ。幸いなことに、タクシーはホントに偶然通りかかつただけの、フツーのやつだった。俺は勿体ないけどオジサンに万札を突きつけて、全速で目的地まで向かってくれと頼んだ。

オジサンはミラー越しに俺達を見て無関心をしきりに装いながら、グズグズに崩れたテツローさんの顔面をチラチラと伺っていた。もしも騒ぎになるといけないって思つたんで、俺は脱いだ上着をテツローさんの頭の上からかぶせていたんだが。上着の隙間からテツローさんのひどい顔面が見えたんだろう。

「そつちのお兄さん、なんだかすごいケガをしてるみたいだけど、大丈夫？ 病院に行かなくつても……」

「だつ大丈夫だ！ これは、ケガじゃねえ！ その、特殊メイクだ！ 撮影用のな！」

「ああ！ なんだ、なるほどね！ そういうことですか！」

俺の言葉をオジサンは心底信じてくれたようだつた。なんつー単純なオッサンだ、と思いながらも俺は安堵した。俺は黙つているのが不安だつたし、オジサンに疑惑を持たれることを避けるために、テキトーな言葉をべらべら喋つた。

「すげえだろ！ 本物みたいで！ 俺が2時間掛けてメイクしたんだ！ 俺達はその……自主制作の映画を撮つてるんだ、大学の学祭で発表するやつをな！ さつきまで公園で撮影してたんだ」

「はああ、自主作成の映画をねえ。すごいねえ、本物みたいなメイクじゃないですか！」

「そ。そつだろ！ 俺も会心の出来だと思つてるよ。実は俺、ハリウッドからもお呼びが掛かつてゐんだぜ！ 特殊メイクが有名なホラー映画の、あの、アレの監督とかからなつ！ 学校を卒業したら渡米する予定なんだ」

「あー、なるほどねえ！ 確かにその腕だったら、ハリウッドから誘いが来てもおかしくないでしょうね！ 本物みたいにすごいメイクですからねえ！」

「だろ？ だけど俺はずつと向こうにいるつもりはないんだ。5年か、長くて10年ってところだな！ 向こうの技術を学んだら、絶対帰つてくるつもりだ。やっぱり日本人は、日本で活躍しないとな！」

「はあ、立派ですねえ！ 最近は野球もサッカーもすぐに海外ですかねえ。向こうのレベルが高いのは分かりますが、なんか寂しいですよねえ」

俺とオジサンが会話している途中で、時たま隣のテツローさんの喉がゴボゴボッて、藻で覆い隠された水槽から気泡が湧くようなヌメつた音を立てた。後からテツローさんから直接聞いたんだが、「お前の言つことがあんまりデタラメなんで、つい笑つちましたんだ」だつて、言われちました。

かおりのアパートの前で降りて、俺はテツローさんを担いで階段を上がった。角部屋の前でテツローさんを落下防止の柵に寄り掛かせると、俺はかおりの部屋の呼び鈴ボタンを押し込んだ。立つていられなくなつたのか、俺の後ろのテツローさんが柵に背中を押しつけて、ズルズルと倒れていつた。俺は祈る気持ちで、もう一度ボタンを押した。同時に扉が開いて、隙間からかおりが現れた。俺にはかおりが女神様に見えた！

「何？ なんの用？」

「頼む！ ケガを治してくれ！」

「はあ？ ひつー！」

かおりの顔が引きつった。彼女の視線は俺ではなく、俺の肩越しにテツローさんを見つけたんだ。途端に俺の言葉を察して、かおりはギッと食い縛つた歯を剥き出して、俺を睨みつけてきた。

そりやそうだ。俺はかおりが自分の能力を疎ましく思つてることも、それを絶対に使いたくないつてことも知つてゐる。俺がかおりの心情を知つてながら、それを裏切つて治療を頼みに、ここに現れたことに腹を立てているんだ。それなのに俺は、かおりの心よりもテツローさんを優先させている。かおりの気持ちを知つてゐるのも関わらずに、だ！ ふざけんなつて感じだよな。俺は自分が、かおりにどんなにひどいことをしているのかも分かつていた。だけど俺やかおりのことはどうでもいいつて思った。テツローさんの傷を癒すには、かおりの力が必要なんだ。

俺はかおりが閉めようとした扉に体を滑り込ませた。かおりは思いつきり扉を閉めようとしていたから、扉と壁に体を挟まれて、びっくりするくらい痛かった！

「ちよつ、やめてよつ！ 出でつて！ 帰つてよー！」

「お願ひだ！ お願ひだから、傷を治してくれー！」

「ふざけるな！ 帰れつ！ 痛ついつ、ちよつとー！」

俺は左手でかおりを強引にドアノブから引き離し、扉を全開にした。かおりの手をそのまま握りしめて、後ずさるかおりが部屋の中まで逃げてしまわないように、力づくで引き寄せた。かおりは俺に掴まれている反対の手で、俺の腕に爪を立ててきた。俺はそっちの

手も捕まえ、かおりを完全に拘束した。かおりの細い肩が、もぎ取れちまうんじやないかつてくらいこわばつて、俺から必死で逃げようとした。俺はかおりを玄関から扉の外に引っ張り出した。裸足のまま、かおりが外に飛び出してきた。

「頼むから、この人を、治してくれないか」

「最ッ低……。なんなのよ、あんた。ふざけないでよ！ わたし、あんたに話したはずだよね。わたしが、どれだけ嫌な思いをしたのか。話したよね？ それなのに、知ってるのに、こんなこと押し付けてきやがつて！」

「分かつてゐる。本当に、悪いと思つてゐる。だけど君しか、頼る人がいないんだ」

「クソが……自分の都合ばかり押し付けてきやがつて……お前もあいつらと同じなんだ！ ちくしょう、死ね！」

「おひふつー

ズドン！ と、かおりが俺の金玉を蹴り上げた！

俺の視界が一瞬ピカッとホワイトアウトし、俺にだけ聞こえる落雷に似た地鳴りの効果音が響きわたり、金玉から発生した強烈な電撃が俺の全身を駆け上がつた！ 俺の頭頂部からは電撃で焼け焦げた脳みそが飛び出し、両方の目玉はバネ仕掛けのオモチャのように飛び出し、口からは五臓六腑がグロリと飛び出した！

俺は床に膝をつきかけたが、根性で回避した！ 俺の膝が折れたことで、ちょうど俺とかおりの目線が同じ高さになった。見計らつたかおりが、俺の鼻つ柱に頭突きを繰り出してきた！ ゲジッと喉の奥のほうで変な音がして、ガキの頃にプールで溺れたときみたい

な息苦しさが鼻の氣道を塞いだと思つたら、目で見なくてもそれだと判る勢いに、両方の鼻の穴から血が吹き出した。俺は堪らず目を閉じた。洪水のような涙が無理矢理にまぶたを押し広げて、ドバッと流れ出てきた。

「 すげえ女だ！ 俺は場違いにそんなことを考えていたよ。うつかり後ろのテツローさんに振り返つて「この女をチームに入れましょう！」即戦力ッスよ！」と言おうとさえ思つた！ マジで！

俺はかおりの攻撃を全て根性でカバーした。テツローさんの傷に比べりや、屁でもねえ！ 自分に言い聞かせて耐えた！

腕力に自信のある俺は、左手でかおりの両腕をまとめ、かおりの下腹部に押し込んで自由を奪つた。閉じた部屋の扉にかおりの背中を押し付けて、また金的を喰らつては堪らないので、左脚をかおりの太ももにぴったりと付けて動きを奪つた。左肩をかおりの胸骨に押し付け、かおりの背後の扉と併せて挟み込んだ。「ううっ」とかおりが呻いた。俺はかおりが、かわいそうになつた。突然変な男が押し掛けてきて、こんなことされちゃ、俺だったら周囲の住人が10番を迷わずダイヤルするような大声で泣き出しちゃうよ。でも、かおりは泣いてなかつた。俺の潤んだ視界のなかで、彼女は相変わらず俺を睨みついている。スゲエなあ。この気迫！ やっぱり、こいつは即戦力だよ！

俺は心の台本を引っ張り出して、もの凄い勢いでページをめくつた。かおりを何とか説得して、テツローさんの傷を治療させるようなセリフを探して必死になつた。だけど俺の台本に、こんな場面はない！ 台本を放り投げた俺は、自分でセリフを考えたが、何にも思いつかなかつた。俺は自分のEQの低さを呪つた！

「 ちくしょう！ 呪われろ！ 女にこんなことしゃがつて、お前ら二人とも、呪つてやる！」

「 かおりも俺を呪つてくれた！ ありがとう… だが、二人ともつ

てのはいただけねえ、呪うのは俺だけにしておけっ！

俺は右手に【黄金のナイフ】を召喚した。俺の能力だ。そいつを俺とかおりの田の前に突き出した。さすがのかおりも、これには田の色を変えた。

だがナイフを出したのは、かおりを斬るためでも、刺すためでもない。俺は自分の首にナイフを当てた。俺のナイフは切れ味だけは抜群だ！ そつと首筋に当てただけなのに、持ち主の俺だっていうのに、ナイフは刃が皮膚に触れたことを瞬時に感知して、喜び勇んで裂いてきやがった！ バカ！ 早えよバカ！ ナイフには鍔がないんだ、滴つてきた俺の血が、柄を握りしめた指の上に早速流れてきた！

「俺はこれから、死ぬ！」

「はあ！？」

「俺は死ぬ。だけどテツローさんは死なねえ！ お前がテツローさんを治すからだ！ テツローさんのためなら俺は死んだって構わねえ！ だからテツローさんを、治せ！」

いくら俺たちの猫でもこんな台本は書かねえ！ でも俺の脳みそは猫どころか、昆虫よりも少ないんだ！ これしか思いつかなかつた！ 許してくれ！

かおりは俺につばを吐いた。

「勝手に死ね！」

「あああ、勝手に死ぬよ！ だけどテツローさんのことば、頼んだぜ……。俺と引き換えた。地獄から見張ってるからな！」

俺は自分の口から出た地獄つて言葉に、突然怖くなつた！ 本当にこの台本で良かつたのか……。分からねえ。死ぬとどうなるんだ？

? 首に当たたナイフを思いつきり引いたら、俺はどうなるんだ？

怖え！ 今さら全身からびっしと汗が吹き出してきた。

だけど一度吐いた言葉を口の中に押し込んで、嘘でーす！ って言つのは、ちょっと、なあ……。さすがにカツコ悪い。カツコ悪いなんてもんじやない。そんな奴はウンコだ。いや、ウンコのほうが2倍はましだ。でも、もう言つちゃつたしな……。ううふ。どうしよう。童貞のまま、死ぬのも嫌だな……。勢いつて、怖いな。突拍子もないこと言つちゃうんだもんな……。

「ふざけんな、バカツ！」

無意識に、俺は自分で自分を叱りつけてた！ かおりは自分に向かられた言葉だと思ったのか、少しひっくりした表情を見せた。

俺は、俺自身の言葉で目を覚ました。カツと目を見開き、その決意で首のナイフを思い切り振った！

首筋から勢い良く血が吹き出し、田の前のかおりが真っ赤に染まつた！

「…………あれっ？」

というのは、俺の錯覚だつた。俺の右手は確かに右の首筋から移動して、左肩のあたりにあつた。俺は右手の中にあつたナイフの感触が消えていくことに、しばらく気が付かなかつた。

「ひつ

かおりが息を飲んだ。彼女の視線は、俺じやなくて、俺のすぐ横を向いている。そつちに首を向けると、目の前にドクロが立つてい

た。ドクロの中には、俺とかおりが並んで映っていた。ドクロは自分の右手をぐいっと持ち上げると、俺の顔面に叩きつけてきた。かおりの金的や頭突きに比べれば、蚊の止まつたような威力だつたけど、俺の体はなぜか大きく跳ね上がった。かおりを掴んでいた左手が離れ、俺は床に倒れこんだ。

倒れこんだまま、俺はテツローさんを見上げた。テツローさんは肩を震わせて、ゆっくりと大きく息をしていた。相変わらず喉からは黒い血が出ていた。テツローさんの左手には、どうやって奪つたのか見当も付かないが、俺のナイフが握られていた。テツローさんはナイフを足元に捨てた。ナイフは床のコンクリに、音も立てず半分ほど突き刺さつた。テツローさんは俺たちにくるりと背を向けて、階段に向かつて歩き始めた。ふらついて倒れそうになり、柵に体を寄せた。

俺は立ち上がって、落ちていた俺の上着を引っ掴んで、テツローサンに駆け寄つて肩を担いだ。二人してよたよた歩いて、階段を降りた。階段の途中で、きつとかおりの部屋だらうな、扉が閉まる音が聞こえたよ。

宇野さんに、回復屋が不在だったことと、住所を連絡して、携帯をジーパンにしまつた。振り返ると、アパートの階段の一段目に腰掛けたテツローさんは右半身を柵に任せ、ほとんど息が止まりかけていた。もう喉から血が出ることもなかつた。俺はテツローさんにかぶせた上着をそつと直して、隣に座つた。宇野さんが着くまで、まだだいぶ掛かる。

テツローさん、これで死んじまうのかな。と、ぼつぼつと思つた。そしたらなんか泣けてきたんで、ガラでもないんで、俺は頭を振つて考えを飛ばした。鼻の下を擦つたら、かおりのヘッドバンドで出てきた鼻血が、半分塊になつて半分まだ濡れてて、俺の手の甲にくついてきた。俺はジーパンで手の甲に付いた鼻血を拭いた。軽トラのトーフ屋が、車体の天井にくつつけたスピーカーからブーピー

と例の笛の音をラジオかなんかの録音で流しながら、ゆっくりと俺たちの目の前を過ぎていった。空を見上げると茜色だった。俺とテツローさんには夕日が差さず、アパートの向かいの民家から伸びる影が降りていた。空気がだんだん冷えてきた。テツローさんの命を象徴するようで気味が悪かつた。

「テツローさん。サナさんはうまく行つてゐんスか？」

テツローさんは場違いもはなはだしい俺の問いかけに、少し首を傾けて、上着の下の左目をギロギロと向けてきた。でもいつもの、見ただけで殺されるかと感じるような眼差しではなくて、鮮度のなくなつた魚類みたいな半透明の膜が、テツローさんの目に掛かつてた。俺はまた泣きそうになつて、背中が震えた。たまらずに目を逸らした。

「すいません。今聞く話じゃないつスよね」

俺は眉間を強く摘まんで、目を閉じた。

カンカンカン、とアパートの階段を鳴らしながら誰か降りてきた。俺たちは階段に座り込んで、塞いじまつてゐる。でもテツローさんをどかすことはできねえ。俺は立ち上がり、人一人が通れるスペースを空けた。俺とテツローさんの数段上で立ち止まつたのは、かおりだつた。俺はギョッとした。かおりは俺のナイフを右手に握り締めていた。顔は無表情だつたが、頬に涙が流れてた。かおりはテツローさんの目の前に立つと、身構えていた俺には脇目もくれず、自分の左手首から少し上をナイフで切り裂いた。鋭い切れ味から、かおりの赤い血がどつと溢れてきた。かおりは血を右手でぬぐい、左手を擦り合わせると、テツローさんのふところにしゃがみ込み、血まみれの両手をテツローさんの顔面に押しやつた。ジャアアッと、よく熱した中華鍋で炒め物をするみたいな音と、火葬場から昇るよう

な白い煙が、テツローさんの顔とかおりの指の間から上がった。かおりは十数秒の後、押し当てていた手を離した。消し炭のようだつたテツローさんの皮膚が血色のいい健康的な肌色に盛り上がり、猛禽類を連想させる左目の眼光が蘇っていた。かおりは再び自分の左手を切り付け、傷口から流れ出る血を両手に受け、今度はテツローサンの喉元へ押し付けた。顔面と同じように音と煙が上がる。かおりがテツローさんの傷の上に手を滑らせる度に、かおりの手の下からはテツローさんの肌色がぬぬぬと再生した。

「すまない」

表面は治っているように見えたけど、内側はそれほどじゃないらしい。久しぶりに俺が聞いたテツローさんの声は、ひどいカゼを引いたみたいに、かすれていた。でも、かおりへの申し訳なさが、はつきりと聞き取れた。かおりは声を押し殺しながら、泣いていた。

「とまあ、そんなドラマがあつたわけだよ

俺が話しこえると、田の前のバーニガールは、わあつと感動した表情で、熱心な拍手をした。俺はちょっと恥ずかしくなつて、胸の前で組んでいた腕を解いて、照れ隠しに頭を掻いた。

「ジョージさんつてお話つまいですよなー、わたし思わず引き込まれちゃいましたっー

「そんな、褒められても、なんにも出ねえつすよー。ただのお喋りジョージですよー」

俺は今、とあーるビルの裏で、バニーガールと逢引きしている。

嘘だ！　ごめん、ちょっと見栄を張つてしまつた。バニーガールと俺は何ともねえ、ただの売り子と密の関係だ。本当に何ともねえ。心の底から、残念なことに、本当に、何もない。

目の前のバニーガールは四谷キノつていう、情報販売屋さんだ。俺は彼女からテツローさんに關する過去の情報を買つていて。俺が知らない過去のテツローさんに起こつた出来事を知つておきたいからだ！

だけど、別にその情報は、テツローさんの私生活を知りたいていうストーカー的なもんじやねえ。

テツローさんが今までこなしてきた戦闘のアーカイブをもらつてるんだ。

まあ、ちょっとだけテツローさんの過去の私生活も、観ちまつたがな！　それは俺がキノちゃんに頼んだからじやねえ！　なんでか知らねえが、キノちゃんがおまけで付けてくれたんだ！　俺は別に進んで見る気はなかつたんだが、捨てるのももつたいないんで全部観たけどね。テツローさんの女関係とか、恋人であるサナさんの妹とお風呂に入つておっぱい揉んだりした過去も、それで知つたんだ！　さつきも言つたんだが、キノちゃんはバニーガールだ。今日は、バニーガールのコスプレをしてる。頭に長い耳のついたカチューシャをつけて、リボンのついた黒いチヨーカーをつけて、肩の大きく出たバニースーツを着て、網タイツを履いて、ヒールの高い靴を履いている。なんていうか、目に優しいよね！　いい保養になるよ！

キノちゃんは情報販売屋さんだが、彼女が売つてゐる情報は、彼女の持ち物じやない。彼女はただ、売り子をしてゐるだけだ。実際に情報を集めて、それを俺や他の人間にも閲覧可能な指輪という能力に加工してゐるのは『キヨミさん』という別の人物らしい。この口スプレーも、キヨミさんの命令で仕方なくやつてゐるらしい。本人は恥ずかしいんで嫌だつて言つてゐるが、俺はキヨミさんに深く感謝し

ている！

俺がキノちゃんの情報販売屋さんを知ったのは偶然だった。

コンビニの帰り道に、なんかピコピコと電子音が聞こえてきて、何となしにその音を辿つていったら、ビルの裏に続く路地の向こうから聞こえてるって分かった。路地を覗いてみると、十数メートル先のビルの裏から、虎の尻尾みたいなのが地面に落ちてた。不思議に思つて足を踏み入れると、虎のコスプレをしたキノちゃんがコンクリに座り込んで携帯ゲーム機で遊んでいた。キノちゃんはゲームに夢中で、俺の存在には気がついていないようだつた。俺が耳にしたピコピコは、ゲームのBGMだつたわけだ。

俺はどうかのアミューズメント施設か何かのイベントで雇われたバイトが休憩してゐるのかと思つたが、この辺にあるのはコンビニくらいで、他は住宅かビルしかない。

キノちゃんの足元には、アタッシュケースが開かれていて、ケースの中には紫色の生地が敷いてあつた。生地のくぼみに幾つかの指輪が入つてて、指輪には小さな紙が糸でくくりつけられていた。紙には値段と『サトウ』とか『スズキ』とか何とか、人の名前が書かれてた。

俺にはキノちゃんに声を掛けずに立ち去るという選択肢もあつた。彼女が何者なのかも分かんないし、確かにたまに道端でアクセを売つてる露天とかは見るけど、こんな人の通らない路地裏で商売している奴なんて見たことがない。おかしいつしょ。怪しいでしょ。俺の足も引き返しかけたんだけど、そんなのドラマじやないよね。確かにものすつじぐく、怪しいけど、女の子だし、これは声を掛けるべきでしょ！ 俺は人生にドラマを求めているんだ！

「……ここでなにしてんスか」

「……あつー

キノちゃんは俺に気が付くと、手にしていた携帯ゲーム機を床に置き、尻を手で払いながら立ち上がった。多分俺は変なものを見ような目付きで彼女に向けていたはずだ。キノちゃんはなんか、きまりの悪そうな顔をして「あ……う……」とキヨドッていた。が、いきなり俺との間に腕を突き出して、多分虎のカギ爪をイメージしていたんだろうが、指の関節を折り曲げて、

「が、がお……あ、あつ、そうだ!」

がおー、ってやるんだと思つたらそれを止めて、キノちゃんは俺に背を向けてしゃがんだ。俺がさつき見た尻尾がキノちゃんの腰のあたりにくつっていたので、俺はそれを無性に引っ張つてみたくなつたんだが、とりあえずキノちゃんを待つてた。キノちゃんはアタッシュケースの横に置いていた手袋をはめるのに夢中になつた。手袋はぬいぐるみみたいなモサモサのやつで、虎の模様が描かれてた。普通の手袋と違つて指先が丸くなつていて、先っぽにフルトか何かで爪の飾りが付いてる。キノちゃんは右手に手袋をはめ終わつていたんだが、さつき言つたみたいに指の先が丸くなつているんで、左の手袋をはめづらそうにして「あれ？ あれつ？！」と焦つていた。

なんだこりゃ。どういう台本だよ……。俺はドツキリカメラかと思つて、周りをきょろきょろと見回してみた。そしたらホントにあつた！ カメラあつた！ 隣のマンションとを隔てる壁の上に、家庭用のビデオカメラが置かれて路地裏を撮影していた！ 俺はびっくりした。後でキノちゃんに聞いたら、カメラはキヨミさんに提出する証拠だと説明した。キノちゃんがちゃんとコスプレを着たまま売り子をやつしているのか、キヨミさんが確認するためなんだとか。なんつームダなことをしているんだ。

ようやく虎の手袋を付け終えたキノちゃんが立ち上がり、俺に振り返った。キノちゃんは手袋を無事に付け終えられて、満足そうな笑顔だった。

「がおー！ いらっしゃいませつー！」

俺はなんのリアクションも取れずに押し黙った。

キノちゃんは笑顔を緩くして、顔を耳まで真っ赤にして、持ち上げていた腕を下ろして、うつむいた。

「いや、恥ずかしいんなら、やめなよ……。俺の質問の答えにも、なってないっしょ……」

「すいません……」いつないこと、後で怒られるので……」

「そつかあ……なら、仕方ねーみな……そりゃ仕方ねえ」

「はい……仕方ないんですね……」

世の中には仕方ないことなんて、山ほどあるしな。  
だけど、なんかもう、どうしていいか分かんなかつたんで、黙つてた。

キノちゃんも黙つてた。

路地裏つて、案外静かだなあと思つた。

そんな感じの数ヶ月前、俺はキノちゃんと「ネクション」を手に入れたわけだ。

キノちゃんが売っているキョウゼンの指輪の性能は、スゲエもんだ。指輪をはめた人間の五感に干渉して、指輪に記録された出来事

を、映画も田じゅうねえ臨場感で伝えてくれる。

「こんなにスゲェアイテムを、なんでわざわざ路地裏で売つての  
かつて聞いたたら、それもキヨミさんの指示だつて言われた。

キノちゃんから聞いた話によると、キヨミさんが言つては、昔の  
RPGなんかだとさ、ちゃんとした武器屋よりも、村の外れに居る  
オッサンから、より強い武器を買えたりするじゃない？ アレをイ  
メージしているらしい。売り上げとかは一の次なんだと。キノちゃ  
んからしてみれば、コスプレしたまま人目を引くよりは百倍マシだ  
から、助かるとか。確かにバーニガールや虎が路上販売なんてして  
たら、いい噂のタネだし、職質の格好の餌食だよな。

「それでそのあと、テツロー兄貴とジョージさんは、どうしたんで  
すか？ かおりさんは、どうなったんですか？」

キノちゃんの頭に付いているウサミミは、キノちゃんの声に合わ  
せてピョコピョコ動くんだ。どーいう仕組みなのかわからんねえ……。  
電池で動いているのが、もしかしたらこれもキヨミさんが作ったウ  
サミミなのかもしれない。ウサミミの性能だとしたら、なんつーム  
ダなことをやってんだろう。キヨミさんは会つたことないけど、  
いい友達になれそうな気がする。

「その後は、俺とテツローさんがかおりに謝り通しだつたよ。俺は  
テツローさんが人に頭を下げるのを初めて見たんで、ちょっとびっ  
くりした！ テツローさん、普段は謝らないからね！ サナさんは  
ものすげえ喧嘩して、理由を聞いたら明らかにテツローさんが悪い  
つて時も、謝らないからね。でも次の日には、サナさんも二コ二コ  
してから、きっと夜にベッドの中で謝つたりしてるんじゃないかな  
な。まあ童貞の俺には想像も付かないんだけどね」

キノちゃんはウンウンと頷いた。

「なるほど。【夜の帝王】たるゴエンですねー。」

キノちゃんは結構テキトーだ！ だがそれが俺とマッチしてるから、いいんだけどね。

「んで、かおりだが。あいつはテツローさんの傷を治した後、俺とテツローさんの謝罪にはなんにも言わずに、部屋に帰つちました。それつきりだ。俺の台本にも、この先のことは書いてないんだ」

「そうですか

俺に合わせて、キノちゃんも暗い顔をした。頭上のウサミミがキノちゃんに合わせて、中折れになつてシボンとした。いちいちリアクションの取れるウサミミに、俺は感心した。すげえ。ちょっと欲しい。

俺は咳払いをして、真面目な男前の表情を作つた。キノちゃんもハツとなつて、眉をきつと引き上げ、口を結んで俺にならつた。

「話は変わるが、四谷くん。俺が先週依頼をした、例のブツは用意してくれているのか？」

「はい、熊木さん。例のブツは、一九二一！」

いい！ キノちゃん、いいよ！ 俺の台本に合わせてくれる、数少ないテキトーな人物だ！

キノちゃんは言いながら、アタッシュケースをゴソゴソして、指輪を一つ取り出した。

キノちゃんが取り出した銀の指輪の表側には、何の装飾もされて

いない。指輪の裏側には、キヨミさんが指輪を作成した日時と、ナンバーリングが掘り込まれている。

俺はキノちゃんの手にある、白い布の上に置かれた指輪を慎重に取り上げると、指輪の刻印を確認した。

『××／×／2××× T·Hōshūkō／Nō·70』と読み取れる。俺はニヤリとした。キノちゃんもニヤリとした。

「うむ。確かに。これが報酬だ！」

俺が折りたたんだ万札をキノちゃんに手渡すと、キノちゃんは勘定するときだけは眞面目になつて、ひふみ……と枚数をしつかり一度確かめる。さつとキヨミさんにきつく言い聞かせられてるんだろう。俺がキヨミさんでもそつそつだらう。なんていうか、キノちゃんは、すぐつづかり騙されそつだからな。

「確かに受け取りました！　これは領収書がわりです！」

するするっとキノちゃんは後ろに下がり、足元のおぼつかないヒールでピョコピョコ跳ねながら、なんていうか、幼稚園のおゆうぎ会みたいなダンスを始めた。

「ぴょんぴょんぴょんぴょん、つわわのダンス！　お買い上げ、ありがとうございまーす！」

クルクルと回ると、右足を前に出して、左手を腰に当てる、右腕をパッと頭上に持つていき、キノちゃんは俺にウインクした。

俺は黙つてた。

キノちゃんの顔が、耳まで真っ赤になつた。ウサミミがシンボンとした。

「いや……別にこりよ。俺の時は、それ、やんなくてけむ……」

「すこません……」れやらなこと、後で怒られるので……」

「せつか……じゃあ、仕方ないね……」

「はい……仕方ないんです……」

世の中には仕方なことが、山のようにあるしな。

「そんじゅ、早速……」

「あつ、ちよつと待つてください……」

指輪をはめようとした俺を、キノちゃんが静止した。

「実はその指輪、他のと違つてちよつと特別なんですよ

「え。どうしてなの?」

「清見さんが、こつも買つてくれるジョージだけに作った、特別製なんです。ジョージさんが指輪をはめてすぐには、誰かと手を繋いでください。その人だけの限定ですが、指輪のビジョンを共有できるんですよ!」

「おおーー。そいつは、スペシャルだな! キヨリさんご感謝だな  
つー!」

するとこきなりキノちゃんが、俺にぐぐっと近づいてきた。俺はドキッとした。だって、バースチの胸元が大きく開いてるんだ

もん！

「私、そのビジョンまだ見たことないんです。星野哲郎、対、鰐淵武人！一緒に見てもいいですか！？」

「お、おおう。もちろんだ！俺と一緒にテツローラさんの熱き血潮を共有しようぜッ！」

「はこつー 共有しましょー！」

「よっしゃー それじゃあ、いへぜー テツローアーカイブへ、レツツ・アクセス！」

俺は指輪をはめると、キノちゃんの手をギュッと握りしめた！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2406n/>

---

魔女の夜

2011年6月21日19時20分発行